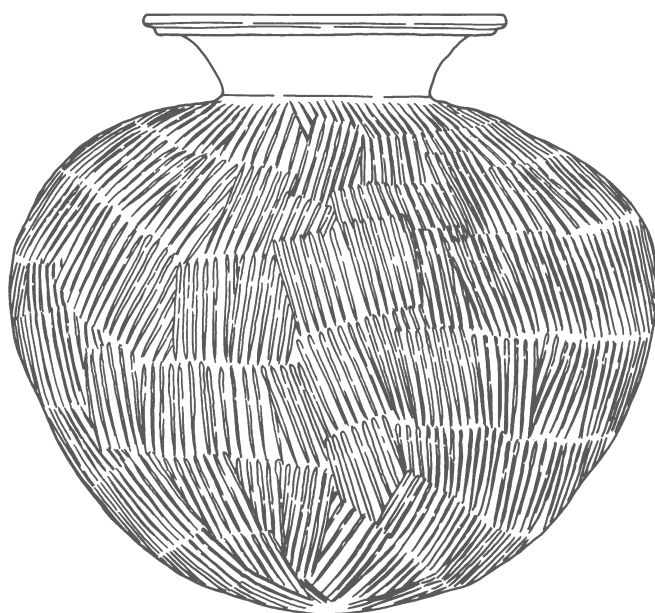


具同中山遺跡群 - 2

中村・宿毛道路高規格道路建設に伴う発掘調査報告書



2000.7

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

具同中山遺跡群 - 2

中村・宿毛道路高規格道路建設に伴う発掘調査報告書

2000.7

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



SF - 2(南より)



SF - 5(南より)



14

須恵器(甕)



11

土師器(甕)



弥生土器・土師器(甕)



土師器(鉢),須恵器(杯)

序

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、高知県教育委員会が平成4年度から建設省四国地方建設局の委託を受けた中村宿毛道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。高規格道路である中村宿毛道路が計画されている四万十川の支流中筋川流域は、縄文時代以降の遺跡が密集する地域であり、古墳時代の祭祀関連遺跡などが確認されています。

本書は、平成11年度前半期に実施した中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群-2の発掘調査報告書です。また、ほぼ同時期に県道中村下ノ加江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しており、それにつきましても本年度中に報告書としてまとめる計画です。今回の調査では弥生時代、古墳時代の祭祀関連遺構が検出され、遺物の編年や遺跡と地形の関係を考察していく上で貴重な資料を得ることができました。この報告書が埋蔵文化財の保護、さらには今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表すると共に、調査、報告書作成では関係各位に多大な御指導並びに御教示を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

平成12年5月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は中村宿毛高規格道路建設計画に伴い平成11年度に実施した具同中山遺跡群 - 2の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 具同中山遺跡群は高知県中村市具同に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも古墳時代の祭祀に特筆される。発掘調査は平成11年5月から9月まで実施した。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

総 括 - 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸(平成11年度), 門田伍朗
総 務 - 同総務課長 島内信雄, 同主任 山本三津子, 同主幹 大原裕幸, 臨時職員 大橋真弓

調査総括 - 同調査課長 西川裕(平成11年度), 重森勝彦

調査担当 - 同調査第四班長 廣田佳久, 同主任調査員 畠中宏一(現高知県教育委員会文化財保護室社会教育主事), 同調査員 久家隆芳, 技術補助員 岡村朋美, 測量補助員 野町和人 岡崎真紀

5. 本書の執筆は廣田の指導のもと調査の方法以外を畠中が担当した。編集等は廣田が行った。現場写真は畠中, 遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺跡の略号は「99 - 3GNN」とし, 出土遺物の註記等にはこれを使用している。報告書に掲載の縮尺率はそれぞれに示した。遺構についてはSF(祭祀集中箇所), P(柱穴)で表記した。
7. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって, 下記の方々の指導並びに貴重なご教示, ご助言を賜り協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

滝澤洋, 多田仁(愛媛県埋蔵文化財調査センター), 西村美代(大方町教育委員会), 松岡利光, 佐田守男, 小林麻由(中村市教育委員会), 松岡陽一, 矢木伸欣(宿毛市教育委員会), 出原恵三, 廣田佳久, 松田直則, 高橋厚彦, 伊藤強, 下村裕, 田中涼子, 筒井三菜, 久家隆芳, 武吉真裕(埋蔵文化財センター職員)

8. 遺構, 遺物の測量及び写真撮影は各調査員, 技術補助員, 測量補助員が行い, 測量には新たに設置した3級基準点を使用した。
9. 発掘調査及び遺物整理, 報告書作成については, 下記の方々に協力頂いた。

発掘調査

秋森広松 岡崎桂子 岡本里以 岡本覚 岡本寿美子 岡本寅美 岡本弘美 岡本芳子 沖和子 川村勉 沢田建男 長崎竹美 中山昭子 中山友男 布陽子 野並廬 浜田昌一 平地五月 前田耕作 松本菊美 森本勝一 山脇良幸

上記の方々には酷暑の中, 労を厭わず作業に協力して頂いた。記して感謝の意を表したい。

遺物整理，報告書作成

岡本智子 浪除美千子 西村美喜

上記の方々には整理作業を担当して頂いた。記して感謝の意を表したい。

10. 調査にあたっては，建設省四国地方建設局中村工事事務所，社団法人高知県建設技術公社，高知県中村土木事務所のご協力を頂いた。また具同地区長をはじめ地元住民の方々に，遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き，厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物，その他図面類の関係資料は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 調査の契機と経過	
1. 契機と経過	1
2. 調査日誌抄	3
第 章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	9
2. 歴史的環境	11
第 章 調査の概要	
1. 調査の方法	15
2. 調査区の概要	16
(1) 調査区の概要	16
(2) 基本層序	17
(3) 包含層出土遺物	22
第24層	22
第25層	25
第34層	26
第 章 遺構と遺物	
1. 遺物	27
(1) 弥生土器	27
(2) 土師器	28
(3) 土製品	29
(4) 須恵器	29
2. 遺構と遺物	31
(1) 弥生時代	31
祭祀関連遺構	31
SF - 1	31
SF - 2	33
SF - 3	37
(2) 古墳時代	39
祭祀関連遺構	39
SF - 4	39
SF - 5	42
SF - 6	43

SF - 7	49
ピット	51
第 章 考察	
1. 弥生時代について	53
2. 古墳時代について	56
3. まとめ	57
第 章 自然科学(土壌分析)分析	
はじめに	59
1. 層序と試料	59
2. 分析方法	60
3. 結果	61
4. 考察	66

挿 図 目 次

第 1 図 中村市及び具同中山遺跡群位置図.....	1
第 2 図 高規格中村宿毛道路計画路線図及び関連遺跡位置図(S=1:100,000)	2
第 3 図 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図(S=1:10,000).....	4
第 4 図 洪水時の遺跡周辺写真.....	7
第 5 図 高知県地質区分図(S=1:10,000)	9
第 6 図 四万十川・中筋川流路変遷図	10
第 7 図 遺跡周辺小字図(S=1:10,000).....	11
第 8 図 周辺の遺跡分布図及び地形分類図(S=1:50,000).....	12
第 9 図 遺跡周辺の地形図(S=1:50,000)	15
第 10 図 調査区全体図及び基準点配置図	16
第 11 図 確認トレンチ及び平成 5 年度試掘トレンチ位置図	17
第 12 図 調査区及び周辺地形図	18
第 13 図 調査区西部南壁セクション	19
第 14 図 調査区東部南壁セクション	20
第 15 図 D トレンチ西壁セクション	21
第 16 図 第 24 層出土遺物実測図(土師器 , 須恵器)	23
第 17 図 第 25 層出土遺物実測図(弥生土器).....	25
第 18 図 第 34 層出土遺物実測図(弥生土器).....	26
第 19 図 SF - 1 ~ 3 遺構配置図.....	30
第 20 図 SF - 1 遺物出土状態(弥生土器).....	31

第21図	SF - 1 出土遺物実測図(弥生土器)	32
第22図	SF - 2 遺物出土状態(弥生土器)	34
第23図	SF - 2 出土遺物実測図(弥生土器)	36
第24図	SF - 3 遺物出土状態(弥生土器)	37
第25図	SF - 3 出土遺物実測図(弥生土器)	38
第26図	SF - 4 ~ 7 遺構配置図	39
第27図	SF - 4 遺物出土状態(土師器 , 須恵器)	40
第28図	SF - 4 出土遺物実測図(土師器)	41
第29図	SF - 4 出土遺物実測図(須恵器)	42
第30図	SF - 5 遺物出土状態(土師器)	43
第31図	SF - 5 出土遺物実測図(土師器)	45
第32図	SF - 6 遺物出土状態(土師器 , 須恵器)	47
第33図	SF - 6 出土遺物実測図(土師器 , 須恵器)	48
第34図	SF - 7 遺物出土状態(土師器 , 須恵器)	49
第35図	SF - 7 出土遺物実測図(土師器 , 須恵器)	50
第36図	ピット平面図	52

表目次

第1表	建設省関連埋蔵文化財発掘調査一覧	4
第2表	周辺の遺跡一覧	13
報告書抄録		

図版目次

巻頭図版1	SF - 2(南より) SF - 5(南より)	PL. 4	南壁セクション1(北より) 南壁セクション2(北より)
巻頭図版2	須恵器(甕) 土師器(甗)	PL. 5	Aトレンチセクション(東より) Dトレンチセクション(東より)
巻頭図版3	弥生土器(甕) , 土師器(甕)	PL. 6	SF - 1 遺物出土状態1(南より) SF - 1 遺物出土状態2(東より)
巻頭図版4	土師器(鉢) , 須恵器(杯)	PL. 7	SF - 2 遺物出土状態1(北より) SF - 2 遺物出土状態2(東より)
PL. 1	調査前全景(東より) 調査前全景(西より)	PL. 8	SF - 3 遺物出土状態1(西より) SF - 3 遺物出土状態2(西より)
PL. 2	区完掘状態(西より) 区完掘状態(東より)	PL. 9	SF - 4 遺物出土状態1(西より) SF - 4 遺物出土状態2(西より)
PL. 3	区第24層遺物出土状態(西より) 区完掘状態(西より)		

- PL.10 SF - 5遺物出土状態1(南より)
SF - 5遺物出土状態2(南より)
- PL.11 SF - 6遺物出土状態1(西より)
SF - 6遺物出土状態2(西より)
- PL.12 SF - 7遺物出土状態1(西より)
SF - 7遺物出土状態2(東より)
- PL.13 ピット完掘状態1(南より)
ピット完掘状態2(北より)
- PL.14 第24層遺物出土状態(2)
第24層遺物出土状態(4,5)
第24層遺物出土状態(9)
第24層遺物出土状態(12)
第24層遺物出土状態(13)
第24層遺物出土状態(14)
第25層遺物出土状態(15)
第25層遺物出土状態(22)
- PL.15 須恵器(甕)
土師器(甕,高杯)
- PL.16 土師器(器台),土製品(土錘)
弥生土器(壺,甕,鉢)
- PL.17 弥生土器(甕)
弥生土器(甕)
- PL.18 弥生土器(甕)
弥生土器(甕,鉢)
- PL.19 土師器(甕,高杯,器台),須恵器(杯身)
土師器(甕)
- PL.20 土師器(椀)
土師器(甕)
- PL.21 土師器(高杯)
土師器(椀)
- PL.22 土製品(土錘),弥生土器(甕)
- PL.23 弥生土器(甕),土師器(壺,甕,高杯)
- PL.24 土師器(脚付椀,甗),須恵器(甗),弥生
土器(鉢,壺)
- PL.25 弥生土器(甕,鉢),土師器(壺)
- PL.26 土師器(甕,高杯,椀)
- PL.27 土師器(高杯,椀)
- PL.28 土師器(壺),弥生土器(甕,鉢),須恵器
(杯蓋,杯身)
- PL.29 須恵器(杯身,杯蓋),土師器(椀,壺)

自然科学分析(土壤分析)報告

挿図目次

- 図1 各地点の模式柱状図および分析層位
図2 主要珪藻化石群集の層位分布
図3 植物珪酸体群集の層位分布
図4 自然科学分析結果の概要

表目次

- 表1 珪藻分析結果
表2 植物珪酸体分析結果
表3 腐植分析結果

図版目次

- 図版1 珪藻化石(1)
図版2 珪藻化石(2)
図版3 植物珪酸体

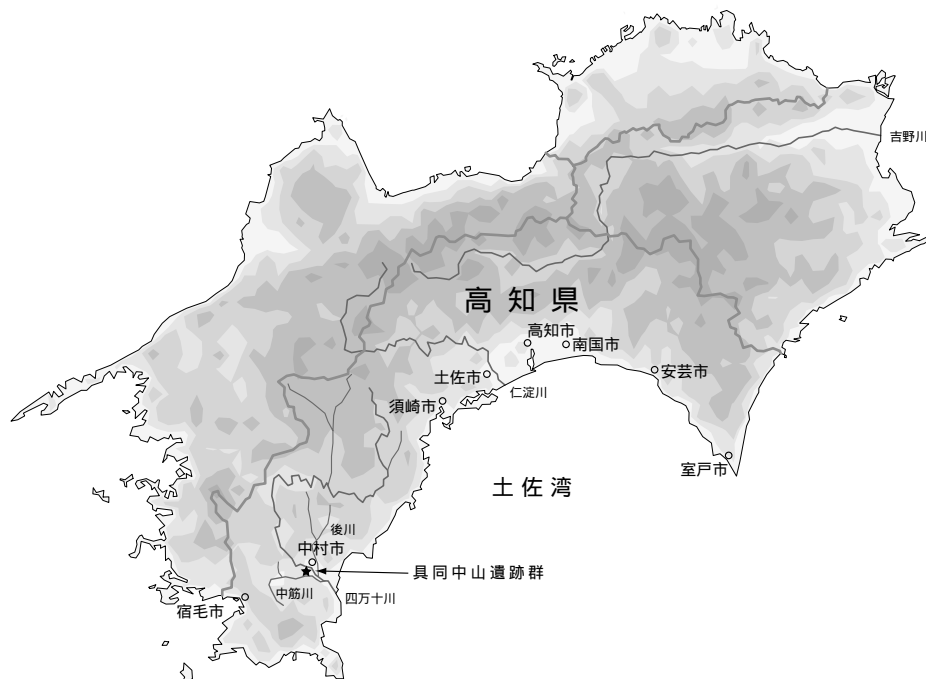
第 章 調査の契機と経過

1. 契機と経過

(1) 具同中山遺跡群の発見の経緯

具同中山遺跡群は四万十川に下流で合流する支流中筋川下流左岸に所在する遺跡群である。四万十川は上流の流域面積が広く、降水量が急増した時にはたびたび下流域で洪水をもたらした。支流の中筋川流域は、四万十川合流地点附近では本流からの土砂の堆積のために、下流になるほど標高が高くなるという特徴を持った地形である。また、中筋川では洪水時に流量の多い四万十川本流の水位の方が高くなるため、合流地点から上流に向かって逆流現象が起きる。このような原因から具同中山遺跡群周辺は四万十川流域のなかでも洪水による被害をたびたび受けてきた地域となっている。資料で確認することができた範囲では、野中兼山による改修工事が竣工された1659(万治2)年から明治中期までの約230年間に、水位10m以上の大洪水に23回、水位6m程度の中洪水に76回、水位4m程度の小洪水には1,000回近くみまわれている⁽¹⁾。1899(明治22)年の洪水の被害は特に大きく、建設省は1921(大正10)年に臨時治水調査会で四万十川(当時の名称は渡川)を直轄河川として選定した⁽²⁾。昭和4年には改修工事起工式が挙行され中筋川も本流合流点から上流へ11kmが改修計画区間となったが、太平洋戦争などのため当初の14カ年計画は延期を余儀なくされた⁽³⁾。

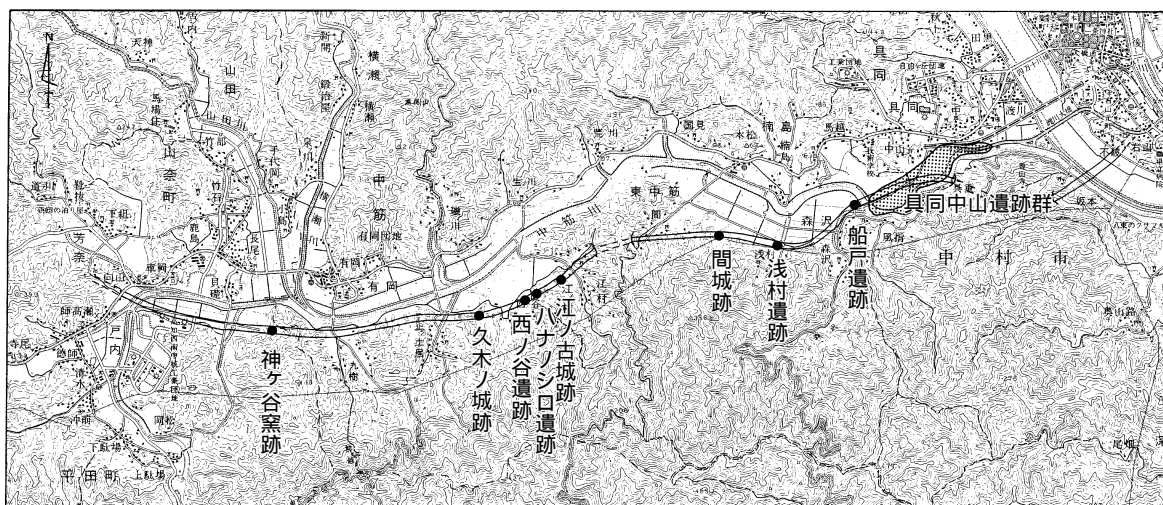
四万十川流域の改修工事の過程では1935(昭和10)年の入田遺跡を始め、古津賀・佐岡遺跡など弥生時代以降の遺物を出土する多くの遺跡が発見された。昭和26年から27年にかけての工事は坂本、山路、安並、古津賀の各地で実施されたが、具同中山地区でも中筋川左岸で1,650mの区間で河床掘削工事を行い、この掘削土を利用して2,000mの新堤を建設する工事が実施された。この際に郷土の



第1図 中村市及び具同中山遺跡群位置図

考古学研究者木村剛朗氏によって弥生土器，土師器，須恵器，手捏土器などが発見され，小字の名称をとってボケ遺跡，東神木遺跡とそれぞれ命名された。ボケ遺跡については岡本健児氏はボケ・川原崎遺跡として紹介しているため，同名の小字まで遺跡の範囲が広がっていた可能性がある。また，同時期にその下流でも石丸遺跡が発見された。ここでは土器，石器と共に青銅器が出土しており，郷土史研究家上岡正五郎氏の報告を受けた岡本健児氏によって7月20日から3日間調査が実施されている⁽⁴⁾。

その後，数多くの表採資料をもとに研究が進められ，古墳時代の祭祀遺跡として岡本健児氏や井本葉子氏によって全国で紹介され，河川祭祀を研究する上で注目される遺跡となった⁽⁵⁾。具同中山遺跡群は，当初上記のように出土地点の小字名を付け紹介されていたが，昭和61年度の調査で小字の範囲以上に遺跡の範囲が広がることが確認され，同年実施された高知県遺跡詳細分布調査で広域的に具同中山遺跡群と改称された⁽⁶⁾。



第2図 高規格中村宿毛道路計画路線図及び関連遺跡位置図(S=1:100,000)

(2) 具同中山遺跡群の発掘調査の経緯

具同中山遺跡群の発掘調査は，中筋川の河川改修工事に伴う緊急発掘調査として始まった。まず，昭和59・60年度に石丸・中山地区で実施した試掘調査の結果を受けて，昭和61年度初めて本格的な発掘調査が行われた⁽⁷⁾。引き続き昭和63年にも試掘調査を実施し，平成元～3年にかけて本調査が実施された⁽⁸⁾。

その後，建設省四国地方建設局中村工事事務所は高知西南中核工業団地等の開発等に伴うさらなる交通需要の増加に対応するため，将来は四国横断自動車道と一体となって全国的高速ネットワークを形成するための自動車専用道路として高規格中村宿毛道路の建設計画を進めることとなった。建設計画を推進するために昭和48年には事前調査が開始され翌49年にはルート承認が行われた⁽⁹⁾。また，間インターチェンジ建設計画地と中村市街地を結ぶ地域に該当する具同地区では，交通網整備のため県道中村下ノ加江線の改良計画や市道高橋線の建設計画も同時に進められた。

具同地区を始めとする中筋川流域は遺跡の密集地帯として周知されているため，計画路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の保護について建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は

協議を積み重ねた結果，計画路線変更が不可能な埋蔵文化財包蔵地について，平成3年度から財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが試掘調査を実施し，その結果に基づき発掘調査を実施することとなった。具同中山遺跡群では平成6年度より高規格中村宿毛道路，平成9年度より県道中村下ノ加江線，平成10年度には市道高橋線それぞれの建設に伴う発掘調査が実施されている⁽¹⁰⁾。

(3)具同中山遺跡群 - 2の発掘調査に至る経緯

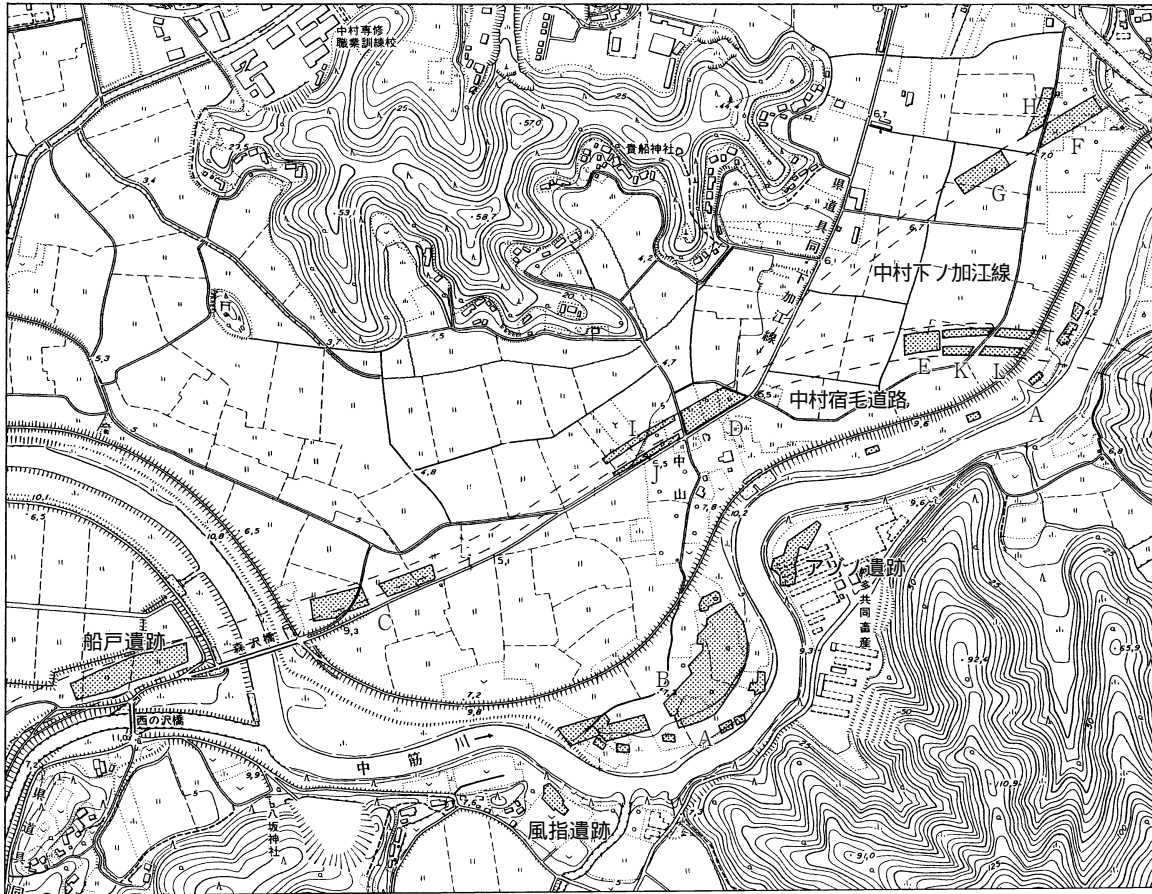
平成11年度調査対象となった具同中山遺跡群 - 2は平成7年度に発掘調査された具同中山遺跡群 - 1の西側に位置する。調査対象地域は北側に高規格中村宿毛道路が，南側に県道中村下ノ加江線が併走する形で建設される区域に当たる。本書で報告する調査対象区域は高規格中村宿毛道路建設部分の北半分である。

本調査は平成5年度に実施された試掘調査の結果に基づき⁽¹¹⁾，遺物の集中する範囲を中心に発掘調査を実施することとなった。なお，県道中村下ノ加江線建設範囲についてもほぼ同時期に発掘調査が実施された。

註

- (1)『渡川改修四十年史』 建設省四国地方建設局中村工事事務所 1970
- (2)『四国の清流 ふるさとの川』 建設省四国地方建設局 1992
- (3)山崎進 「近代・現代編 第八章 渡川の改修」『中村市史』 中村市史編纂室 1969
- (4)『渡川改修四十年史』 建設省四国地方建設局中村工事事務所 1970
- 橋田庫欣 「考古編」『中村市史』 中村市史編纂室 1969
- 岡本健児 「四国」『神道考古学講座 第二巻 原始神道期一』 雄山閣 1972
- 岡本健児 「高知県幡多郡石丸遺跡」『日本考古学年報4 昭和26年度』 日本考古学協会 1955
- (5)前田光雄・松田直則・廣田佳久・江戸秀輝 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群 第一分冊』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- 具同中山遺跡群の範囲内で土製勾玉が出土した引舟遺跡が紹介されている例があるが，岡本健児氏(「四国」『神道考古学講座 第二巻 原始神道期一』 雄山閣 1972)によると出土地点の誤りであり，土製勾玉が出土した遺跡は舟付場遺跡のことであると訂正されている。舟付場遺跡は，井本葉子氏(「高知県の祭祀遺跡について」『高知の研究 1 地質・考古篇』 清文社 1983)によれば現在の船戸遺跡の範囲内になる。
- (6)出原恵三・廣田佳久・松田直則・山本哲也 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 古津賀遺跡 具同中山遺跡群』 高知県教育委員会 1988
- (7)(6)と同じ
- (8)前田光雄・松田直則・廣田佳久・江戸秀輝 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群 第一分冊』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- (9)『outline of NAKAMURA 1999 DATE 平成11年度事業概要』 建設省四国地方建設局中村工事事務所 1999
- (10)松田直則・伊藤 強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜 『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 具同中山遺

(11)平成5年度に実施された試掘調査の結果の概略については「第 章 調査の概要 1. 調査の方法」において記すこととする。



第3図 具同中山遺跡群及び周辺遺跡の調査区位置図(S=1:10,000)

第1表 建設省関連埋蔵文化財発掘調査一覧

場所	調査年度	調査原因	名称
A	昭和61年度	後川・中筋川河川改修	具同中山遺跡群
B	平成元～3年度	後川・中筋川河川改修	具同中山遺跡群
C	平成6年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群
D	平成7年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群 - 1
E	平成8年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群 - 1
F	平成9年度	県道中村下ノ加江線建設	具同中山遺跡群
G	平成10年度	県道中村下ノ加江線建設	具同中山遺跡群
H	平成10年度	市道高橋線建設	具同中山遺跡群
I	平成11年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群 - 2
J	平成11年度	県道中村下ノ加江線建設	具同中山遺跡群 - 2
K	平成11年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群 - 2
L	平成12年度	高規格中村宿毛道路建設	具同中山遺跡群 - 3

2. 調査日誌抄

1999年5月10日から9月6日

5.10 本日より発掘調査を開始する。・区とも地表下約1mまでPC200を使って掘削する。排土は11tトラックで運搬した。

5.11 PC200による掘削を引き続き実施する。調査区北西端に排水用貯水施設を設置する。

5.12 PC200による掘削を引き続き実施する。排土処理を円滑にするため、排土置き場を整備する。

5.13 PC200による掘削と排土置き場の整備を引き続き実施する。調査区北西端にサブトレンチを掘削する。

5.14 PC200による掘削と排土置き場の整備を引き続き実施する。排水管を設置する。

5.17 PC200による掘削を引き続き実施する。調査区南壁セクション図を作成する。

5.18 雨天のため機械掘削は中止。排水施設を設置する。

5.19 PC200による掘削を引き続き実施する。調査区西壁南壁に崩壊防止のためトレンチシートを設置する。現場用ユニットハウスを設置する。

5.20 PC200による掘削と調査区南壁セクションの実測を引き続き実施する。

5.21 本日より西側(区)から第25層(包含層)までPC120を使って掘削する。排土は区東側に置くこととした。調査区南壁セクションの実測を引き続き実施する。

5.24 雨天のため現場作業は中止。

5.25 PC120による掘削を引き続き実施する。

5.26 PC120による掘削を引き続き実施する。

5.27 雨天のため午前中は現場作業中止。午後は水汲み作業。

5.28 平成11年度第1回高知県埋蔵文化財センター情報交換会のため作業中止。

5.31 PC120による掘削を引き続き実施する。調査第区では排水のため北側側溝を掘削したところ、第24層(包含層)から須恵器甕片が出土した。

6.1 PC120による掘削を引き続き実施する。排水施設を再整備する。

6.2 PC120による掘削を引き続き実施する。調査区周辺に測量基準点を設置する。

6.3 雨天のため現場作業中止。

6.4 雨天のため現場作業中止。

6.5 雨天のため現場作業中止。

6.6 雨天のため現場作業中止。

6.7 雨天のため現場作業中止。

6.8 PC120による掘削を引き続き実施する。区に設定した排土置き場が狭くなったため、11tトラックで排土を搬出する。

6.9 PC120による掘削を引き続き実施する。第25層よりSF-1を検出し、測量、写真撮影を実施し、出土遺物の取り上げを行う。11tトラックによる排土の搬出作業を引き続き行う。

6.10 PC120による掘削を引き続き実施する。SF-1の一部を検出し、測量、写真撮影を実施し、出土遺物の取り上げを行う。

6.11 PC120による掘削を区の範囲の東端まで

5 月

月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6 月

月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

行った。

6.14 区の一部をPC120によって掘削。区の完掘写真のため調査区を清掃する。11tトラックによる排土運搬を行った。

6.15 前日の雨により調査区の状況が不良のため現場作業を中止する。

6.16 区第25層よりSF - 3を検出し、測量、写真撮影を実施し、出土遺物の取り上げを行う。区の清掃後、完掘状態の写真を撮影する。また、一部でピット群を検出した。

6.17 区の南壁セクションの写真撮影を行い実測した。引き続きピット群を調査する。

6.18 引き続きピット群の調査を行う。第24層中で土師器甕が出土した。

6.21 第25層を掘削したところSF - 2を検出し、写真撮影及び測量後遺物を取り上げた。トレンチAを調査し写真撮影及び測量を実施した。

6.22 雨天のため現場作業中止。

6.23 雨天のため現場作業中止。

6.24 本日より 区西側からPC120を使って第24層上面まで掘削を始める。

6.25 雨天のため現場作業中止。

6.28 区の土層掘削を引き続き行う。

6.29 雨天のため現場作業中止。

6.30 区の土層掘削を引き続き行う。土壌分析のためのサンプリングを行う。

7.1 区の土層掘削を引き続き行う。区では下層確認を再開し第25層を掘削した。

7.2 雨天のため現場作業中止。

7.5 区の土層掘削を引き続き行うと共に11tトラックで排土の搬出を行う。区では下層確認を

引き続き行い第25層を掘削し、SF - 2全体を検出する。

7.6 区の土層掘削を引き続き行うと共に11tトラックで排土の運搬を行う。区東端までの機械掘削を終了した。区ではSF - 2の写真撮影を行った。

7.7 区では人力により第24層掘削を行いSF - 4～7を検出した。土壌分析のためのサンプリングを行う。区ではSF - 2を測量後、遺物を取り上げ、下層確認を終了した。

7.8 人力により第24層掘削を引き続き行った。

7.9 人力により第24層掘削を引き続き行った。

7.12 人力により第24層掘削を引き続き行った。

7.13 雨天のため現場作業中止。

7.14 人力により第24層掘削を引き続き行った。並行して 区の南壁セクションの写真撮影を行い実測した。

7.15 人力により第24層掘削、南壁セクションの写真撮影及び実測を引き続き実施した。

7.16 人力により第24層掘削を引き続き行い調査区東端まで終了した。さらに東半分を第25層まで人力掘削することとした。第25層からは弥生土器が出土し、測量後取り上げる。南壁セクションの写真撮影及び実測を引き続き実施した。

7.19 人力により 区第25層掘削を引き続き行い東半分まで終了した。区東半分を人力より下層確認した。

7.21 雨天のため現場作業中止。

7.22 区東半分は下層確認が終了し完掘した。写真撮影のため 区を清掃した。

7 月

月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8 月

月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

7.23 区清掃後東半分の完掘状態の写真撮影を行う。西半分はSF - 4 ~ 7と第24層の遺物出土状態の写真撮影及び実測終了後取り上げを行う。

7.26・27 平成11年度第1回高知県埋蔵文化財センター職員専門研修会のため作業中止

7.28 台風による豪雨のため作業中止。周辺一帯が水没したため調査区の排水が不能となる。

7.29 雨天のため現場作業中止。

7.30 調査区の排水作業のため発掘作業中止。

8. 2 雨天のため現場作業中止。

8. 3 雨天のため現場作業中止。

8. 4 トレンチCを掘削し写真撮影及び実測を行う。

8. 5 雨天のため現場作業中止。

8. 6 雨天のため現場作業中止。

8.9 ~ 13 現場作業を休業とした。

8.16 調査区の清掃を行う。

8.17 雨天のため現場作業中止。

8.18 雨天のため現場作業中止。

8.19 調査区の清掃を行う。

8.20 雨天のため現場作業中止。

8.23 区西半分の第24層を掘削し、SF - 5の一部を調査する。

8.24 SF - 5を写真撮影測量後、遺物を取り上げる。続いて 区西半分の第25層を掘削する。

8.25 人力により第25層掘削を引き続き行った。

8.26 人力により第25層掘削を引き続き行った。

8.27 人力により第25層掘削を引き続き行った。

8.30 人力により第25層掘削を引き続き行った。

8.31 人力により第25層掘削を引き続き行った。弥生土器が出土し写真撮影及び実測後、取り上げを行う。

9. 1 区西半分の下層確認を人力掘削により行

9 月

月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			



第4図 洪水時の遺跡周辺写真

う。

9.2 引き続き 区西半分の下層確認を人力掘削により行う。写真撮影のため調査区を清掃する。

9.3 調査区を清掃後、完掘状態の写真を撮影する。

9.6 トレンチDを調査し写真撮影と測量を行う。第34層から弥生中期の壺片1点が出土するが、他に遺構、遺物は確認できず、発掘調査は終了する。

第 章 遺跡の地理的・歴史的環境

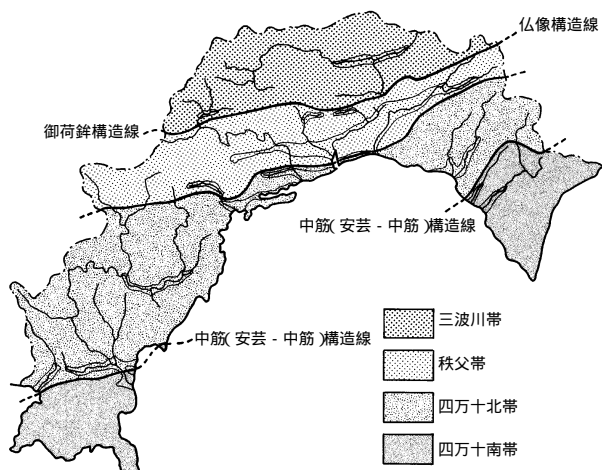
1. 地理的環境

具同中山遺跡群は地質学的には中筋構造線とその北に平行する断層によって形成された中筋地溝帯に所在する。なお、具同地区は四万十帯北帯に属する有岡層の分布する範囲であるが、その上部には中筋川の運んできた土砂が分厚く堆積している。地溝帯は周囲の降水が集まり河川の流路となることが多く、堆積作用によって様々な小地形が形成されることが多い。中筋地溝帯にも完新世の沖積層が厚いところでは80m以上も堆積している⁽¹⁾。遺跡が所在する中筋地溝帯東部は四万十川合流地点に比較的近いいため洪水時の本流からの土砂の堆積が多く、海拔高度約8mに及ぶ自然堤防が形成されている⁽²⁾。この大量の堆積物のため、中筋川下流域は合流地点に近づくほど標高が高くなり、本流から遠くなるほど低くなるという洪水の発生しやすい地形となった。また中筋川も洪水時の土砂で自然堤防を形成するため、河川に近づくほど標高が高くなるという地形的な特徴を有する。

具同中山遺跡群はこうして形成された自然堤防上に立地し、西方並びに北方に向かって傾斜している。現在まで具同中山遺跡群で遺物が採取された場所や試掘調査の結果によって本調査が実施された場所は、いずれも四万十川本流または中筋川に近く、自然堤防の中でも比較的標高の高い場所である。今回の調査区は中筋川が北に少し彎曲し、自然堤防も河川に沿って北に張り出した地点である。自然堤防の北側(調査区北側)の低地には洪水の時に溢れた水が溜まって後背湿地となっていたとみられる。後背湿地の水は自然堤防を越えることができず、比較的標高の低い西方に向かって流れ、具同中山遺跡群が所在する場所より少し上流で中筋川に流れ込む。

遺跡の地理的環境を考える上で、当時の地形を復元することは重要であるが、平成6・7年度の調査で流路が検出されたこと以外、現在の地形と大きな相違点を示唆する成果は特に確認されていない⁽³⁾が、本遺跡の立地に大きな影響を及ぼす四万十川や中筋川は何度も流路を変更している。

四万十川はかつて具同西山麓に沿って流れ、坂本の具重において中筋川と合流していた時代(前川時代)がある。また、その少し東側を流れ、中筋川ゴゼ礁において合流していた時代(古川時代)も



第5図 高知県地質区分図(S=1:10,000)

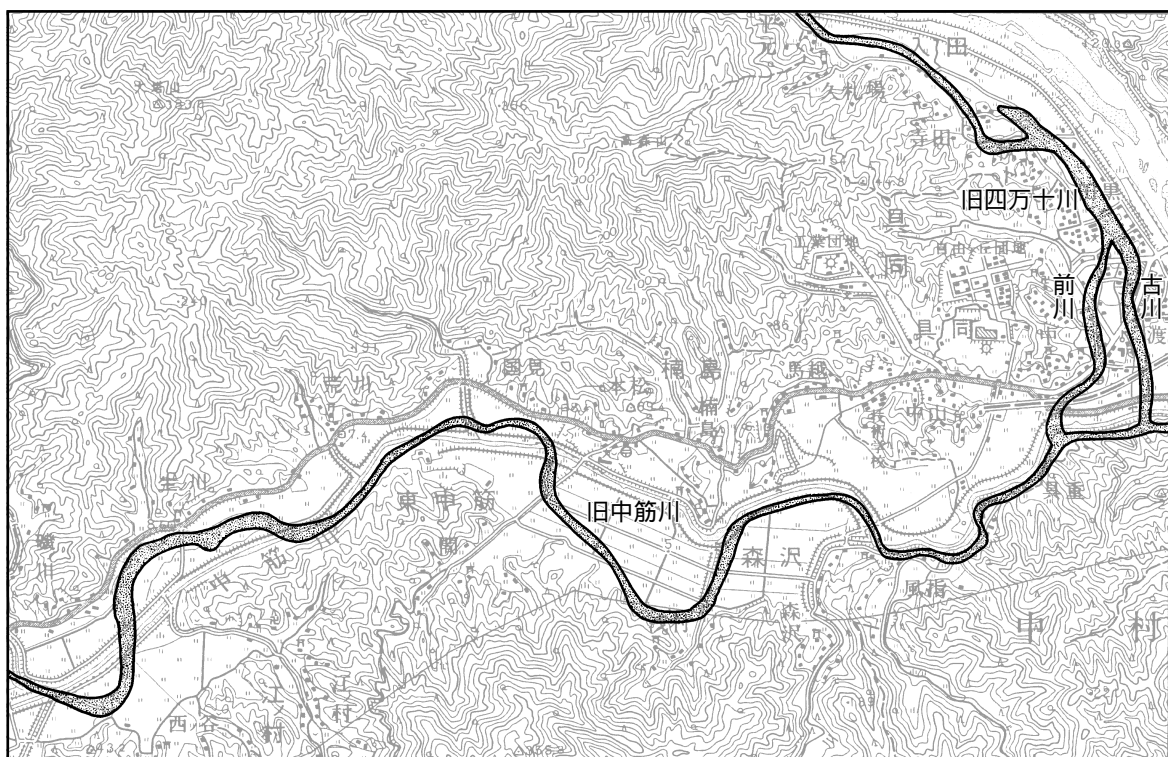
ある。その後、1009(寛弘6)年の洪水時に流れが東に変わり、ほぼ現在の流れになったといわれる。現在も前川・古川時代の流路跡には小さな池などが残存する⁽⁴⁾。今回の調査区では弥生・古墳時代の遺物が確認されており、当時の流路を確定することはできないが、前川時代の流路の西側は山地となっているところからこれよりさらに西側に流路があったとは考え難く、流路は前川時代とほぼ同じ位置だったと推測され、当時は、四万十川本流が現在よりも具同中山遺跡群の近くを流れてい

た可能性が強いものとみられる。なお、近世以降野中兼山に始まる中筋川の改修が行われているが、遺跡周辺の地形の改変を確認することはできない。

また、遺跡周辺には多くの小字(ホノギ)が残っている。これらの多くは中世以降のもので今回の遺構、遺物とは直接関連しないが、それ以後の状況を知ることが可能である。『具同村大字具同全図』(昭和11年作成)『長宗我部地検帳』を参考にみると、遺跡の主体が立地する自然堤防頂部には「ボケ」(崖を意味する地名として使われることが多い)、「神ノ木」(信仰に関連する地名である可能性もあるが、「コウノキ」という音から自然堤防上の高地を表した可能性も考えられる。)などがあり、自然堤防縁辺部には「ウツゲバナ」「西ウツゲバナ」など自然堤防に接する後背湿地を意味する小字が残る。なお、『長宗我部地検帳』によると自然堤防上はそのほとんどが畠として利用され、自然堤防の北側の後背湿地は水田であったことと記されており、小字にも「永畑」などの畠名称や「池田」、「モウリ田」などの水田を表すものがみられる。

註

- (1) 『日本の地質 8 四国地方』 日本の地質「四国地方」編集委員会編 共立出版 1991
- (2) 『西南開発地域 土地分類基本調査 宿毛・土佐中村 5万分の1 国土調査』 高知県農林部農政課編 1974
- (3) 松田直則・伊藤 強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜 『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 具同 中山遺跡群』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
松田直則・伊藤強・山崎正明・竹村三菜 『平成7年度 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報 具同



第6図 四万十川・中筋川流路変遷図(S=1:50,000)

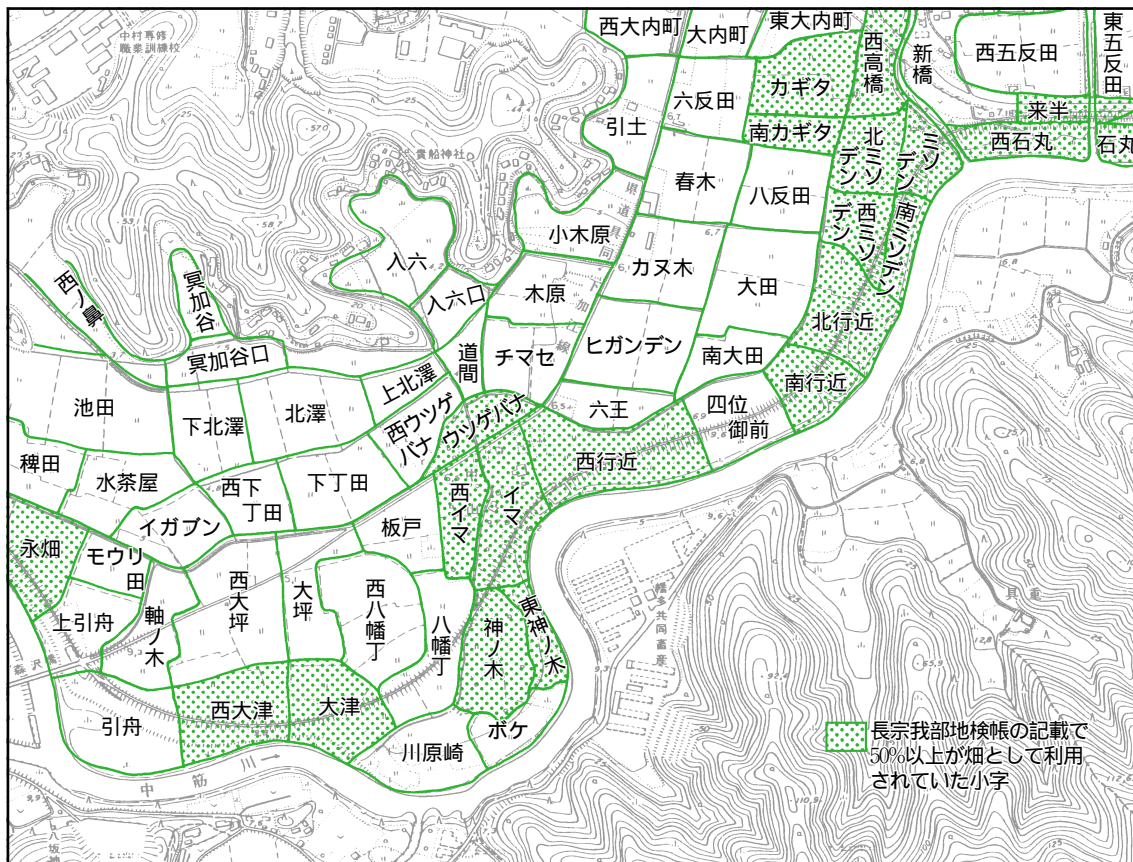
中山遺跡群 - 1』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
 (4)『渡川改修四十年史』建設省四国地方建設局中村工事事務所 1970

2. 歴史的環境

本遺跡群が位置する中村市は幡多郡内では最も多くの遺跡が確認されており、中でも中筋川流域は幡多郡下最大の平野部(中筋平野)を有し、主要な遺跡が所在する。以下、主だった遺跡についてみる。

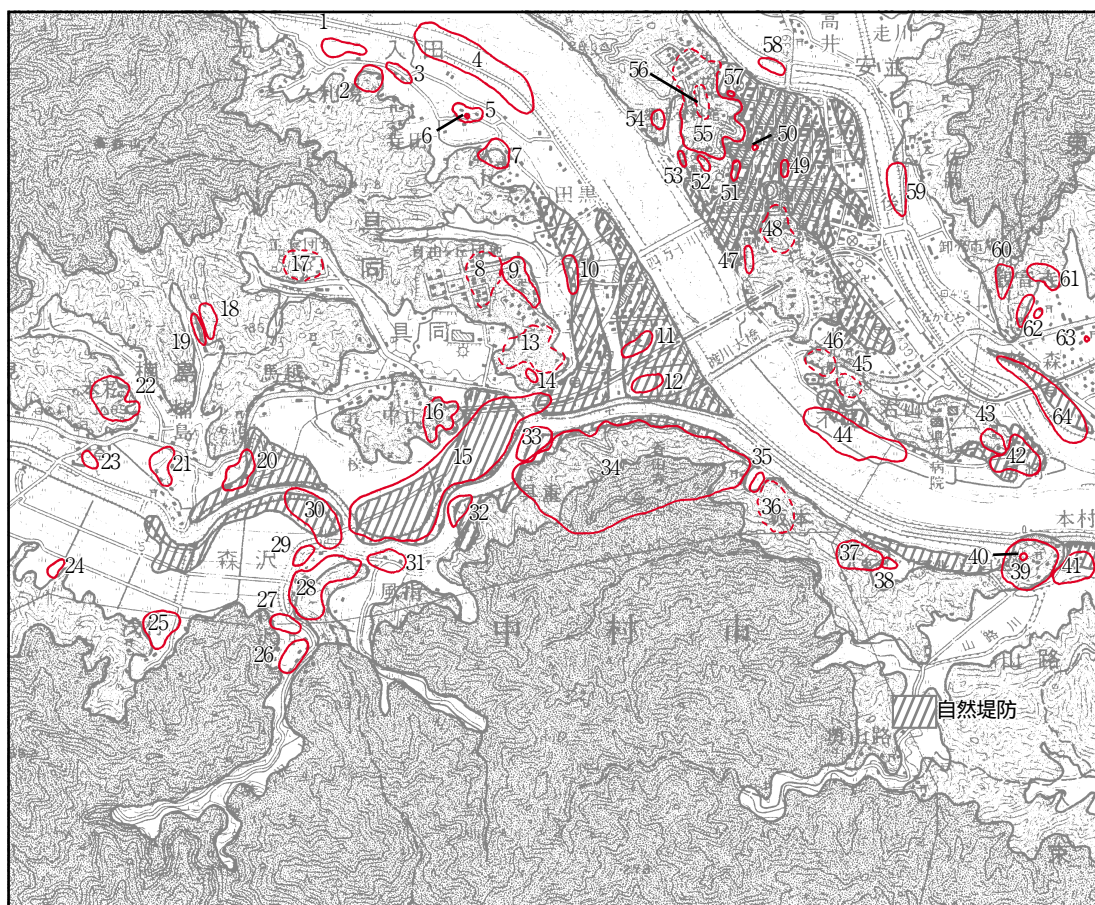
まず、旧石器時代の遺跡は後期以降のものに限られる。中村市内では双海中駄場遺跡が挙げられる。この時代の生業の中心は狩猟であると考えられ、かつては内陸であったとみられる海岸部の遺跡も含めて、山間部の河川近くの丘陵に生活の中心があったと考えられる。中筋川流域ではまだこの時代の生活の痕跡は確認されていないが、埋没尾根などに遺跡が発見される可能性もある。

縄文時代では早期に属するものとして中筋川流域では国見遺跡、渡川流域では大用遺跡があり、指標となる土器は出土していないが、表採された尖頭状石器、石鏃の形態からこの時期に人が居住していた可能性がある。共に石材には姫島産黒曜石がみられ、九州との交流を窺うことができる⁽¹⁾。大用遺跡の立地は草創期までの遺跡と同じであるが、国見遺跡は河岸段丘に位置しており、この時代の遺跡としては異色である。前期は縄文海進の時期であり中筋川流域も有岡付近までは大きな入り江だったと考えられ⁽²⁾、遺物としては大用遺跡で当該期のものとみられる石鏃が表採されている



第7図 遺跡周辺小字図(S=1:10,000)

のみである。中期は鬼界カルデラの噴火の影響が県内の遺跡の数も少なく、国見遺跡からでは船元式土器や里木式土器との関連が考えられる土器が発掘調査により出土し⁽³⁾、船元式土器が三里遺跡からも表採されている。大用遺跡では船元式・里木式土器が表採されている⁽⁴⁾。遺跡の立地は前期までとほぼ同じであるが、四万十川流域ではやや下流域の三里遺跡まで生活の痕跡がみられるようになる。後期になると遺跡の数は急増する。四万十川流域の三里遺跡では下益野式・宿毛式・三里式・片粕式土器が多数の石錘と共に、鳥打場遺跡では宿毛式土器、石錘、サヌカイト製石鏃が、踊り箸山遺跡では宿毛式・三里式土器、石錘、姫島産黒曜石製石鏃がそれぞれ表採されている。後川上流の大用遺跡でも宿毛式土器、石錘、サヌカイト製、姫島産黒曜石製石鏃が、中筋川流域の遺跡では国見遺跡で三里式土器が石錘、石鏃と共にそれぞれ表採され、船戸遺跡からは平城式土器、片粕式・西部九州の北久根山式・伊吹町式土器、東九州の西平式土器が発掘調査で出土している。ツグロ橋下遺跡では有岡K式土器が表採されている⁽⁵⁾。石鏃とともに石錘が出土する遺跡が多くみられ、狩猟とともに漁労が営まれていたことが考えられる。また、河川中上流域の遺跡に加えて、ツグロ橋下遺跡、船戸遺跡など中筋川流域の平野部にも生活圏が拡大してきたことが窺える。晩期では中筋川流域及び周辺にも代表的な遺跡が複数所在する。中村貝塚を始めとして入田遺跡、具同中山遺跡群、船戸遺跡、ツグロ橋下遺跡、久保田遺跡などで当該期の遺物が発見されている。遺跡の分布から活動の中心が平野部に移ってきており、農耕の可能性も考慮される。



第8図 周辺の遺跡分布図及び地形分類図(S=1:50,000)

弥生時代では前期の代表的な遺跡として遠賀川系土器と縄文時代晩期系土器が伴出した入田遺跡を挙げることができる。ツグロ橋下遺跡、久保田遺跡、国見遺跡、江ノ村遺跡などからも前期の遺物が確認されている。この時代になると自然堤防を中心に遺跡数が増加しており、出土した石庖丁などから湿地帯で稲作が行われていたと考えられる。中期では入田遺跡から前葉と中葉の土器が出土し、古城山遺跡、鉢ヶ森遺跡、佐田遺跡からは後葉の遺物が出土している。程岡遺跡、佐岡遺跡、西和田遺跡からも当該期の遺物が表採されている。本遺跡からも土器集中が確認されている。この時期は平野部の遺跡の他に高地の遺跡が多いのが特徴である。これらの遺跡では中期後半の神西式土器の出土例が多く、高地性集落が盛行する時期と一致する。また、具同中山遺跡群の石丸地区から中広形銅銚式が、山路城跡(山路遺跡)出土と伝えられている中広形銅銚式がそれぞれ出土している。後期では特に後半から終末にかけての土器を中心に本遺跡などから比較的多く出土している。外面に施されたタタキ目に特徴される土器であり、一部庄内式期～併行の土器も伴出するのが本地方の特色である。後期になると再び遺跡の立地が河川下流域の自然堤防に集中するようになり、祭祀関連遺構が目立つようになる。

古墳時代では、まず、前期古墳は県内に所在する4基のうち3基(高岡山1・2号墳、平田曾我山古墳)

第2表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	源池遺跡	弥生・中世	23	東中筋小学校々庭遺跡	古墳	45	濃ノ谷城跡	中世
2	本井城跡	中世	24	間城跡	中世	46	不破城跡	〃
3	今井遺跡	〃	25	浅村遺跡	弥生・中世	47	岩崎山遺跡	弥生
4	入田遺跡	縄文～弥生	26	ミヤゾエ遺跡	平安・中世	48	羽生古城跡	中世
5	秋トシ遺跡	弥生・中世	27	コラヤバタ遺跡	〃	49	中村御所跡	近世
6	秋トシ城跡	中世	28	森沢城跡	中世	50	一条教房墓	中世
7	長崎城跡	〃	29	森沢北ノ城跡	〃	51	中村貝塚	縄文
8	扇城跡	中世～近世	30	船戸遺跡	縄文～中世	52	久山遺跡	弥生
9	ナリカド城跡	〃	31	風指遺跡	弥生～中世	53	百笑遺跡	平安・中世
10	田黒遺跡	中世	32	アゾノ遺跡	古代～中世	54	吹越山遺跡	弥生
11	五反田遺跡	〃	33	具重・具重下遺跡	古墳・中世	55	中村(為松)城跡	中世～近世
12	永田遺跡	〃	34	香山寺跡	中世～近世	56	古城山遺跡	弥生・古代
13	栗本城跡	中世～近世	35	坂本遺跡	中世	57	一条房墓	中世
14	西和田遺跡	弥生	36	皇子山遺跡	〃	58	後川橋西遺跡	弥生
15	具同中山遺跡群	縄文～近世	37	サラガミネ遺跡	〃	59	佐岡遺跡	弥生～古墳
16	近沢城跡	中世	38	馬場谷遺跡	縄文・中世	60	観音寺遺跡	弥生
17	相ノ沢城跡	〃	39	山路城跡	中世～近世	61	観音寺城跡	中世
18	小才田城跡	〃	40	山路遺跡	弥生	62	古津賀サコヤシキ遺跡	〃
19	小才田遺跡	〃	41	曾我ノ前遺跡	中世	63	星野神社遺跡	〃
20	楠島西城跡	〃	42	角崎遺跡	古墳・中世	64	古津賀遺跡	古墳～中世
21	楠島城跡	〃	43	葛城々跡	中世			
22	大才田城跡	〃	44	不破遺跡	〃			

が中筋川上流域の宿毛市平田に所在する。主体部はいずれも一種の礫槨で、畿内の影響下に築造されたものと考えられる。中でも、平田曾我山古墳は県内唯一の前方後円墳ではないかといわれたことから波多国造との関連を考える見方もある。ともかく、これら前期古墳が中筋川上流域に集中していることはこの地域が政治的に重要な場所であったことには変わりないであろう。この下流には5世紀後半から6世紀初頭を中心とする本遺跡群がみられる。性格的には祭祀関連のものが大半であり、県内最大級の祭祀遺跡となっている。一方、この時期の古墳は全く確認されておらず、本遺跡群のあり方が注目される。この他には古津賀遺跡(本遺跡群が衰退する頃に最盛期を迎える。)、国見遺跡、船戸遺跡、江ノ村遺跡、角崎遺跡、佐岡遺跡などからもこの時期の遺物が発見されている。6世紀後半以降には横穴式石室を有する古墳も築造されるが数基と絶対数は少ない。ただし、古津賀古墳はその副葬品から幡多地域では最有力視される古墳である。

古代では、『倭名類聚抄』によると幡多郡には山田、枚田、宇和、大方、鯨野の5郷の存在が記されているが、郡衙を始めとして推定地はあるものの発掘調査で確認されたものはない。ただ、大方町宮崎遺跡からは官衙関連の遺物が比較的多く出土しており、大方郷の可能性が示唆される。本遺跡群及び周辺の風指遺跡、船戸遺跡、アゾノ遺跡から9世紀中葉から10世紀頃の搬入品を含めた遺物が出土している。平成10年度には神ヶ谷窯跡の発掘が行われ、8世紀後半から9世紀前半の須恵器が出土している。

中世では中筋川流域の発掘調査の件数が増えるに従って周辺の中世集落の様子も少しずつ明らかになってきている。本遺跡群を始めとして、船戸遺跡、アゾノ遺跡、風指遺跡、江ノ村遺跡、江ノ古城跡、ハナノシロ城跡、西ノ谷城跡などが所在し、それぞれ発掘調査が実施されその性格がほぼ判明している。

近世では中村城跡、扇城跡、栗本城跡などの発掘調査が実施され16世紀後半の遺物や遺構が確認されている。江ノ村遺跡では掘立柱建物跡が検出され、染付皿、鉄釉鉢などが出土し、塩塚城跡の発掘では18世紀～19世紀の近世陶磁器が出土している。

近現代の遺跡の調査は今のところほとんど実施されていない。なお、具同地区は1888(明治21)年の市制・町村制によって幡多郡具同村となり⁽⁶⁾、昭和29年中村町を含む11カ町村が合併し中村市が発足し、この時具同村も中村市に編入されることとなり現在に至る⁽⁷⁾。

註

(1) 木村剛朗 『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研 1987

(2) 橋田庫欣 「考古編」『中村市史』 高知県中村市 1969

(3) 曾我貴行 『国見遺跡』 高知県中村市教育委員会 1994

(4) (1)に同じ

(5) 木村剛朗 「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究 1 地質・考古篇』 清文社 1983

(6) 山崎 進 「近代・現代編 第一章 地方制度の変遷」『中村市史』 高知県中村市 1969

(7) 朝日陽一 「近代・現代編 第十一章 中村市」『中村市史』 高知県中村市 1969

第 章 調査の概要

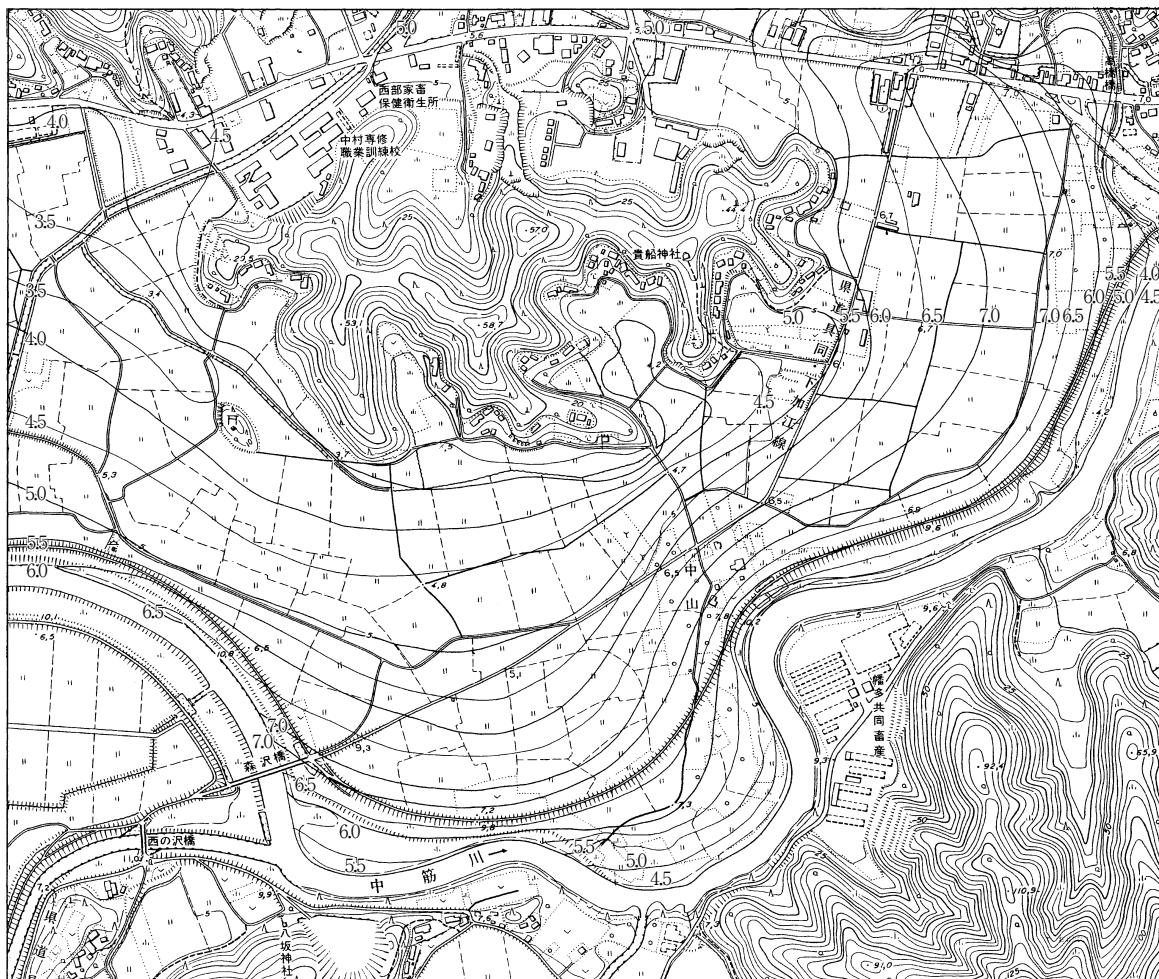
1. 調査の方法

平成5年度に実施した試掘調査の結果¹⁾に基づき、遺物包含層並びに遺物の集中が確認された延長108mを調査対象地とし、幅は当面工事に着工する計画となっている北半分約12m部分とした。

調査区は確認された遺物包含層の深度が約3.5mと深いことから二つに分け、西側をⅠ区、東側をⅡ区としⅠ区から順次調査を行った。また、道路等に隣接する部分については鋼矢板、法面については軽量鋼矢板をそれぞれ設置した。

調査は、重機で遺物包含層に影響がない層位まで掘削した後、すべて人力で行った。なお、両調査区とも下位の遺物包含層(弥生時代終末)調査後、確認トレンチを4カ所(A～Dトレンチ)設定し、下層確認を行った。

測量については、3級基準点、水準点を使用した。発掘調査面積は、弥生時代後期の面が889㎡、古墳時代中期の面が1,273㎡、確認トレンチが68㎡で、調査延べ面積は2,230㎡であった。



第9図 遺跡周辺の地形図(S=1:10,000)

註

(1) 松田直則・伊藤強・山崎正明・竹村三菜 『平成7年度 中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報 具同中山遺跡群 - 1』 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996

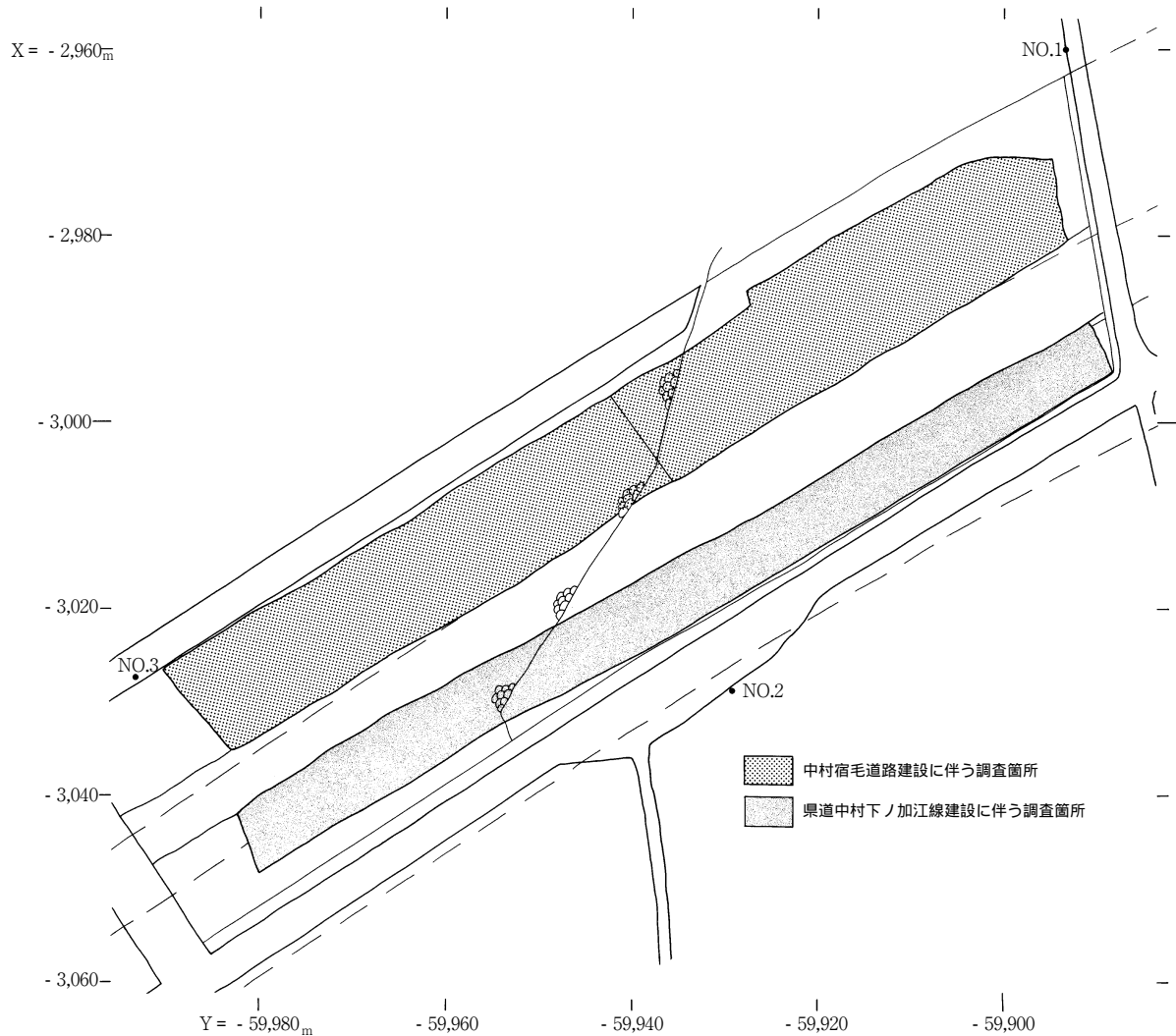
2. 調査区の概要

(1) 調査区の概要

調査区の現況は南東から北西に向かって緩やかな傾斜が認められ、確認された古墳時代中期の遺物包含層(第24層)と弥生時代終末の遺物包含層(第25層)も現在の地形とほぼ同じような傾斜を示していた。

第24層は調査区の東半分、中でも標高が比較的高い部分に遺物を多く包含しており、祭祀関連遺構と考えられるSF - 4 ~ 7も 区で検出された。ただ、第24層の土壌を埋土とするピット群は 区で検出された。また、第24層は調査区の東端では第19層によって削平されていた。

第25層は調査区の西半分、微高地から后背湿地にかけての斜面部に遺物を多く包含しており、祭祀関連遺構と考えられるSF - 1 ~ 3はいずれも 区で検出された。



第10図 調査区全体図及び基準点配置図

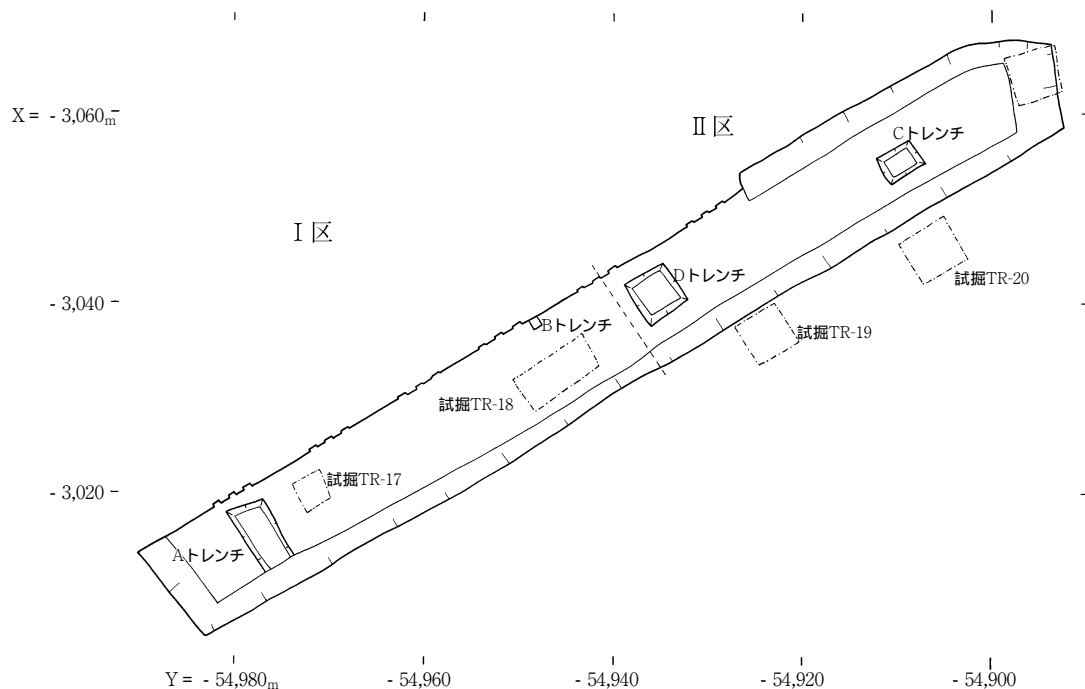
(2)基本層序

調査区の基本層序は比較的遺存状況の良い南壁のセクションと確認トレンチA・Dの西壁セクションで捉えることとした。各層とも全体的に東側が高く西に向かってやや傾斜する。

本遺跡群は中筋川流域に所在するため、通常堆積や洪水による堆積物が幾層にも重なっていると考えられる。分層は土層の色調、土質の違いによって行い、層序を47層に分層し上層から順にアラビア数字で呼称することとした。しかし、こうして分層した地層はそれぞれが異なる時期に堆積したとは限らない。一時期に堆積した堆積物は、その後上部が攪拌、土壌化されて色調、土質が変化し、下部の変質していない部分と異なる層位と認識されることが多いからである。そこで、今回の調査では色調、土質によって攪拌、土壌化された層をa層、堆積後変質していない層をb層と分類し、基本的には同時期に堆積した堆積物がa層とb層に分かれていると考え、できる限り第1～47層のどの層が同時期に堆積した地層に相当するかを認識しようと努めた。なお、堆積物の厚さや土壌化の期間などはそれぞれの時期によって異なるため、堆積物が薄い場合や土壌化の期間が長い時には、土壌化によってb層が消滅してa層が連続したり、過去に堆積した下層の堆積物まで同じように土壌化して区別が困難になる場合もあることを十分に考慮しておく必要がある。⁽¹⁾

以下、同時期に堆積したと考えられる層を上層から順にローマ数字で～層とし、土壌化しているかどうかによってa・bをつけて分類し、a層、b層、a層、b層・・・と呼称することとした⁽²⁾。そして、a層～a層に相当すると認識される第1～47層の色調、土質を記すこととした。

また、土壌サンプルは10カ所で採取して分析を行った。その分析結果についても略記しておくが、詳細については第 章を参照されたい。



第11図 確認トレンチ及び平成5年度試掘トレンチ位置図

a層 第1層が相当すると考えられる。

第1層 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土層。表土層で調査区全体に堆積するが、東端で色調が10YR5/4鈍い黄褐色に変化する。表土層である。

a層 第2・3層が相当すると考えられる。

第2層 2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土層。調査区東部に堆積するが東端で色調が2.5Y5/1黄灰色に変化する。

第3層 10YR5/1褐灰色シルト質粘土層。調査区西部に堆積する。

b層 第4・5層が相当すると考えられる。

第4層 N5/0灰色シルト質粘土層。調査区中央部に堆積する。

第5層 N6/0灰色シルト質粘土層。鉄分の影響でやや褐色を呈する。調査区西部に堆積する。

a層 第6・7・8層が相当すると考えられる。

第6層 10YR4/4褐色シルト質粘土層。調査区東部に堆積する。

第7層 10YR6/1褐灰色シルト質粘土層。調査区西部に堆積する。

第8層 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土層。調査区西部に堆積する。

b層 第9層が相当すると考えられる。

第9層 N6/0灰色シルト質粘土層。調査区中央部に堆積する。

a層 第10層が相当すると考えられる。

第10層 10YR6/1褐灰色シルト質粘土層。調査区西部に堆積するが、中央部で色調が10YR5/1褐灰色に変化する。

b層 第11・12・13・14層が相当すると考えられる。

第11層 N6/0灰色シルト質粘土層。上部には鉄分の吸着が認められる。調査区中央部に堆積する。

第12層 N6/0灰色粘土層。調査区中央部に堆積する。

第13層 7.5GY5/1緑灰色粘土層。鉄分の影響でやや褐色を呈する。調査区西部に堆積する。

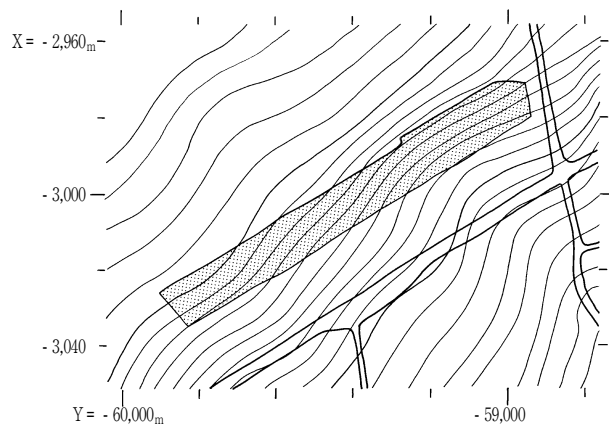
第14層 7.5GY6/1緑灰色粘土層。調査区西部に堆積する。

a層 第15層が相当すると考えられる。

第15層 10YR6/4鈍い黄橙色シルト質粘土層。砂粒・マンガン粒を含む。上部は鉄分の影響を受けて、下部はN6/0灰色粘土を含む。調査区東部に堆積するが、東端は10YR5/3鈍い黄褐色に変化する。

b層 第16・17・18層が相当すると考えられる。

第16層 N6/0灰色粘土層。やや色調が濃



第12図 調査区及び周辺地形図

い。上部は若干鉄分の影響を受ける。調査区中央部に堆積する。

第17層 N5/0灰色粘土層。やや色調が濃い。調査区西部に堆積する。

第18層 N5/0灰色粘土層。調査区西部に堆積する。

a層 第19層が相当すると考えられる。

第19層 10YR5/4 鈍い黄褐色シルト質粘土層。調査区東端に堆積する。第21層及び古墳時代の遺物包含層である第24層を削平している。土層のセクションでは、下層との境を示す線が上下に波打っており、地層からは多くの植物の根が検出された。植生の影響が強い地層と考えられ、第21・24層の削平も植生の影響と関係がある可能性が高い。

a層 第20層が相当すると考えられる。

第20層 N5/0灰色粘土層。やや色調が濃い。調査区西部に堆積する。

b層 第21～23層が相当すると考えられる。

第21層 N5/0灰色粘土層。やや緑色を呈する。第19層に削平された東端を除き、調査区全体に堆積している。調査区の東よりの部分ほどグライ化が進み、色調が10BG6/1青灰色に変化する。

第22層 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土層。調査区中央部に堆積する。

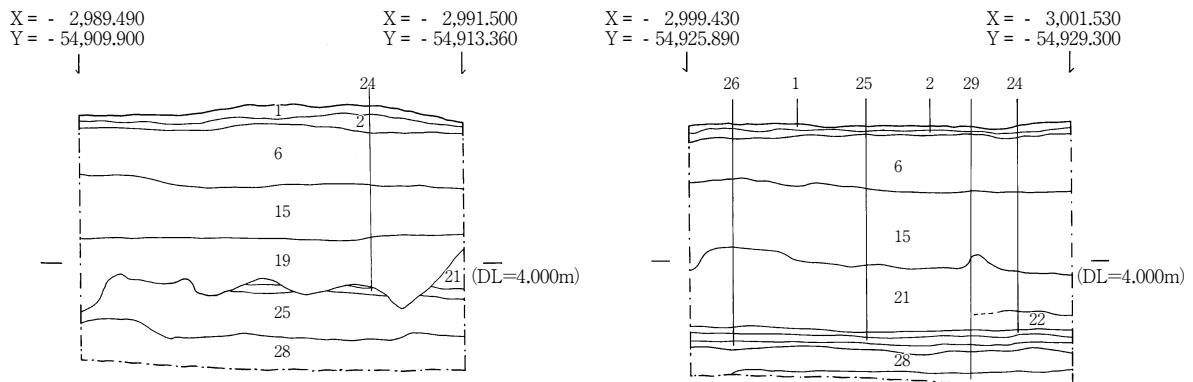
第23層 N5/0灰色粘土層。炭化物を含む。調査区中央部に堆積する。

a層 第24層が相当すると考えられる。

第24層 N5/0灰色粘土層。炭化物を多く含む。調査区全体に堆積しているが、東端は第19層によって削平されている。東に行くに従ってグライ化が進み、色調が10BG5/1青灰色に変化する。古墳時代中期の遺物を主体とする遺物包含層である。資料番号1の土壌サンプルを採取しており、分析によると短期間に速い速度で堆積した層であると考えられ、河川の氾濫の影響を度々受けていた時代の堆積層であるとみられる。

a層 第25層が相当すると考えられる。

第25層 N5/0灰色粘土層。炭化物を含むが上層の第24層ほど多くはない。調査区全体に堆積しているが東に行くに従ってグライ化が進み、色調が10BG6/1青灰色に変化する。弥生時代末期の遺物が多く出土する遺物包含層である。資料番号2の土壌サンプルを採取して



第13図 調査区西部南壁セクション

おり,分析によると第24層同様短期間に速い速度で堆積した層であると考えられ,河川の氾濫の影響を度々受けていた時代の堆積層であるとみられる。

a層 第26・27層が相当すると考えられる。第26層は 区で,第27層はAトレンチで確認されたが,層序的には同一時期に堆積した堆積層である可能性が強いと判断した。

第26層 N5/0灰色粘土層。炭化物を含む。調査区中央部で堆積が確認されている。

第27層 5Y4/1灰色粘土層。炭化物を含む。

b層 第28～30・37層が相当すると考えられる。第28・29層は 区,第30・37層はAトレンチで確認されたが,層序的には同一時期に堆積した堆積層である可能性が強いと判断した。

第28層 N5/0灰色粘土層。10BG6/1青灰色粘土を僅かに含む。調査区東部で堆積が確認されている。

第29層 N4/0灰色粘土層。やや色調が濃い。調査区中央部で堆積が確認されている。

第30層 7.5Y4/1灰色粘土層。炭化物を僅かに含む。

第37層 7.5GY6/1緑灰色粘土層。

a層 第31層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。

第31層 2.5GY6/1オリーブ灰色粘土層。N6/0灰色粘土と炭化物を含む。資料番号3の土壌サンプルを採取しており,分析によると短期間に速い速度で堆積した層であると考えられ,河川の氾濫の影響を度々受けていた時代の堆積層であると考えられる。

b層 第32層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。

第32層 2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土層。

a層 第33層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。

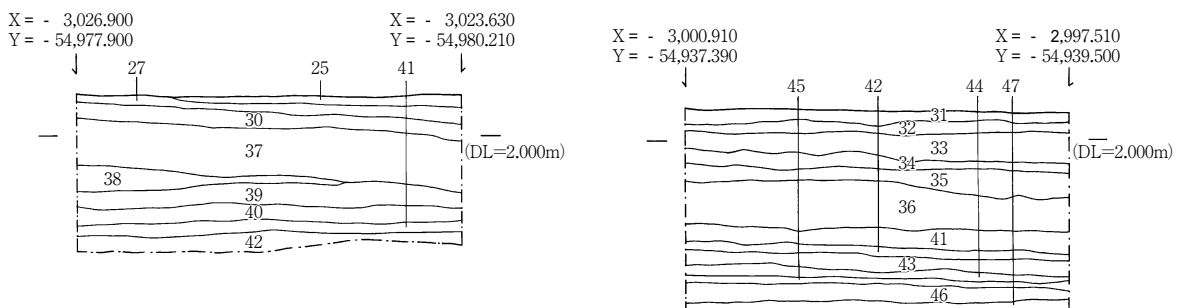
第33層 10YR5/2灰黄褐色粘土層。2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土を含む。資料番号4の土壌サンプルを採取しており,分析によると第31層とほぼ同じ結果であった。

b層 第34層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。

第34層 2.5GY6/1オリーブ灰色粘土層。弥生時代中期の土器片が1片出土しているが,当該期のプライマリーな遺物包含層とは認められなかった。

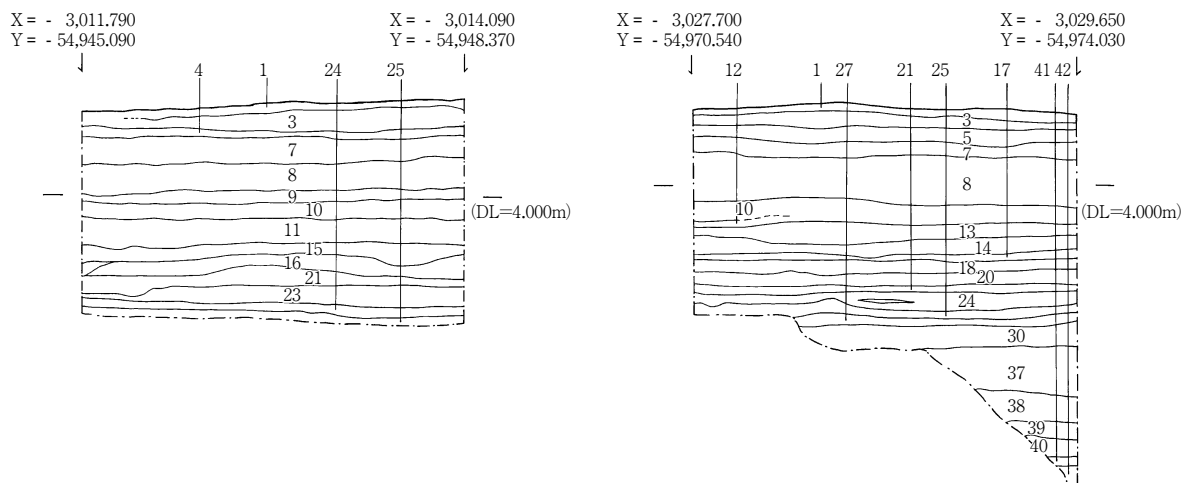
a層 第35層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。

第35層 10YR4/1褐灰色粘土層。2.5GY6/1オリーブ灰色粘土を含む。資料番号5の土壌サンプルを採取しており,分析によると第31層とほぼ同じ結果であった。



第14図 調査区東部南壁セクション

- b層 第36層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。
 第36層 10YR5/1 褐灰色粘土層。2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土を多く含む。
- a層 第38層が相当すると考えられる。Aトレンチで確認された。
 第38層 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土層。
- b層 第39層が相当すると考えられる。Aトレンチで確認された。
 第39層 N3/0 暗灰色粘土層。
- a層 第40層が相当すると考えられる。Aトレンチで確認された。
 第40層 N3/0 暗灰色粘土層。炭化物を含む。
- a層 第41層が相当すると考えられる。A・Dトレンチで確認されているが色調,土質,含有物
 などから同一層と判断される。
 第41層 10YR2/2 黒褐色粘土層。2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土を層状に含み,腐食した草木類の堆
 積が認められる。資料番号6の土壌サンプルを採取しており,分析によると河川の氾濫
 による堆積層であると考えられるが,周辺では流水の影響が弱まり湿地帯が形成されて
 いたと考えられ,湿地に生育することが多いチゴササ属の植物珪酸体が検出されている。
 腐食含量は多い。
- b層 第42層が相当すると考えられる。離れたA・Dトレンチで確認されているが色調,土質,
 含有物などから同一層と判断される。
 第42層 10YR2/2 黒褐色粘土層。10YR6/2 灰黄色粘土を層状に含み。腐食が進んでいない草木類
 が堆積する。
- a層 第43層が相当すると考えられる。Dトレンチで確認された。
 第43層 10YR4/1 褐灰色粘土層。10YR6/2 灰黄色粘土を薄く層状に含み。腐食した草木類が堆積
 する。資料番号7の土壌サンプルを採取しており,分析によると河川の氾濫による堆積
 層であると考えられるが,周辺では流水の影響が弱まり湿地帯が形成されていたと考え
 られる。腐食含量は資料の中では最も多い。



第15図 Dトレンチ西壁セクション

a層 第44～47層が相当すると考えられる。Dトレンチのみで確認されている。第44～47層は漸移層である。第44層から資料番号8,第45層から資料番号9,第47層から資料番号10の土壌サンプルを採取しており,分析によると3層とも河川の本流から離れていたが流水の影響を受けている場所で堆積したと考えられる。

第44層 10YR4/1 褐灰色粘土層。2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土を含む。

第45層 10YR4/1 褐灰色粘土層。2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土を多く含む。

第46層 10YR4/1 褐灰色粘土層。2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土粒を含む。

第47層 10YR4/1 褐灰色粘土層。

註

(1) 堆積層の認識方法については平成10年度第2回高知県埋蔵文化財センター職員専門研修会で講師として来訪された高橋学氏(立命館大学)の指導を受けた。また,高橋学氏が地形環境分析などを担当された下記の発掘調査の報告書を参考にした。

財団法人大阪府埋蔵文化財センター 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要』 1997

財団法人大阪府埋蔵文化財センター 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要』 1998

(2) 土壌化によってb層が消滅している場合や,場所によっては削平によって上部のa層が失われている場合は,それらは省略している。

(3) 包含層出土遺物

本項では,第24・25・34層から出土した遺物について記す。前述のように第24層は古墳時代後期を中心とする遺物包含層で,第25層は弥生時代後期後半を主体とする遺物包含層である。第34層については,弥生時代中期の土器が1点出土しているが,流れ込み等により混入した可能性が考えられる。なお,それぞれの土器の最後にかっこ書きで記した形態分類については,第1章第1節で詳述している。

第24層出土遺物(第16図)

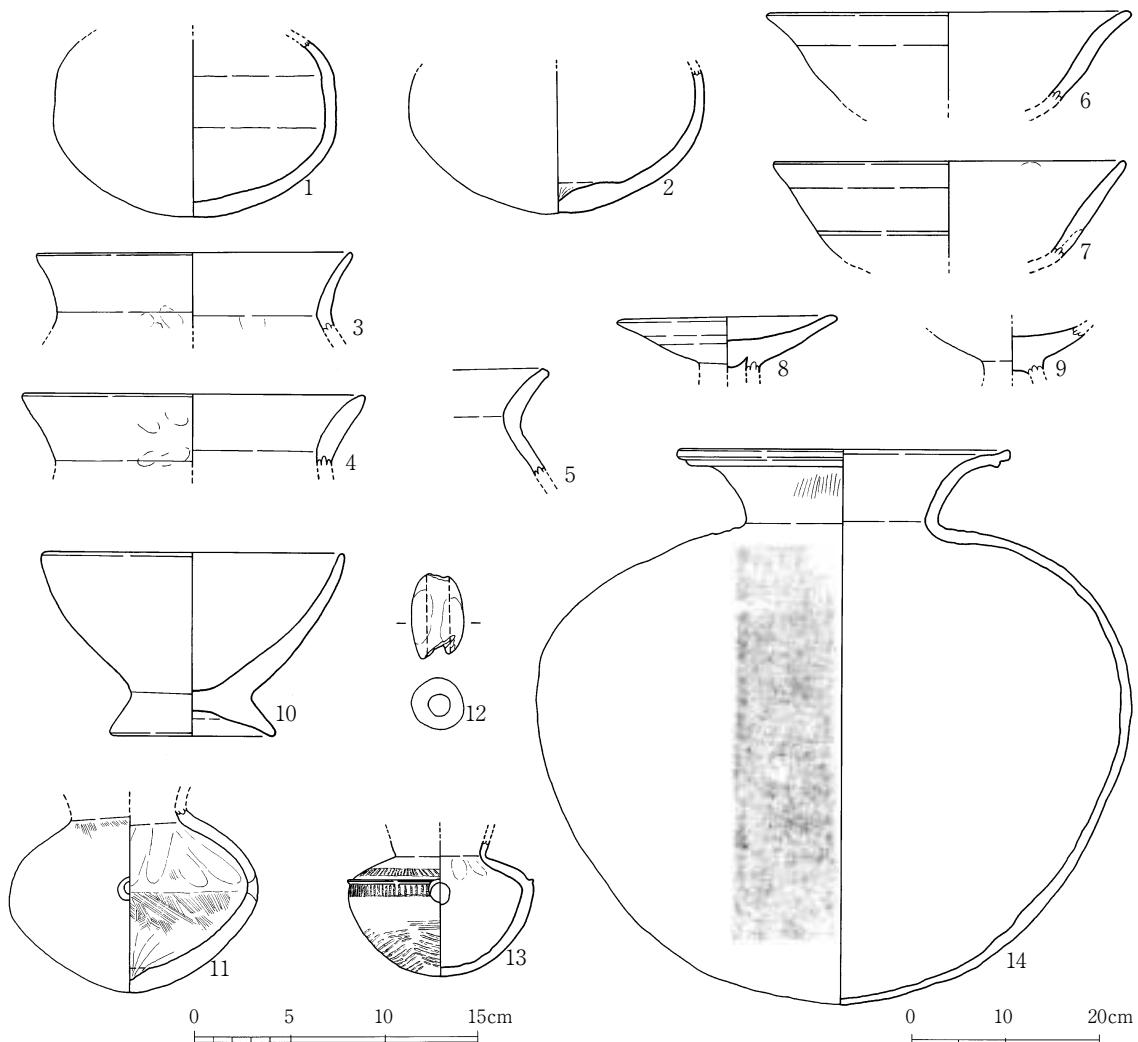
第24層は現在の地形と同様,東側から西側に向かって緩やかに傾斜し,南北方向では北側の標高が低く,全体的には北西方向に向かって傾斜する。この傾向は調査区の西半分で特に顕著である。遺物は調査区の中央部東よりに集中しており,特に,集中度が密な4ヶ所は祭祀関連遺構と位置付け,SF-4～7とした。この4ヶ所の祭祀関連遺構はいずれも標高2.800～3.300mに位置している。遺構外の遺物も調査区の東半分(区)に集中しており,西半分(区)で確認した実測可能な遺物は11の土師器の甕のみである。遺構ではその他にピットが70個検出されたが,これらは調査区の西半分(区)に集中している。

土師器(第16図 1～11)

1・2は壺である。1は標高3.360mの地点から出土し,6・8の土師器と共にSF-5・6に近接する。口縁部と頸部が欠損している。胴部は球形で断面はやや扁平な楕円形をなす。胴部は上半部に丸みがあるが,最大径をなす中央部に至るとやや直線的になり,下半部に至ると再び丸みを帯びる。

最大径は14.9cm測る。器面は摩耗するが、内外面ともナデ調整を施しているものとみられる。色調は内外面とも明赤褐色で、胎土には5mm大の小礫を含む(壺A - b類)。2は調査区の東部の標高3.660mの地点から出土した。最大径は15.6cmを測り、胴部は球形をなす。器面は摩耗するが、内外面ともナデ調整を施しているものとみられる。底部外面に径7cm大の黒斑があり、色調は、黒斑の周辺が灰黄色、それ以外が鈍い橙色を呈する。胎土に5mm大の小礫を含む(壺A - b類)。

3～5は甕である。3は口縁頸部の破片で、口径は16.6cmを測る。口縁部は緩く外反し端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整が施され、色調は、内外面が灰黄色で、断面が黄灰色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕B類)。4は調査区の東部の標高3.240mの地点から5の土師器と共に出土した。口縁頸部の破片で、口径は18.0cmを測る。口縁部は緩く外反し、端部を丸く仕上げる。器壁は厚めで端部の近くは若干薄い。内外面とも強いヨコナデ調整で、外面には指頭圧痕も認められる。色調は内外面とも赤褐色で、外面には煤の付着が認められる。胎土に3mm大の小礫を含むが、その中には雲母粒が多く認められる点が特徴である。焼成は良好である(甕B類)。5は調査区の東部の標高3.260mの地点から4の土師器と共に出土した。口縁部は「く」の字形に外反しており、端部近



第16図 第24層出土遺物実測図(土師器, 須恵器)

くで若干外反の度合いを増す。端部は面をなす。口縁部の調整は内外面とも強いヨコナデ調整であり、僅かに残っている胴上半部外面には不定方向のハケ目が認められる。胴上半部内面には継ぎ目痕が認められる。色調は内外面とも赤褐色で、外面には煤の付着が認められる。胎土に5mm大の小礫を含むが、その中には雲母粒が多く認められる点が特徴である。焼成は良好で器壁は堅い(甕A類)。

6・7は高杯である。6は標高3.360mの地点から1,8の土師器と共に出土し、SF - 5・6に近接する。口径は19.0cmを測る。杯底部以下が欠損するが、体部は外上方に延び、口縁部でさらに外反し、端部を丸く仕上げる。調整は、口縁部がヨコナデ調整、それ以外がナデ調整である。内面に径4cm大の黒斑があり、色調は内外面とも橙色である。胎土に4mm大の小礫を含む(高杯A類)。7はSF - 7の近くの標高3.170mの地点から出土した。口径は18.4cmを測り、体部は外上方に開き口縁部でやや外反の度合いを増し、端部を丸くおさめる。調整は、口縁部がヨコナデ調整、それ以外がナデ調整である。断面観察で内傾接合の痕を確認することができる。色調は内外面とも明赤褐色で断面は暗灰色を呈する。胎土に5mm大の小礫を含む(高杯A類)。

8・9は器台である。8は標高3.300mの地点から1・6の土師器と共に出土し、SF - 5・6に近接する。口径は11.6cmを測り、受部は大きく開く。調整は、口縁部がヨコナデ調整、それ以外がナデ調整である。器受部内面の大部分に薄い黒斑がみられるが、それ以外は橙色を呈する。胎土に4mm大の小礫を含む(器台A類)。9も器受部の破片で、受部は大きく開く。色調は、外面が橙色、内面が鈍い橙色を呈する。胎土に4mm大の小礫を含む(器台A類)。

10は台付椀で、SF - 6の近くの標高3.270mの地点から出土した。口径は15.9cm、器高は9.7cmを測る。杯部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり口縁部に至る。脚部は断面「八」の字状に開き、端部を丸くおさめる。調整は、口縁部がヨコナデ調整で、それ以外がナデ調整である。口縁部内外面に5cm大の薄い黒斑がある。色調は、外面が橙色、内面が鈍い橙色を呈し、胎土に5mm大の小礫を含む。

11は甕である。調査区西部の標高2.750mの地点から出土した。口頸部を欠損する。胴部は球形で断面はやや算盤玉形に近い楕円形をなす。胴中央部が張っており、底部は丸底である。胴部最大径は13.1cmを測り、胴中位に焼成後外側から径5mmの円孔が穿たれている。調整は、外面が肩部上位にハケ調整を施す以外はナデ調整で、内面が胴部下半分にハケ調整、上半分に指ナデ調整を施す。色調は、外面が橙色と浅黄橙色で、内面が橙色を呈する。胎土に5mm大の小礫を含む。

土製品(第16図 12)

12は土錘で、調査区東部の標高3.350mの地点から出土した。一部欠損するが、紡錘形を呈する。全幅2.8cm、孔径1.2cmを測る。器面はナデ調整が施される。色調は浅黄橙色で、重量は22.6gを量る。

須恵器(第16図 13・14)

13は甕で、SF - 7の近くの標高3.070mの地点から出土した。口頸部の大半が欠損する。体部は肩が張り、体部最大径は体部上位1/3にあり、径は9.8cmを測り、その直上に断面三角形の稜が回る。底部は丸い。稜の上下にはハケ状工具による刺突文が施され、円孔が下の刺突文の上から下内方に

穿たれる。底部外面には平行タタキ目が残し、その上には回転カキ目調整が施される。肩部内面に指頭圧痕が見られる以外回転ナデ調整が施される。内面には捲き上げ成形の痕が残る。色調は、外面が灰白色ないし灰色、内面が灰色を呈する。胎土には2mm大の白色粗砂を含む。

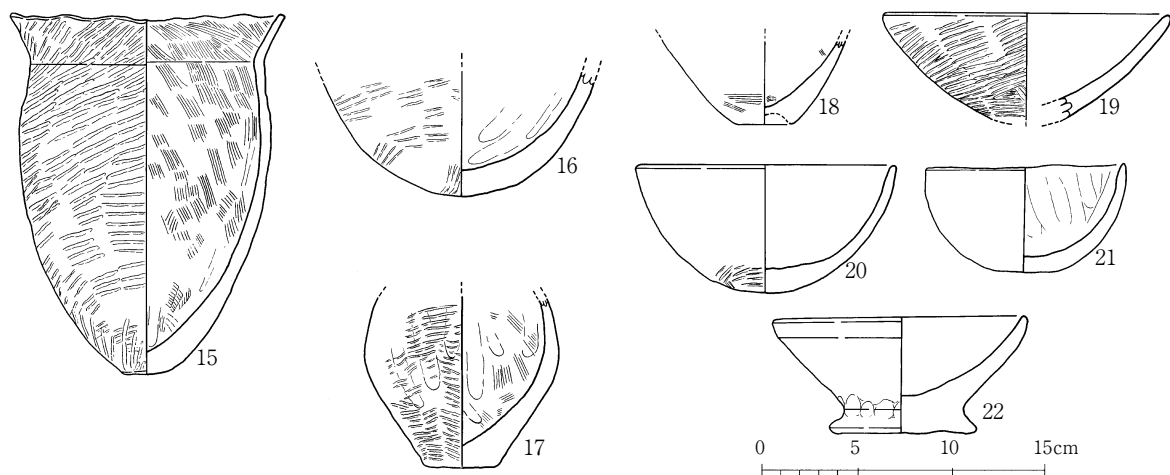
14は甕である。調査区東部の南北4m、東西8mの範囲で、標高3.110～3.330mの地点から出土した。口径26.0cm、器高44.8cm、胴部最大径47.2cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部外面直下には断面三角形の稜が回る。胴部は肩が張っており、最大径は胴部上位にある。底部は丸底である。口縁部は回転ナデ調整が施され、胴部外面には平行タタキ目が残し、内面には丁寧なナデ調整が施されている。また、口縁部から胴部外面には自然釉がかかる。色調は、内外面とも灰白色ないし灰色を呈する。胎土には4mm大の白色粗砂を含む。

第25層出土遺物 (第17図)

第25層も地形的には第24層とほぼ同じ傾向を示す。遺物は調査区の西半分(区)に集中しており、特に集中度が密な3ヶ所を祭祀関連遺構と位置付け、SF-1～3とした。この3ヶ所の祭祀関連遺構はいずれも標高2.400～2.700mに位置する。調査区東半分からも一定量の遺物が出土するが、散発的で集中して出土する箇所は認められなかった。

弥生土器 (第17図 15～22)

15～17は甕で、15は調査区東部の標高3.100mの地点から出土した。口径14.4cm、器高18.9cm、胴部最大径13.2cmを測る。口縁部は外傾し、端部はやや幅を持つが丸く仕上げる。胴部は砲弾形を有し、最大径はその上位にある。底部は厚く尖底気味であるが、最下部は狭い平底である。外面全面にはタタキを施した後、口縁部にナデ調整を加える。内面には全面にハケ目が残る。底部外面には煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕D-c-1類)。16は調査区東部から20、22と共に出土した。底部のみ残存する。外面はタタキの後にナデ調整を加える。内面には指ナデ調整が残る。底部外面にはわずかに煤が付着している。色調は、外面が鈍い橙色と赤色、内面が灰黄褐色である。胎土には5mm大の小礫と共に少量の雲母片が認められる(甕-c-2類)。17は調査区東部の標高3.430mの地点からの出土である。胴部最大径10.2cm、底径3.4cmを測る。底部と胴部の一部が残存する。底部は平底で、胴部は丸みを有す。外面はタタキ



第17図 第25層出土遺物実測図(弥生土器)

の後にナデ調整を加える。内面はハケ調整の後に指ナデ調整を加える。外面には煤が付着する。色調は、外面は鈍い赤褐色、内面が鈍い褐色を呈する。胎土には5mm大の小礫と共に少量の雲母片が認められる(甕 - c - 1類)。

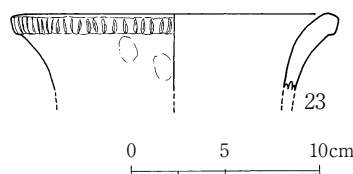
18～22は鉢である。18は底部の破片で、調査区西部から出土した。底部は平底で体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。底径は3.2cmを測る。器面は内外面とも磨耗するが、僅かにハケ目が残る。色調は、外面が浅黄橙色と鈍い橙色、内面が浅黄橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(鉢A - - b類)。19は調査区東部の標高3.750mの地点から出土した。口径は14.9cmを測り、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部に至る。外面にはほぼ全面にタタキを施し、口縁部にはヨコナデ調整を加える。内面はナデ調整である。内外面に黒斑がみられる。色調は、外面の一部が橙色を呈する以外黄灰色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(鉢B - - a類)。20は調査区東部の標高3.100mの地点から16,22と共に出土した。口径は13.4cm,器高は6.7cmを測る。底部は丸底で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部に至り、端部を丸く仕上げる。内外面とも口縁部はヨコナデ調整,他はナデ調整が施され,底部外面にタタキ目が残る。また,底部外面に煤が付着している。色調は,外面が灰黄色,内面が灰黄褐色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(鉢C - - a類)。21は調査区西部の標高2.660mの地点から出土した。口径は10.5cm,器高は5.7cmを測る。底部は平底で,体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部に至り,端部を丸く仕上げる。調整は内外面ともナデ調整が施されているが,内面には指ナデ調整の痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(鉢C - - b類)。22は台付の鉢で,調査区東部の標高3.160mの地点から16,20と共に出土した。口径は13.1cm,器高は6.2cm,底径は7.8cmを測る。体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部に至り,端部を丸く仕上げる。調整は内外面ともナデ調整が施され,体部と高台の境には指頭圧痕が連続して明瞭に残る。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(鉢D - - b類)。

第34層出土遺物(第18図)

第34層はDトレンチで確認した土層で,下記の遺物1点出土した。この他には炭化物等の有機物も含まれていなかった。

弥生土器(第18図 23)

23は壺で,口縁部の破片である。口径は17.2cmを測る。口縁部は外反して上がる。面をなす端部には3～5mm間隔でヘラ状工具による刻み目が施される。口縁部にはヨコナデ調整が施される。色調は,外面が灰白色,内面が鈍い黄橙色である。胎土には3mm大の小礫を含む(壺A類)。



第18図 第34層出土遺物実測図(弥生土器)

第 章 遺構と遺物

1. 遺物

本節では、出土遺物について、弥生土器、土師器、土製品、須恵器の順に概略を記すこととする。各遺物については次節の遺構と遺物で記す。

今回の調査で出土した遺物の総数は約4,000点、コンテナケ - ス約20箱分であった。しかし、細片が多く、実測可能な遺物は123点であった。実測遺物の中で祭祀関連遺構の遺物として取り上げたものが88.6%を占め、残りは遺物包含層からの出土であった。また、この中で土師器の占める割合が最も高く52.0%であり、以下弥生土器35.0%、須恵器12.2%、土製品0.8%の順であった。

(1) 弥生土器

弥生土器は第25・34層及び祭祀関連遺構のSF - 1～3から出土した。以下器形ごとに形態分類を行う。

壺

2点のみの出土であるが、口縁部の形態によって2類に大別した。

A類 口縁部が外湾して立ち上がり、端部に刻み目が施されているもの。(23)

B類 二重口縁をなすもので、頸部は大きく外反し、口縁部は短くほぼ直立するもの。(24)

甕

甕は口縁部、底部の形態、内外面の調整によって大別し、組み合わせによって表記する。

口縁部の形態では4類に大別することができた。

A類 口縁部が胴部から「く」の字形に外反するもの。(25, 27, 32, 33, 36, 37, 50, 51)

B類 口縁部が胴部から「く」の字形に外反し、端部が外側に垂れるもの。(34, 35, 38)

C類 口縁部が胴部から「く」の字形に外反し、端部が明瞭な面をなすもの。(26)

D類 口縁部が胴部から緩やかに外反するもの。(15, 52, 53)

底部の形態では3類に大別することができた。

類 底部が平底であるもの。(17)

類 底部に平底の部分が狭く、全体としては尖底状のもの。(15, 25, 28, 29, 39, 40～44, 50, 53～55)

類 底部が丸底のもの。(16)

外面の調整の施し方によって3類に大別することができた。

a類 ハケ調整を施すもの。(39, 53)

b類 ハケ調整を施すが、タタキ目が残るもの。(27, 28, 32, 33, 37, 40, 42, 43, 50, 52)

c類 タタキ目が残るもの。(15～17, 25, 29, 35, 36, 38, 41, 44, 51, 54, 55)

内面の調整の施し方によって2類に大別することができた。

1類 ハケ調整を施すもの。(15, 17, 25, 28, 32, 33, 35～43, 50, 52, 53, 55)

2類 ハケ調整を施さないもの。(16, 27, 29, 44, 51, 54)

鉢

鉢は底部、体部の形態、外面の調整によって大別し、組み合わせによって表記する。

底部の形態では4類に大別することができた。

A類 底部が平底であるもの。(18,30,31,45,48,56)

B類 底部が尖底気味であるもの。(19,46,47)

C類 底部が丸底であるもの。(20,21,49,57)

D類 台付であるもの。(22)

体部の形態では3類に大別することができた。

類 体部がやや上方に立ち上がるもの。(18,20~22,30,31,45,46,48)

類 体部が開き気味に立ち上がるもの。(19,47,56)

類 皿状であるもの。(49)

外面の調整によって2類に大別することができた。

a類 タタキ目が残るもの。(19,20,30,31,45~47,56,57)

b類 タタキ目が残らないもの。(18,21,22,48,49)

(2)土師器

土師器は第24層及び祭祀関連遺構のSF - 4~7から出土した。以下器形ごとに形態分類を行い記述する。

壺

壺は法量,口縁部,胴部の形態によって大別し,組み合わせによって表記する。

法量によって2類に大別することができた。

A類 口径7cm,胴径12cmを超えるもの。(1,2,75~78,111)

B類 口径7cm,胴径12cm以下のもの。(74,79)

口縁部の形態によって2類に大別することができた。

類 口縁部が外上方に直線的に立ち上がるもの。(75,76,111)

類 口縁部が直上に立ち上がるもの。(74)

胴部の形態によって2類に大別することができた。

a類 胴部が球体をなすもの。(74)

b類 胴部が砲弾形を呈するもの。(1,2,76~79)

甕

甕は口縁部,底部の形態によって大別し,組み合わせによって表記する。

口縁部の形態では2類に大別することができた。

A類 口縁部が胴部から「く」の字形に外反するもの。(5,80,82)

B類 口縁部が胴部から緩やかに外反するもの。(3,4,58,59,81,97~99)

底部の形態では2類に大別することができた。

類 底部が尖底気味のもの。(84,100)

類 底部が丸底のもの。(80~83,85)

高杯

高杯は杯部,脚部の形態,杯部,脚部の接合痕によって大別し,組み合わせによって表記する。

杯部の形態では2類に大別することができた。

A類 稜の上からはやや外反気味に立ち上がるもの。(6,7,86,101,102)

B類 明瞭な稜がなく、内湾して立ち上がるもの。(112)

脚部の形態では2類に大別することができた。

類 脚台部、裾部の境で屈曲しているもの。(60,87,103,113)

類 脚台部から緩やかに彎曲して裾部に至るもの。(88,112)

杯部、脚台部の接合痕によって2類に大別することができた。

a類 脚台部の内面に絞り目が残るもの。(88,112)

b類 脚台部の内面に粘土の充填痕が残るもの。(60,87,103,113)

器台

器台は器受部の形態で2類に大別することができた。

A類 器受部がやや内湾しているもの。(8,9)

B類 器受部がやや外湾しているもの。(61)

椀

椀は底部、体部の形態、外面の調整によって大別し、組み合わせによって表記する。

底部の形態では2類に大別することができた。

A類 底部が平底であるもの。(89,114,115,120,121)

B類 底部が丸底であるもの。(62~65,90~96,105,106,116~119)

体部の形態では3類に大別することができた。

類 体部がやや上方に立ち上がるもの。(89~93,105,106,114,116~122)

類 体部が開き気味に立ち上がるもの。(64,94,96)

類 皿状であるもの。(62,63,115)

台付椀

台付椀は1個体のみである。(10)

甕

甕は1個体のみである。(11)

(3)土製品

土錘

土錘は1個体のみである。(12)

(4)須恵器

杯蓋

杯蓋は口縁部高、天井部、口縁端部、稜の形態によって大別し、組み合わせによって表記する。

口縁部高によって2類に大別することができた。

A類 口縁部高が比較的高く、器高の1/2前後である。(67,107,123)

B類 口縁部高が器高の1/2以下である。(66)

天井部の形態では2類に大別することができた。

類 天井部が平らなもの。(123)

類 天井部に丸みを有するもの。(66,67,107)

口縁端部の形態では2類に大別することができた。

a類 口縁端部が内傾する凹面をなすもの。(67,123)

b類 口縁端部が内傾する段を有するもの。(66,107)

稜の形態では2類に大別することができた。

1類 鈍い断面三角形の稜を有するもの。(66,123)

2類 凹線を回らすことにより稜とするもの。(67,107)

杯身

杯身は立ち上がり高,底部,口縁端部,稜の形態によって大別し,組み合わせによって表記する。

立ち上がり高によって2類に大別することができた。

A類 立ち上がり高が比較的高く,器高の1/2前後のもの。(72,108)

B類 立ち上がり高が器高の1/2以下のもの。(68~71,73,109,110)

底部の形態では2類に大別することができた。

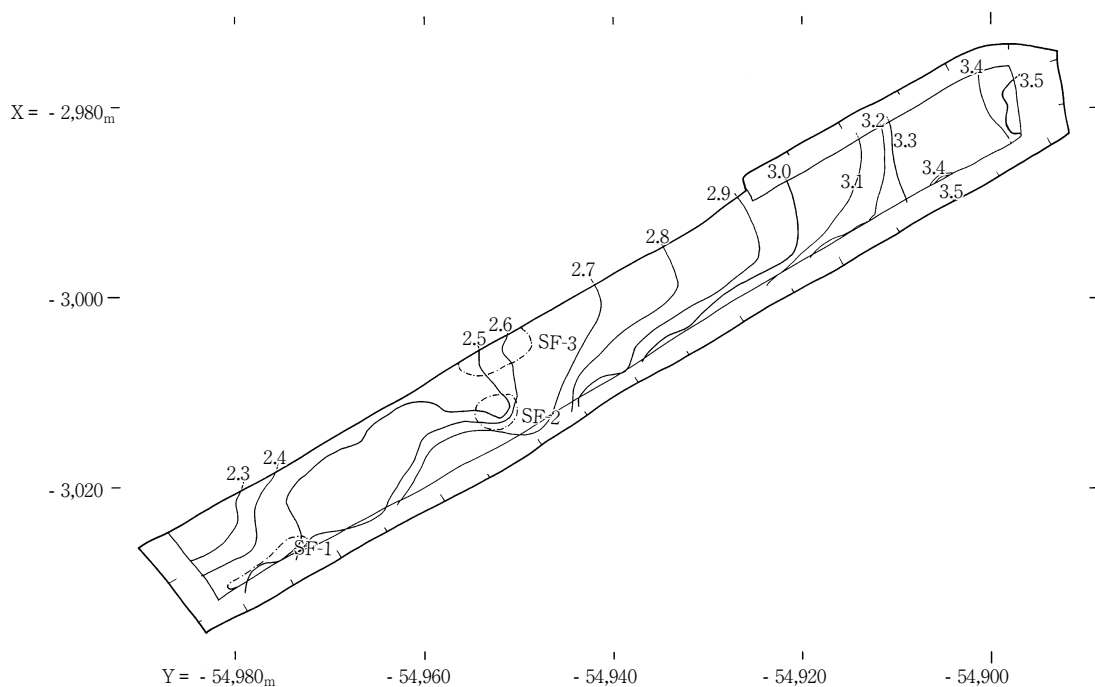
類 底部が平らなもの。(68~70,73,110)

類 底部に丸みを有するもの。(108,109)

立ち上がり端部の形態では2類に大別することができた。

a類 立ち上がり端部が丸いもの。(69,72)

b類 立ち上がり端部が外傾する凹面をなすもの。(68,70,71,73,108,109,110)



第19図 SF - 1 ~ 3遺構配置図

受け部の形態では2類に大別することができた。

1類 受け部が断面三角形となるもの。(68,70,71,73,109)

2類 受け部の端部が丸いもの。(69,72,108,110)

甗

甗は1個体のみである。(13)

甗

甗は1個体のみである。(14)

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代

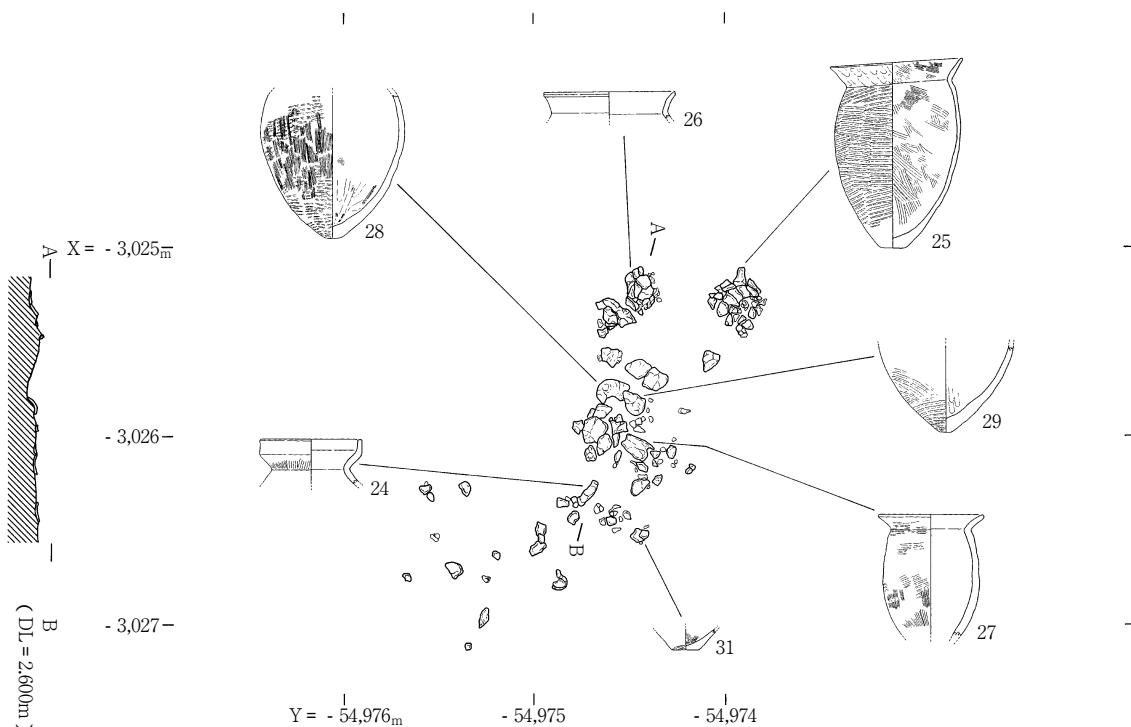
祭祀関連遺構

SF - 1(第20図)

調査区の南西部に位置し、南壁に沿って東西方向からやや北東に傾斜した東西約10m、南北約2mの範囲である。さらに南の調査区外に拡がる可能性もある。遺物は第25層中から出土しており、土器組成は弥生土器の壺(24)、甗(25~29)、鉢(30・31)によって構成されている。甗、鉢はタタキ目が残るものがほとんどで、煤が付着したものが多い。壺は二重口縁をなすもので、甗、鉢とは調整をやや異にする。

出土遺物

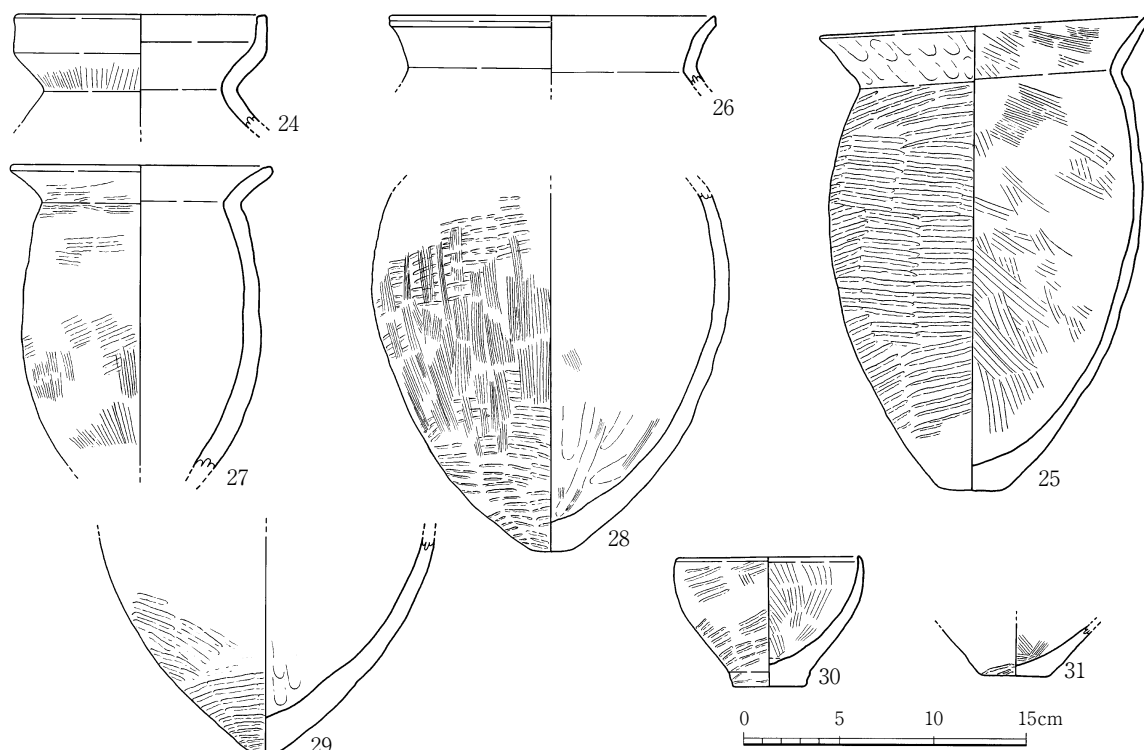
弥生土器(第21図 24~31)



第20図 SF - 1遺物出土状態(弥生土器)

24は二重口縁の壺で、標高2.490mの地点から出土した。口径は13.2cmで、頸部は肩部から「く」の字形をなし、口縁部に屈曲し内傾して立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、頸部外面にはタテ方向にハケ調整の後、ナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈し、胎土には5mm大の小礫を含む(壺B類)。

25～29は甕である。25は標高2.430mの地点から出土した。口径は17.3cm、器高は25.0cm、胴部最大径は16.5cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し端部は丸く仕上げる。胴部は上位に最大径を有し、内湾気味に内下方に下がる。底部は小さな平底である。口縁部はヨコナデ調整を施すが外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。胴部外面にはタタキ目、内面にはハケ調整がそれぞれ施されている。外面胴中央部から底部にかけて煤が付着する。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕A - c - 1類)。26は標高2.490mの地点から出土した。口径は17.2cmを測り、口縁部は「く」の字形に外反し、端部は明瞭な面をなす。口縁部はヨコナデ調整で、外面には煤が付着する。色調は、外面が灰黄褐色、内面が灰黄色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕C類)。27は標高2.480mの地点から出土した。口径は13.8cm、胴部最大径は12.6cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸く仕上げる。胴部は中位に最大径を有し、内湾気味に内下方に下がる。外面にはタタキを施した後、胴中央部以下にハケ調整を加える。内面は口縁部がヨコナデ調整で、胴部がナデ調整である。外面には煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(甕A - b - 2類)。28は標高2.450mの地点から出土した。胴部最大径は18.8cmで、上位に最大径を有し、内湾気味に内下方に下がる。底部は尖底気味で小さな平底をなす。外面にはタタキを施した後、胴中央部以上にハケ調整を加える。内面はナデ調整を施し、底部には



第21図 SF - 1出土遺物実測図(弥生土器)

指頭圧痕及び一部にハケ目が残る。胴部外面に煤が付着しており、底部内面には径10cm大の黒斑がある。色調は、外面が灰黄褐色と橙色、内面が灰黄褐色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕 - b - 1類)。29は標高2,500mの地点から出土した。胴部中央部以上を欠損する。胴部は内湾気味に内下方に下がり、底部は尖底気味で小さな平底をなす。外面にはタタキ目が認められる。内面にはナデ調整が施されている。底部内面には径10cm大の黒斑がある。色調は、外面が橙色、内面が灰黄色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕 - c - 2類。)

30, 31は鉢である。30の口径は9.8cm, 器高は6.8cm, 底径は3.9cmを測る。底部は平底で、底部から体部下位までわずかに外湾した後、強く内湾しながら立ち上がり、やや内上方に屈曲して口縁部に至る。端部は丸く仕上げる。外面には右上がりのタタキ目残り、内面にはハケ調整が施されている。色調は、外面が灰黄色と浅黄橙色、内面が灰黄色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(鉢A - - a類)。31は底部の破片で標高2,520mの地点から出土した。底部は平底で径3.5cmを測り、体部は外上方に直線的に立ち上がる。外面には右上がりのタタキ目残り、内底面にはハケ目が残る。色調は、外面が灰白色、内面が橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(鉢A - - a類)。

SF - 2(第22図)

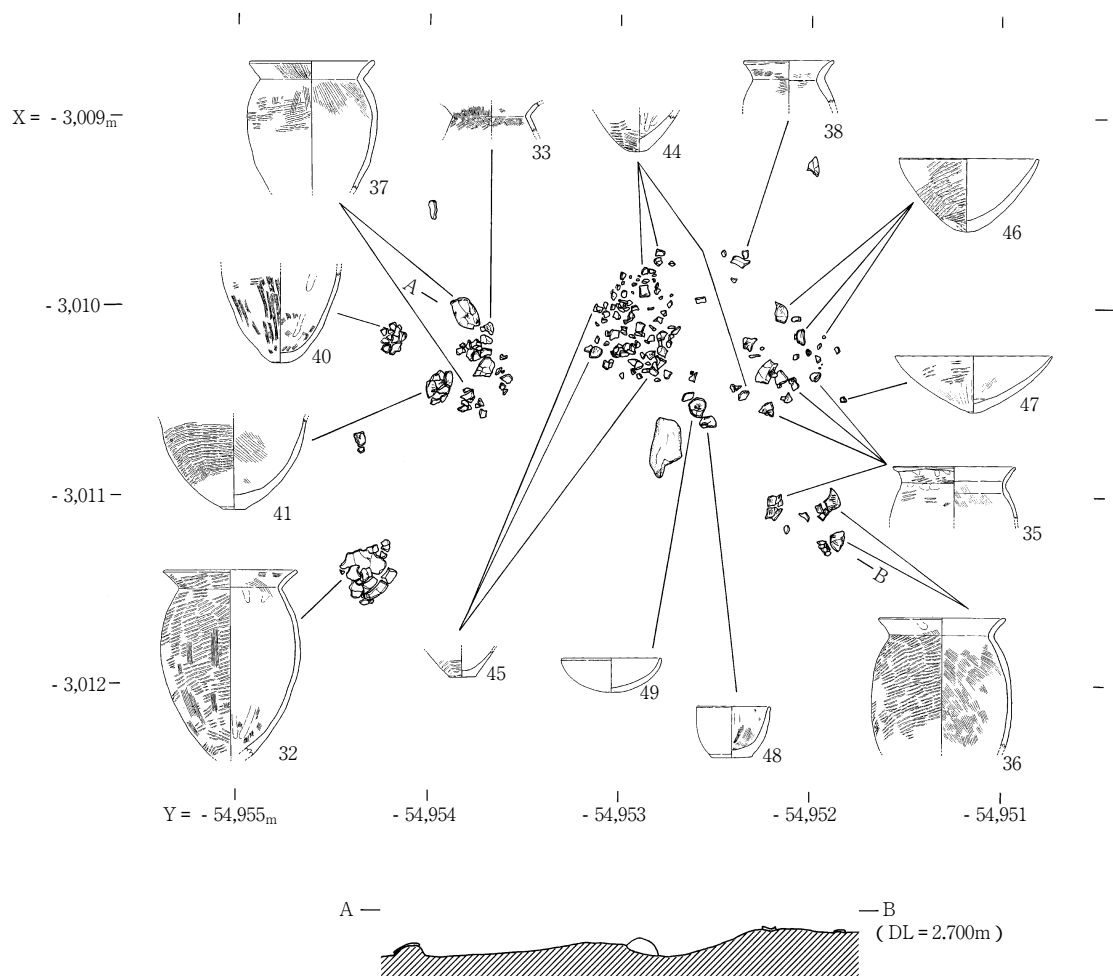
調査区の中央部よりやや西に位置し、東西約5m, 南北約4mの範囲である。丁度遺構の北東には遺物が多く出土した試掘トレンチがあることからその範囲がSF - 3まで拡張する可能性も考えられる。遺物は第25層中から出土しており、土器組成は弥生土器の甕(32~44), 鉢(45~49)によって構成されている。甕, 鉢はタタキ目が残るものがほとんどで、甕には煤が付着したものが多い, 48, 49の鉢は甕や他の鉢と調整をやや異にする。

出土遺物

弥生土器(第23図 32~49)

32~44は甕である。32は標高2,470mの地点から出土した。口径17.2cm, 胴部最大径18.3cmを測る。底部を欠く。口縁部は「く」の字形に外反し端部に至る。砲弾形の胴部は最大径を上半部に有し、内湾気味に内下方に下がる。外面は全面にタタキを施した後中位以下にハケ調整を加える。口唇部から口縁部内面はヨコナデ調整、胴部はハケ調整の後にナデ調整を施し、下胴部の一部にハケ目が残る。煤が、外面はほぼ全面、内面は胴部下半部に付着する。色調は外面が橙色と灰白色、内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕A - b - 1類)。33は頸部と肩部の破片で標高2,460mの地点から出土した。口縁部は「く」の字形に外反するとみられる。外面は頸部にハケ調整、肩部にタタキ目の後にハケ調整が施される。内面はハケ調整の後、頸部にヨコナデ調整を加える。外面には煤が付着する。色調は、外面が鈍い橙色、内面が灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕A - b - 1類)。34は口縁部の破片で、口径24.0cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部に至る。端部は下方にやや垂れ気味である。内外面ともヨコナデ調整であるが、頸部外面は僅かにハケ目が認められる。色調は、外面が橙色で、内面が鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕B類)。35は標高2,500mの地点から出土した。口径は15.8cmを測る。口縁部から胴上半部にかけて残存しており、それ以下が欠損する。口縁部は「く」の字形に外反し、外面を若干肥厚した端部に至る。外面はほぼ全面にタタキを施し、口縁部は内面を中心にヨコナデ調整を加える。胴部内面はハケ調

整を施す。口縁部外面には煤が付着する。色調は、外面が橙色、内面が浅黄橙色である。胎土には5mm大の小礫を含む(甕B - c - 1類)。36は標高2.510mの地点から出土した。口径は16.3cm、胴部最大径は18.3cmを測る。下胴部以下を欠損する。口縁部は「く」の字形に外反し、丸く仕上げられた端部に至る。胴部はほぼ中位に最大径を有し、内湾気味に内下方に下がるとみられる。胴部外面にはタタキ、口縁部にはヨコナデ調整が施され、頸部の一部にハケ目が残る。胴部内面にはハケ調整を施す。口縁部と胴部外面には煤が付着する。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕A - c - 1類)。37は標高2.450mの地点から出土した。口径は15.6cm、胴部最大径は16.8cmを測る。下胴部以下が欠損する。口縁部は「く」の字形に外反し、丸く仕上げられた端部に至る。胴部は上位1/3に最大径を有し、内湾気味に内下方に下がる。外面はタタキの後にハケ調整を施す。口唇部から口縁部内面にかけてヨコナデ調整、胴部内面にはハケ調整の後にナデ調整を加える。口縁部と胴部外面には煤が付着する。色調は、外面が橙色、内面が鈍い橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕A - b - 1類)。38は標高2.580mの地点から出土した。口径は11.6cmを測る。口縁部から胴上半部にかけて残存する。口縁部は「く」の字形に外反し、丸く仕上げられた端部に至る。外面はほぼ全面にタタキ、口唇部から口縁部内面にかけてヨコナデ調整を施す。内面はハケ調整の後ナデ調整を加える。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には8mm大の小礫を含む(甕B -

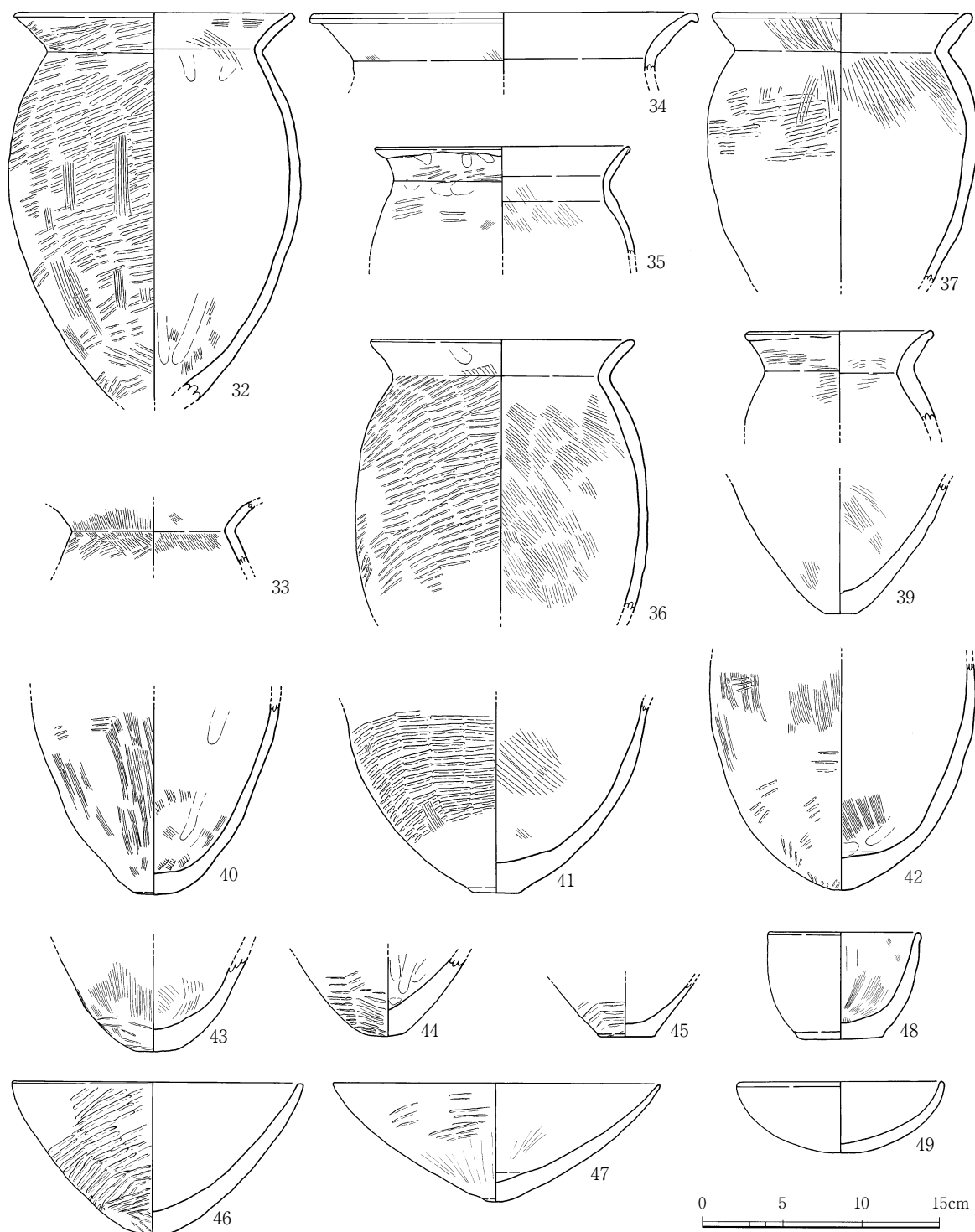


第22図 SF - 2遺物出土状態(弥生土器)

c - 1類)。39は底部と下胴部の破片である。底部は尖底気味であるが小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。内外面とも八ケ目が残る。外面には煤の付着が認められる。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕 - a - 1類)。40は標高2.470mの地点から出土した。胴下半部と底部である。底部は尖底気味であるが小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面はタタキの後に八ケ調整、内面は八ケ調整の後にナデ調整を施す。底部と底部外面に煤が付着する。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕 - b - 1類)。41は標高2.470mの地点から出土した底部から下胴部の破片である。底部は尖底気味であるが小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面はタタキの後に八ケ調整、内面は八ケ調整の後にナデ調整を施す。底部と下胴部外面には煤が付着する。色調は、外面が鈍い橙色、内面が褐色、断面が灰色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕 - c - 1類)。42も底部から下胴部の破片で、胴部最大径は16.7cmを測る。底部は尖底気味であるがごく小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面はタタキの後に八ケ調整、内面は八ケ調整の後にナデ調整を施す。胴中央部外面には煤が付着する。また、底部内面には5cm大の黒斑が認められる。色調は、外面が鈍い橙色、内面が橙色と鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕 - b - 1類)。43も底部から下胴部の破片である。底部は尖底気味であるが小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面はタタキの後に八ケ調整、内面は八ケ調整の後にナデ調整を施す。色調は、外面が橙色で、内面が橙色を呈する。胎土には1mm大の粗砂を含む(甕 - b - 1類)。44は標高2.530mの地点から出土した底部から下胴部の破片である。底部は尖底気味であるが小さな平底となり、胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面にはタタキ、内面には指ナデ調整が施される。また、底部内面には黒斑が認められる。色調は、外面が橙色と赤色、内面が橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕 - c - 2類)。

45～49は鉢である。45は標高2.480mの地点から出土した。口縁部が欠損する。底径は3.5cmで、小さな平底となり、体部は外上方に直線的に立ち上がる。外面にタタキ、内面にはナデ調整が施される。色調は、外面が黄灰色と鈍い橙色、内面が黄灰色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(鉢A - - a類)。46は標高2.500mの地点から出土した。口径は18.3cm、器高は9.6cmを測る。底部は丸みを有し、体部は内湾気味に斜め上方に上がり、口縁部に至る。端部は丸く仕上げられる。口縁部はヨコナデ調整、体部外面にはタタキ、内面にはナデ調整が施される。底部外面に径2cm大の黒斑が、体部内面には径8cm大の黒斑が認められる。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫と共に雲母片を含む(鉢B - - a類)。47は標高2.550mの地点から出土した。口径は20.5cm、器高は7.5cmを測る。底部はわずかな平底となり、体部から口縁部にかけては大きく開きながら上がり、細く仕上げられた端部に至る。口縁部は外面にタタキを施した後ヨコナデ調整、胴部外面には放射線状のヘラ磨きが施される。内面は体部にナデ調整、底部にヘラナデ調整を施す。底部外面に径2cm大の黒斑が、体部内面にも黒斑が認められる。色調は内外面とも灰白色と鈍い橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(鉢B - - a類)。48はコップ状の鉢で標高2.490mの地点から出土した。約1/2を欠損する。口径は9.7cm、器高は6.8cm、底径は5.1cmを測る。底部は平底で体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナ

デ調整, 体部から底部外面はナデ調整, 内面はハケ調整を施す。内外面とも底部から体部にかけて径7cm大の黒斑がある。色調は, 外面が鈍い橙色で, 内面が灰白色である。胎土には4mm大の小礫と雲母片を含む(鉢A - - b類)。49は標高2,500mの地点から出土した皿状の鉢である。口径は12.7cm, 器高は4.9cmを測る。底部は丸底で, 外上方より大きく開いて立ち上がり, 口縁部で内湾して端部に至る。端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土には2mm大の粗砂を含む(鉢C - - b類)。



第23図 SF - 2出土遺物実測図(弥生土器)

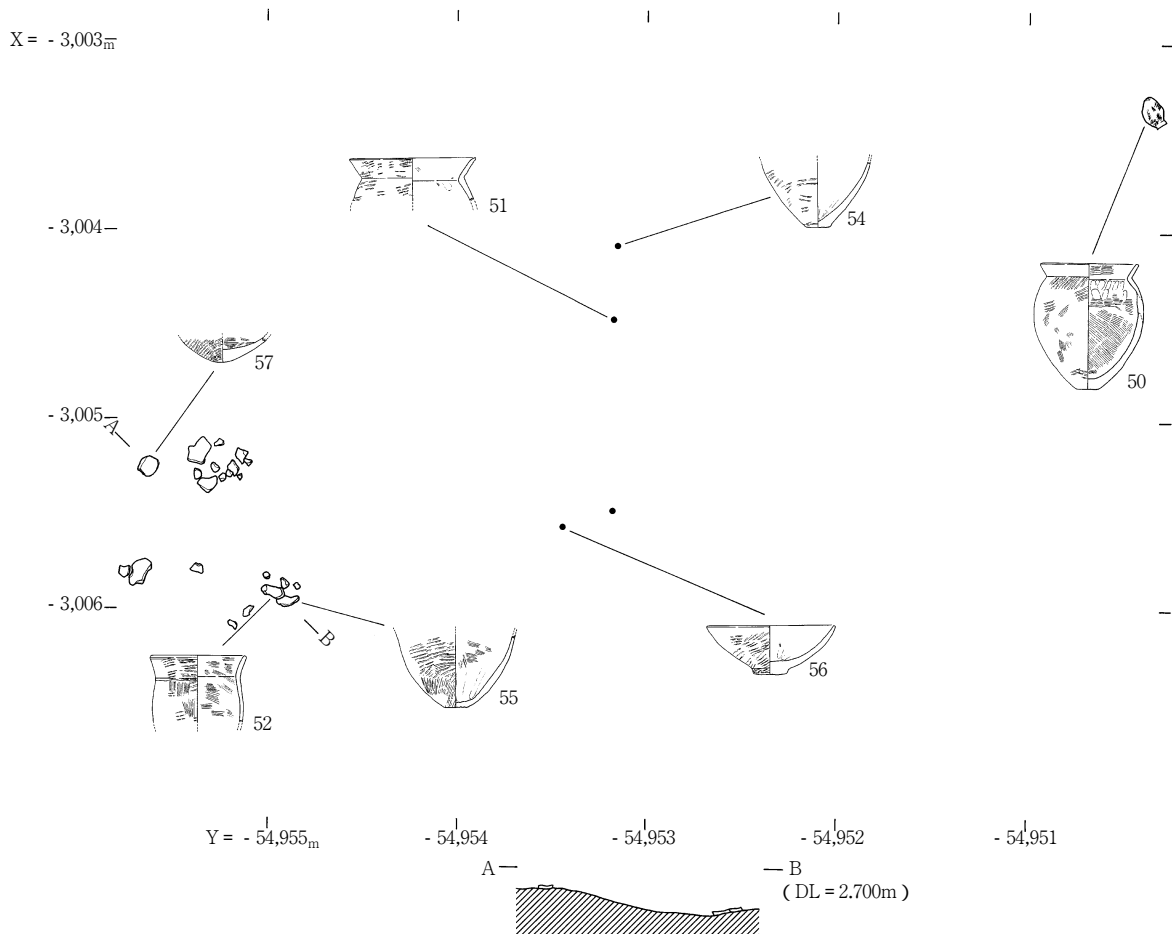
SF - 3(第24図)

調査区の中央部よりやや西, SF - 2の北3mに位置する。北壁に沿って東西方向からやや北東に傾斜した東西約8m, 南北約2mの範囲である。さらに北の調査区外に拡がる可能性もある。また, 遺物が多く出土した試掘トレンチが南東側にあり, その範囲がSF - 2まで拡張する可能性もある。遺物は第25層中から出土しており, 土器組成は弥生土器の甕(50~55), 鉢(56・57)によって構成されている。甕, 鉢はタタキ目が残るものがほとんどである。甕は煤が付着するものが多い。

出土遺物

弥生土器(第25図 50~57)

50~55は甕である。50は標高2.670mの地点から出土した。約1/2が残存する。口径は12.8cm, 器高は16.3cm, 胴部最大径は14.2cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し, 端部に至る。胴部は上位1/3に最大径を有し, 内湾気味に内下方に下がり, 尖底気味で小さな平底の底部に至る。断面等に接合痕が明瞭に残る。胴部外面にはタタキの後に下胴部を中心にハケ調整, 口縁部は内面だけにハケ調整の後ヨコナデ調整, 胴部内面にはハケ調整をそれぞれ施す。肩部内面には粘土紐接合時の指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも一部に煤が付着する。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕A - - b - 1類)。51は標高2.510mの地点から出土した。口縁部から肩部の破片である。口径は16.4cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反して, 細く仕上げられた端部に至る。

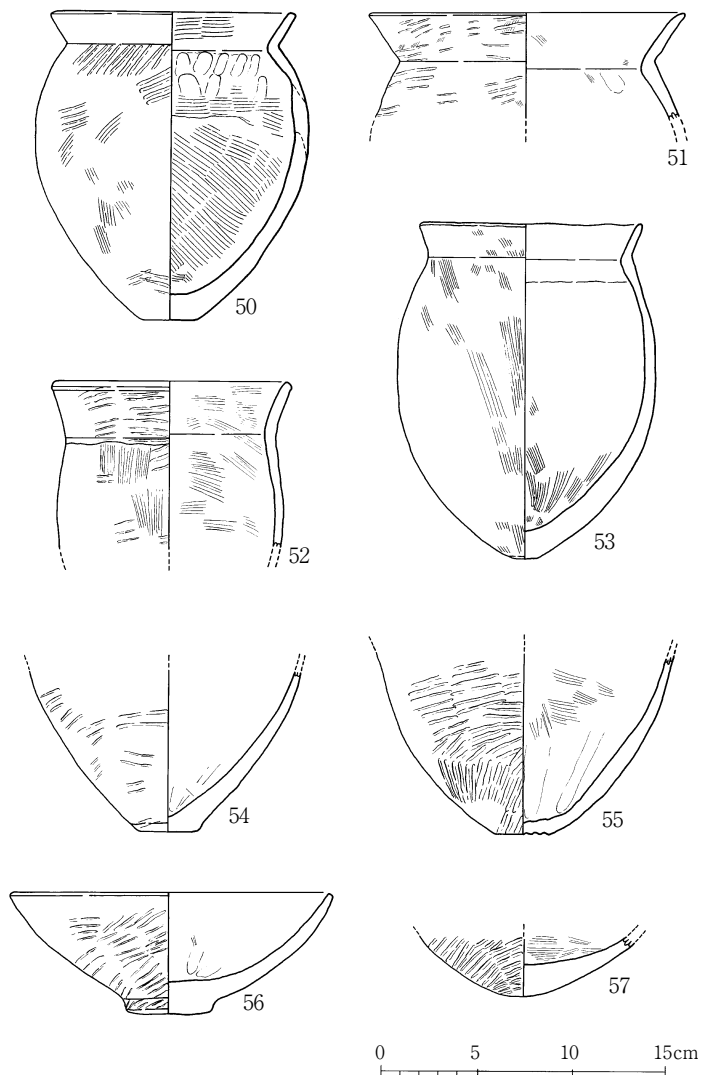


第24図 SF - 3遺物出土状態(弥生土器)

外面はタタキ,内面はナデ調整が施され,口縁部はヨコナデ調整となる。内外面とも一部に煤が付着する。色調は,外面が鈍い橙色,内面が灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕A - c - 2類)。52は標高2.460mの地点から出土した口縁部から胴部の破片である。口径は12.2cmを測る。口縁部は緩やかに外反し,丸く仕上げられた端部に至る。胴部は緩やかに下がる。外面はタタキの後にハケ調整を加え,内面はハケ調整が施される。色調は,外面が橙色,口縁部上端が橙色である以外灰白色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕D - b - 1類)。53は口径11.5cm,器高17.9cm,胴部最大径13.5cmを測る。口縁部が緩やかに外反し,細い端部に至る。胴部中位に最大径を有し,内湾気味に内下方に下がる。底部は尖底気味であるが小さな平底となる。外面はタテ方向のハケ調整,内面はハケ調整の後に胴部中位以上にナデ調整を加える。口唇部から口縁部内面にはヨコナデ調整を施す。底部外面には径2cm大,胴部下半部内面には径10cm大の黒斑が認められる。色調は内外面とも鈍い橙色と橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕D - - a - 1類)。54は標高2.560mの地点から出土した。底径は3.2cmを測る。底部は小さな平底で,胴部は内湾気味に外上方に上がる。外面にはタタキ,内面はナ

デ調整とヘラナデ調整が施される。煤が下胴部外面の一部と内面全面に付着する。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には8mm大の小礫を含む(甕 - c - 2類)。55は標高2.460mの地点から出土した。底部と下胴部の破片である。底径は3.0cmを測る。底部は平底で,胴部は外上方に立ち上がる。外面にタテ方向とヨコ方向のタタキ,内面にはハケ調整の後にナデ調整が施される。煤が下胴部外面に付着する。色調は外面が鈍い橙色,内面が灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕 - c - 1類)。

56,57は鉢である。56はボタン状の底部を有する鉢で標高2.540mの地点から出土した。口径は16.7cm,器高は6.5cm,底径は4.6cmを測る。体部は緩やかに内湾して上がり,丸く仕上げられた端部に至る。外面にはタタキ,底面にはナデ調整が施され,口縁部はヨコナデ調整を加える。内面には径8cm大の黒斑が認められる。色調は内



第25図 SF - 3出土遺物実測図(弥生土器)

外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(鉢A - a類)。57は丸底の鉢で標高2.580mの地点から出土した。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。外面にはタタキ目,内面には八ケ目が認められる。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(鉢C - a類)。

(2)古墳時代

祭祀関連遺構

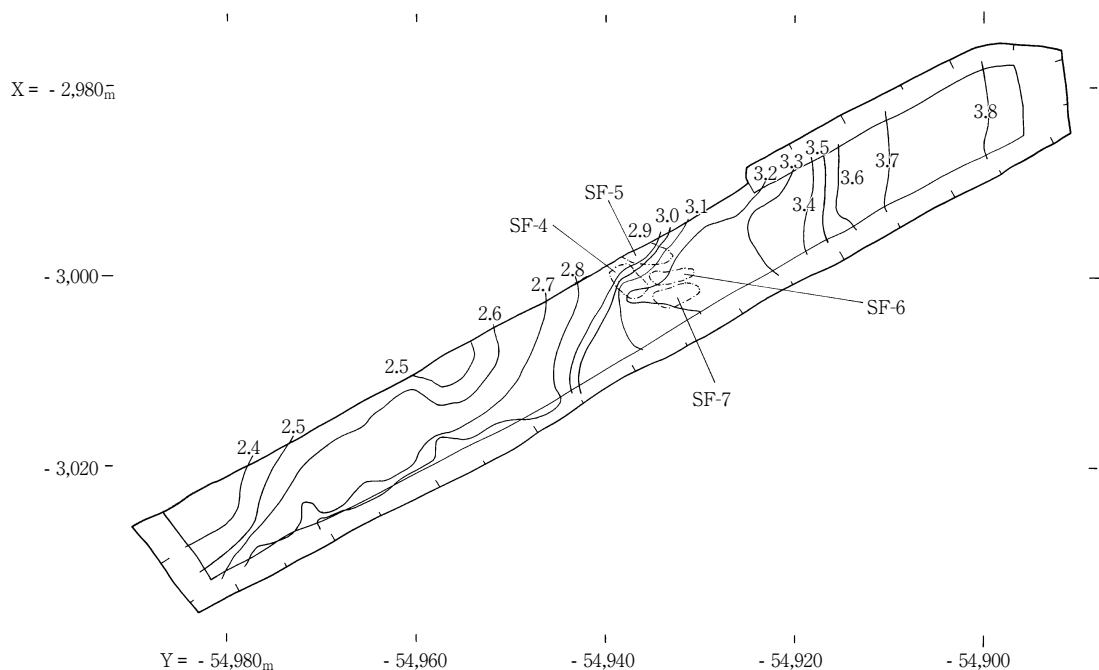
SF - 4(第27図)

調査区の中央部よりやや東に位置し,東西約2m,南北約4mの範囲で,土師器,須恵器等が出土する。北壁に接しているため,北の調査区外に拡がる可能性がある。遺物は第24層中から出土しており,土器組成は土師器の甕(58,59),高杯(60),器台(61),椀(62~65),須恵器の蓋杯(66~73)によって構成されており,蓋杯の占める割合が多い。複数個体の土器片が混ざり,やや散在した状態にあり,破損した複数の土器をまとめて投棄した可能性も考えられる。

出土遺物

土師器(第28図 58~65)

58・59は甕である。58は標高2.900mの地点から出土した口縁部から肩部の破片である。口径は12.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し,端部近くでやや外傾する。端部は丸く仕上げる。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ調整,頸部以下は内外面ともナデ調整を施す。頸部外面には指頭圧痕が認められる。色調は,外面が橙色,内面が鈍い橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕B類)。59は標高2.970mの地点から出土した口縁部から肩部の破片である。口径は12.3cmを測る。口縁部は緩やかに外反し,丸く仕上げられた端部に至る。口縁部は内外面ともヨコナデ調整,頸部以



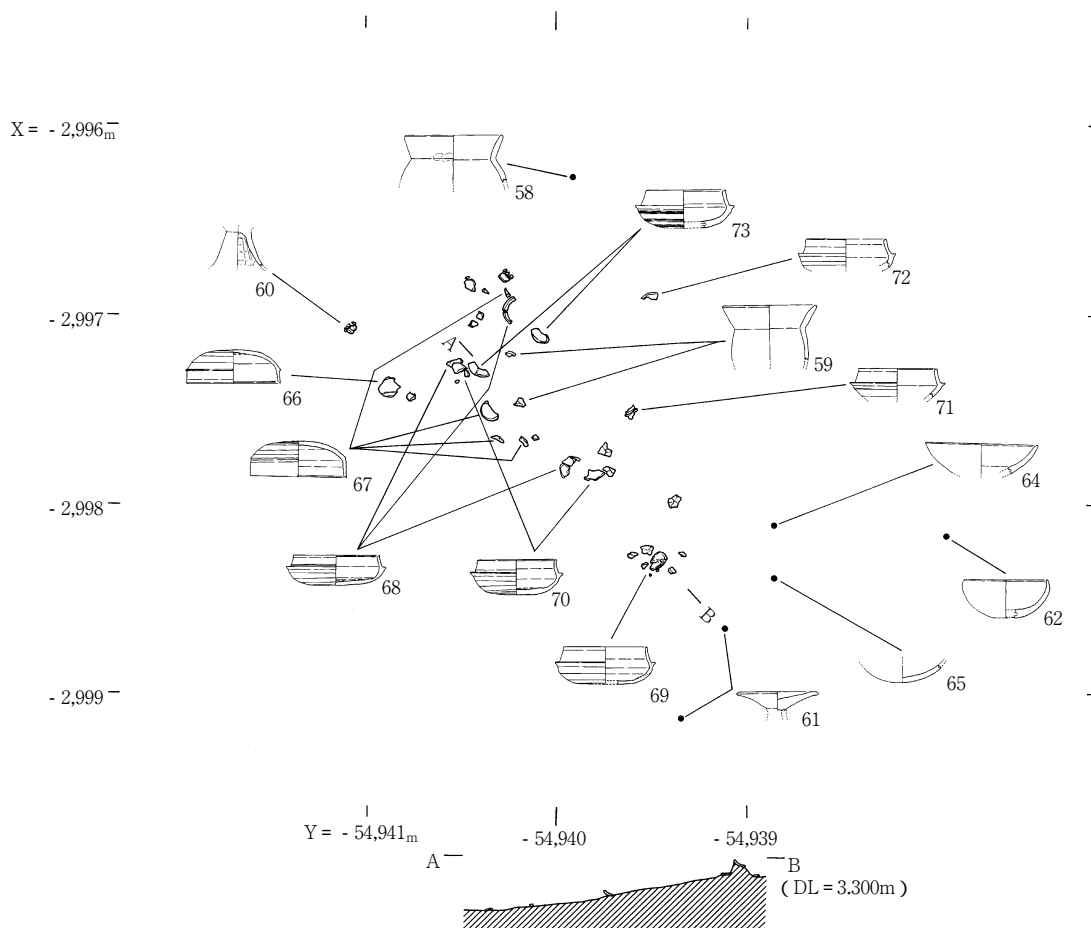
第26図 SF - 4 ~ 7遺構配置図

下は内外面ともナデ調整である。色調は、外面が鈍い橙色、内面が灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕B類)。

60は高杯の脚台部である。標高2.840mの地点から出土した。脚部は直下よりやや外下方に直線的に下り、裾部で屈曲して外に開くものとみられる。脚部の接合は粘土充填による。外面はナデ調整、内面はヘラ削りが施される。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(高杯 - b類)。

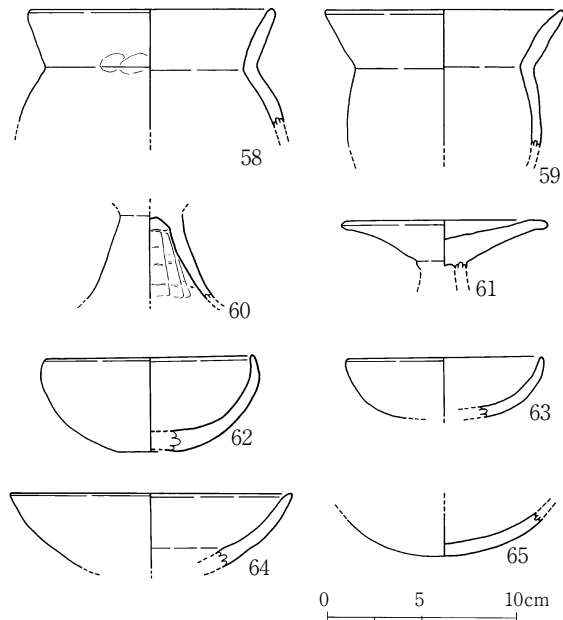
61は器台の器受部である。標高3.250mの地点から出土した。口径は10.8cmを測る。器受部は短く大きく開き、口縁端部は丸く仕上げる。口縁端部はヨコナデ調整で、それ以外はナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(器台B類)。

62～65は椀である。62は標高3.040mの地点から出土した。口径は10.8cm、器高は5.0cmを測る。底部は丸底で、外上方に開き、内湾して立ち上がり、口縁部で内上方に屈曲する。調整は内外面ともナデ調整、口縁部はヨコナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土には2mm大の小礫を含む(椀B - 類)。63は底部を欠く。口径は10.1cm、器高は3.2cmを測る。底部は丸底とみられ、外上方に開き、内湾して立ち上がり、口縁部でその度合を増す。器調整は内外面ともナデ調整、口縁部はヨコナデ調整である。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土には7mm大の小礫を含む(椀B - 類)。64は標高3.070mの地点から出土した。底部を欠く。口径は14.6cmを測る。底部は丸



第27図 SF - 4遺物出土状態(土師器,須恵器)

底とみられ、体部は外上方に開き、口縁部はやや内湾して立ち上がる。調整は内外面ともナデ調整で、口縁部はヨコナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(椀B - 類)。65は標高3.200mの地点から出土した。口縁部を欠く。底部は丸底で、体部はそのまま内湾して立ち上がる。調整は内外面ともナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B 類)。



第28図 SF - 4出土遺物実測図(土師器)

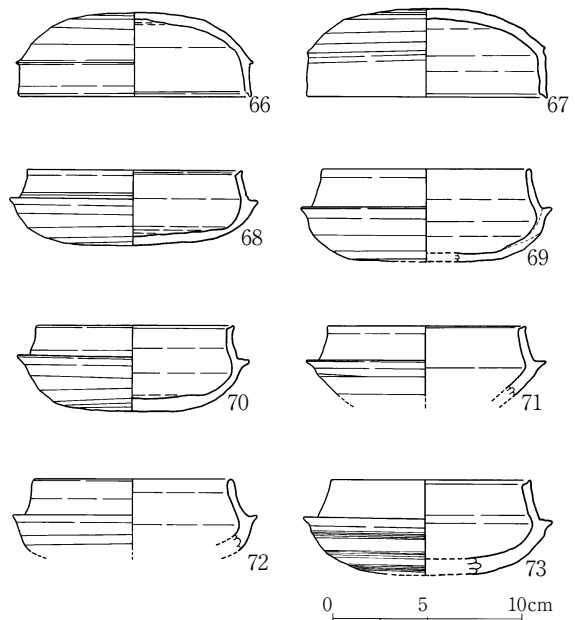
須恵器(第29図 66 ~ 73)

66・67は杯蓋である。66は標高2.960mの地点から出土した。口径は12.1cm、器高は4.5cm、口縁部高は1.8cm、稜径は12.4cmを測る。天井

部はやや丸みを有し、口縁部との境をなす稜は断面三角形であるがやや短く鋭さを欠く。口縁部はほぼ垂直に下がる。端部は内傾する浅い凹面をなす。天井部外面約2/3に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデ調整である。天井部内面には成形時の粘土巻き上げ痕が残る。また、天井部外面には自然釉が付着する。色調は、外面が灰白色、内面が灰色を呈し、胎土は白色砂粒を含む(杯蓋B - b - 1類)。67は標高3.050mの地点から出土した。口径は12.5cm、器高は4.7cm、口縁部高は2.7cm、稜径は12.4cmを測る。天井部はやや丸みを有し、口縁部との境をなす稜は下に凹線を回らすことにより造り出す。口縁部は比較的長くほぼ直下に下がる。端部は内傾する浅い凹面をなす。天井部外面約2/3に回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデ調整である。天井部内面には成形時の粘土巻き上げ痕が残る。色調は内外面とも灰白色で、胎土には白色砂粒を含む(杯蓋A - a - 2類)。

68 ~ 73は杯身である。68は標高3.00mの地点から出土した。口径は11.1cm、器高は4.0cm、立ち上がり高は1.5cm、受け部径は13.0cmを測る。底部は平らに近い丸底で、受け部は断面三角形で水平に短く延び、立ち上がりは内傾して直線的に上がり、端部は外傾する浅い凹面をなす。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整が施され、内底面は回転力キ目調整で、残りは回転ナデ調整である。また、底部内面には成形時の粘土巻き上げ痕が残る。色調は、底部外面が灰色、それ以外の部分が灰白色を呈する。胎土は白色砂粒を含む(杯身B - b - 1類)。69は標高3.250mの地点から出土した。口径は10.8cm、器高は4.9cm、立ち上がり高は2.0cm、受け部径は13.1cmを測る。底部は平らに近い丸底で、受け部は短く若干上方を向き、立ち上がりは比較的高く内傾して上がり、端部を丸く仕上げる。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整が施され、残りは回転ナデ調整である。断面には成形時の粘土紐巻き上げ痕は比較的良く残る。色調は内外面とも灰白色で、胎土は白色砂粒を含む(杯身B - a - 2類)。70は標高3.150mの地点から出土した。口径は10.2cm、器高は4.5cm、立ち上がり高は1.7cm、受け部径は12.1cmを測る。底部は平らに近い丸底で、受け部は短く水平に伸び、立ち上がりは内傾した後、角度を変えほぼ直線的に上がる。端部は外傾する浅い凹面をなす。底部外面

約1/2に回転ヘラ削り調整が施され、残りは回転ナデ調整である。底部外面に自然釉が付着する。色調は内外面とも灰色で、胎土は白色小礫粒、黒色砂粒を含む(杯身B - b - 1類)。71は標高3.070mの地点から出土した。底部を欠く。口径は10.4cm、立ち上がり高は1.8cm、受け部径は12.5cmを測る。受け部は断面三角形で短く水平に延び、立ち上がりは内傾して内湾気味に延びる。端部は内傾する浅い凹面をなす。底部外面約3/4回転ヘラ削りが施され、残りは回転ナデ調整である。色調は、天井外面が灰色で、それ以外は灰色を呈する。胎土は白色砂粒を含む(杯身B - b - 1類)。72は標高3.030mの地点から出土した。底部を欠く。口径は10.2cm、立ち上がり高は1.9cm、受け部径は12.8cmを測る。受け部は短くやや上方を向き、立ち上がりは比較的高く、内湾気味に内傾して延びる。端部は丸い。底部外面には回転ヘラ削り調整が認められる。色調は内外面とも灰白色で、胎土は白色砂粒を含む(杯身A - a - 2類)。73は標高2.990mの地点から出土した。底部の一部を欠く。口径は10.5cm、器高は5.0cm、立ち上がり高は2.0cm、受け部径は13.0cmを測る。底部は平らに近い丸底で、受け部は短くやや下方を向き、立ち上がりは内傾してほぼ真直ぐ延びる。端部は内傾する凹面をなす。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整の後に回転カキ目調整を加える。それ以外は回転ナデ調整である。受け部の外周附近には自然釉の付着がみられる。色調は、底部外面が灰色で、それ以外の部分が灰色を呈する。胎土は白色小礫を含む(杯身B -



第29図 SF - 4出土遺物実測図(須恵器)

- b - 1類)

SF - 5(第30図)

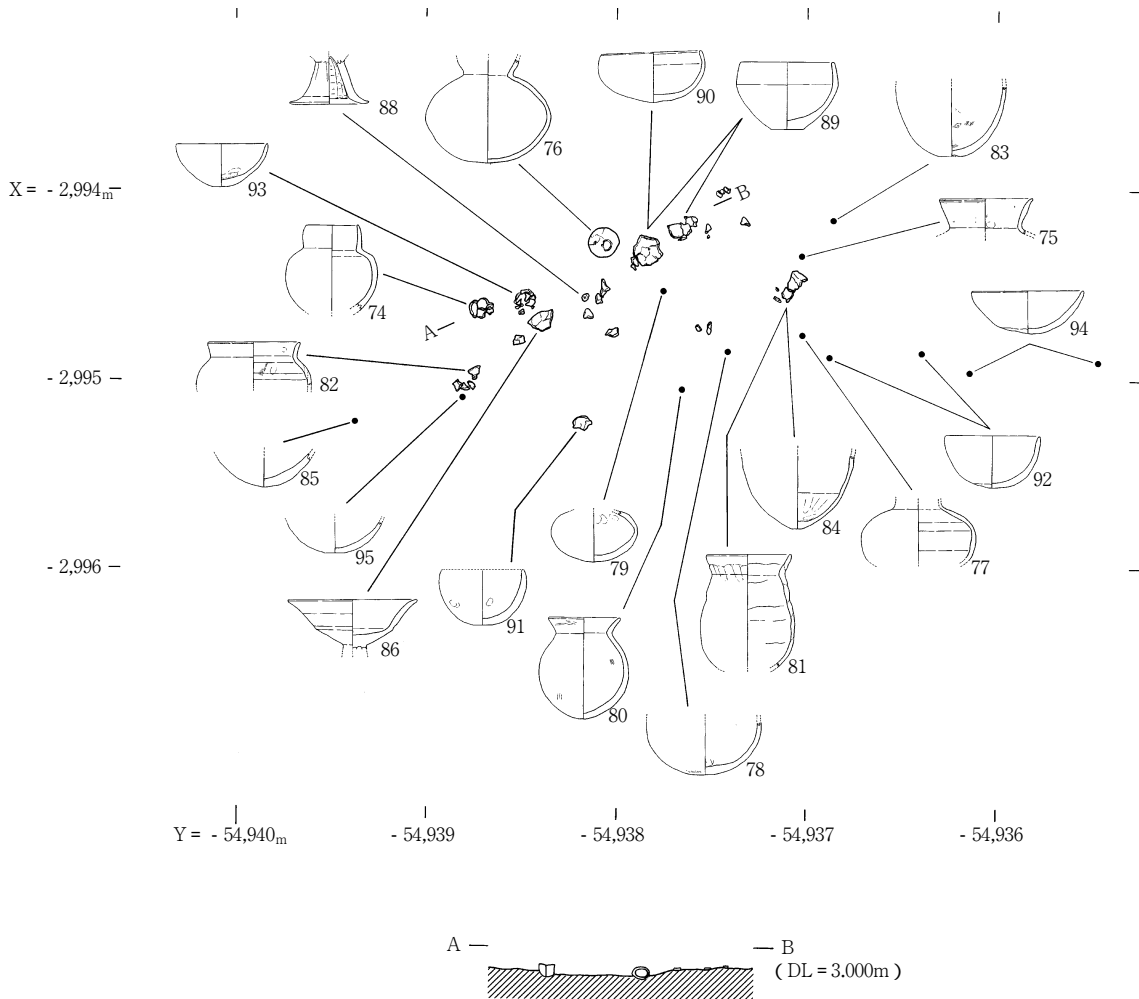
調査区の中央部よりやや東、SF - 4より北東に約2mに位置し、東西約2m、南北約1mの狭い範囲で、土師器のみが出土する。北壁に接しているため、北の調査区外に拡がる可能性がある。遺物は第24層中から出土しており、土器組成は土師器のみで構成されており、器形には壺(74~79)、甕(80~85)、高杯(86~88)、椀(89~96)がある。

出土遺物

土師器(第31図 74~96)

74~79は壺である。74は標高2.860mの地点から出土した。小型の壺で底部を欠損する。口径は6.2cm、胴部最大径は12.0cmを測る。口頸部は短く直立して伸び、端部は丸く仕上げる。胴部は断面が円形に近く、上半部から膨らみや張った肩を形成し、最大径は胴中央部やや上にある。下胴部は内湾しながら内下方に下る。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、胴部はナデ調整である。色調は、外面が橙色、内面が鈍い橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(壺B - 2 - a類)。75は標高2.980mの地点から出土した口頸部の破片である。口径は12.2cmを測る。口縁部は「く」の字形に外

反してほぼ直線的に伸び、端部は丸く仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、胴部は残存部からナデ調整とみられる。頸部に指頭圧痕が残る。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む。雲母片も含まれる(壺A - 1類)。76は標高2.860mの地点から出土した。口縁部が欠損する。胴部最大径は16.2cmを測る。残存部から口縁部は外上方に若干内湾しながら立ち上がるものとみられる。胴部は算盤玉状を呈し、最大径は中位にある。底部は丸底である。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ調整、胴部が内外面ともナデ調整とみられる。底部外面に長径8cm大の黒斑がある。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(壺A - 1 - b類)。77は標高3.040mの地点から出土した胴部の破片である。胴部最大径は15.0cmを測る。胴部は断面扁平な楕円形とみられ、肩部から大きく屈曲し、最大径が胴部上位1/3にある。表面の磨耗は著しいが、胴部は内外面ともナデ調整とみられる。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(壺A - b類)。78は標高2.940mの地点から出土した下胴部から底部の破片である。胴部はほぼ球形を呈し、底部は丸い。底部外面にはハケ調整、内面にはヘラナデ調整が施され、その他は内外面ともナデ調整である。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(壺A - b類)。79は標高2.990mの地点から出土した小型の壺である。口頸部を欠く。胴部最大径は11.4cmを測る。胴部は断面扁平な楕円形し、最大径は胴中位にある。底部は丸い。調整は内外面ともナデ調整であ



第30図 SF - 5遺物出土状態(土師器)

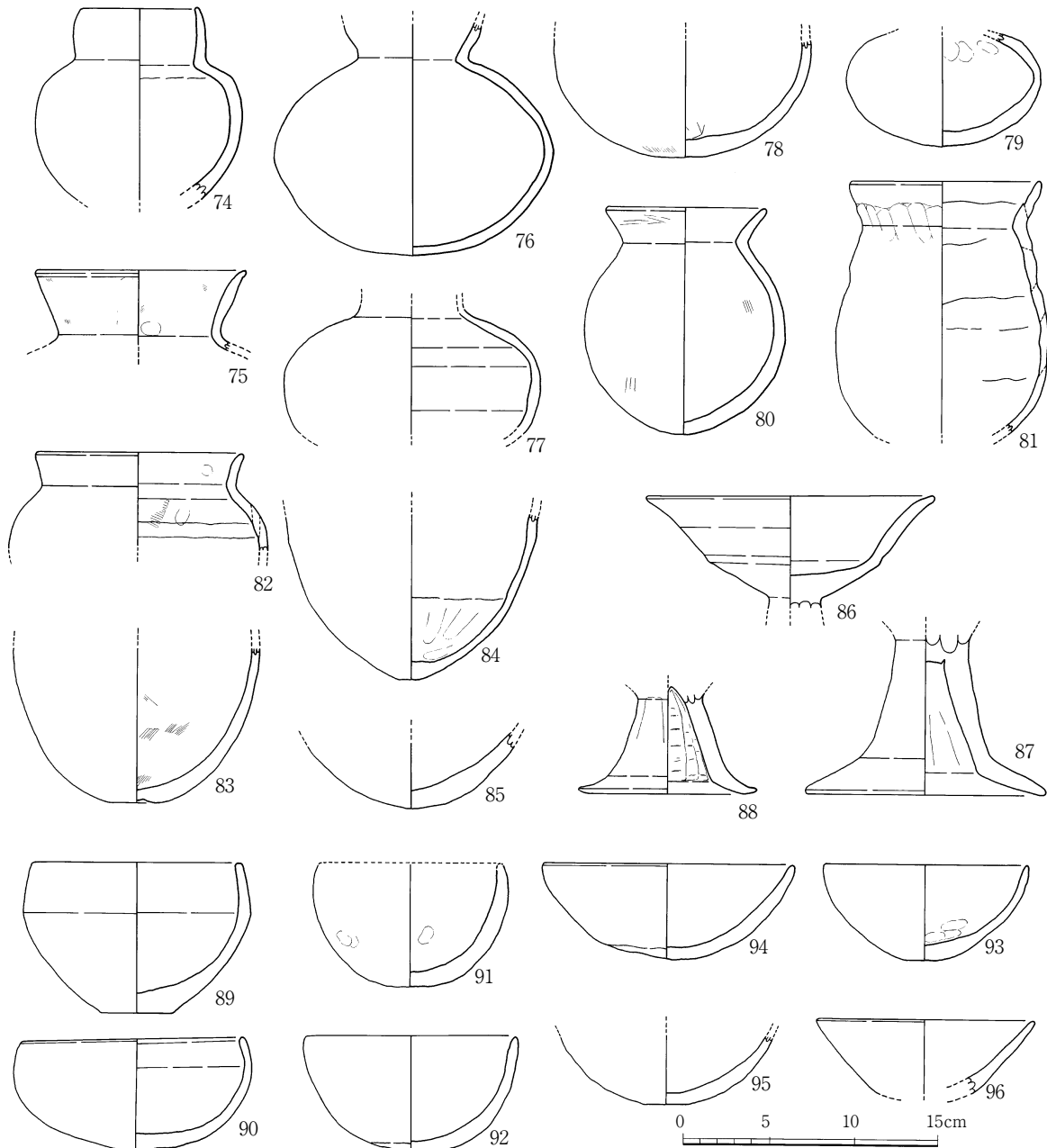
る。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(壺B - b類)。

80～85は甕である。80は標高2.980mの地点から出土した小型の甕である。口径は9.2cm,器高は13.3cm,胴部最大径は11.7cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し,丸く仕上げられた端部に至る。胴部はほぼ球形を呈し,最大径が中位にある。底部は丸底である。調整は,口縁部が内外面ともヨコナデ調整,胴部が内外面ともナデ調整である。頸部外面には継ぎ目の接合痕が確認できる。また,胴下半部外面に径2cm大の黒斑がみられる。色調は,外面が鈍い橙色ないし浅黄橙色,内面が鈍い橙色ないし浅黄橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(甕A - 類)。81は標高2.920mの地点から出土した長胴の甕で底部が欠損する。口径は11.4cm,胴部最大径は12.4cmを測る。口縁部は「く」の字形をなし,端部は丸く仕上げる。長胴の胴部は,その最大径が中位よりやや下にある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整,胴部はナデ調整を施すが,調整は雑で内外面とも凹凸が目立ち,継ぎ目の接合痕も明瞭に確認できる。頸部外面には指頭圧痕が残る。色調は内外面とも橙色であり,胎土には2mm大の小礫を含む(甕B - 2類)。82は標高2.830mの地点から出土した口縁部から胴部の破片である。口径は12.0cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し端部に至る。肩部はやや張り,胴部は内湾して下がる。調整は,口縁部が内外面ともヨコナデ調整,胴部が内外面ともナデ調整であり,胴部内面にはハケ目が一部に残る。色調は内外面とも灰白色であり,胎土には5mm大の小礫を含む(甕A類)。83は標高3.080mの地点から出土した下胴部から底部の破片である。底部は平底状を呈し,胴部は内湾して上がる。調整は内外面ともナデ調整であるが,内面にハケ目が残る。また,底部内面に煤が付着する。色調は内外面とも鈍い橙色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕類)。84は標高2.920mの地点から出土した下胴部から底部の破片である。底部は尖り気味で小さな平底となり,胴部は内湾して上がる。調整は内外面ともナデ調整であるが,調整は雑で内外面とも凹凸が目立ち継ぎ目の接合痕も確認できる。内底面には指頭圧痕が認められる。色調は外面が灰黄橙色,内面が橙色と鈍い橙色を呈する。胎土には2mm大の小礫を含む(甕類)。85は標高3.000mの地点から出土した底部の破片である。底部は丸底で外上方に内湾して立ち上がる。調整は内外面ともナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(甕類)。

86～88は高杯である。86は標高2.850mの地点から出土した杯部である。口径は16.8cmを測る。杯底部は水平より斜め上方にやや内湾気味に立ち上がり,口縁部は稜を境に外反する。端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整,他はナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(高杯A類)。87は脚台部である。底径は14.1cmを測る。柱状部は若干広がりながら直下に下がり,裾部は屈曲し大きく開き,端部を丸く仕上げる。柱状部外面はナデ調整,裾部はヨコナデ調整である。柱状部内面はヘラ削りの後ナデ調整を施す。脚台部は粘土充填により接合する。色調は,外面が橙色,内面が橙色と灰白色,断面が灰色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(高杯 - b類)。88は標高2.850mの地点から出土した脚台部である。底径は10.2cmを測る。柱状部は「八」の字形に開き,裾部は屈曲して短く大きく開く。柱状部外面はナデ調整,裾部はヨコナデ調整,柱状部内面はヘラ削りが施される。柱状部内面には絞り目が残る。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(高杯 - a類)。

89～96は椀である。89は標高2.850mの地点から出土した平底の椀である。口径は12.0cm,器高

は8.8cm, 体部最大径は13.3cm, 底径は4.2cmを測る。底部は平底で, 体部は内湾して外上方に上がり, 最大径をなす体部上位に至る。口縁部は内傾して短く直線的に上がる。端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は, 外面が橙色と鈍い橙色, 内面が橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(椀A - 類)。90は標高2.840mの地点から出土した。口径は12.9cm, 器高は6.8cm, 体部最大径は13.8cmを測る。底部は丸底で, 体部は内湾気味に立ち上がり, 口縁部で内湾して上がる。端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は, 外面が灰白色, 内面が灰黄色を呈する。胎土には7mm大の小礫を含む(椀B - 類)。91は標高2.870mの地点から出土した平底の椀で, 口唇部を欠く。口径は約10.5cm, 器高は7.2cm, 体部最大径は13.4cmを測る。底部は丸底で, 体部は内湾して外上方に立ち上がり, 口縁部でさらに内湾する。



第31図 SF - 5出土遺物実測図(土師器)

調整は内外面ともナデ調整で、体部内面には指頭圧痕が認められる。色調は、外面が鈍い橙色、内面が橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(椀B - 類)。92は標高3.050mの地点から出土した丸底の椀である。口径は12.2cm, 器高は6.8cmを測る。底部は丸底で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外傾し、端部を細く仕上げる。調整は内外面ともヘラ磨きである。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。93は標高2.850mの地点から出土した平底の椀である。口径は11.8cm, 器高は5.6cmを測る。底部は丸底で、体部から口縁部にかけて内湾して外上方に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整が施される。内底面には指頭圧痕が明瞭に残る。また、体部内面に径10cm大の黒斑が認められる。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。94は標高3.130mの地点から出土した93とほぼ同じ形態の椀である。口径は14.5cm, 器高は5.6cmを測る。底部は丸底で外上方に大きく開き、体部は内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整が施される。色調は、外面が灰白色で一部橙色、内面が灰黄褐色を呈する。胎土には1mm大の粗砂を含む(椀B - 類)。95は標高3.050mの地点から出土した93とほぼ同じ形態の椀とみられ、底部は丸底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。体部・底部内外面はナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色、断面が褐灰色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(椀B類)。96は、底部が欠損する椀である。口径は12.8cm, 器高は4.8cmを測る。体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり丸く仕上げた口縁端部に至る。口縁部はヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。色調は、外面が橙色、内面が黄灰色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(椀B - 類)。

SF - 6(第32図)

調査区の中央部よりやや東、SF - 5より南に約2mの所に位置し、東西約4m、南北約2mの範囲で、土師器と須恵器が出土する。SF - 1 ~ 5に比べると遺物の密度は少ない。遺物は第24層中から出土しており、土器組成は土師器の甕(97 ~ 100)、高杯(101 ~ 104)、椀(105・106)、須恵器の蓋杯(107 ~ 110)によって構成されている。

出土遺物

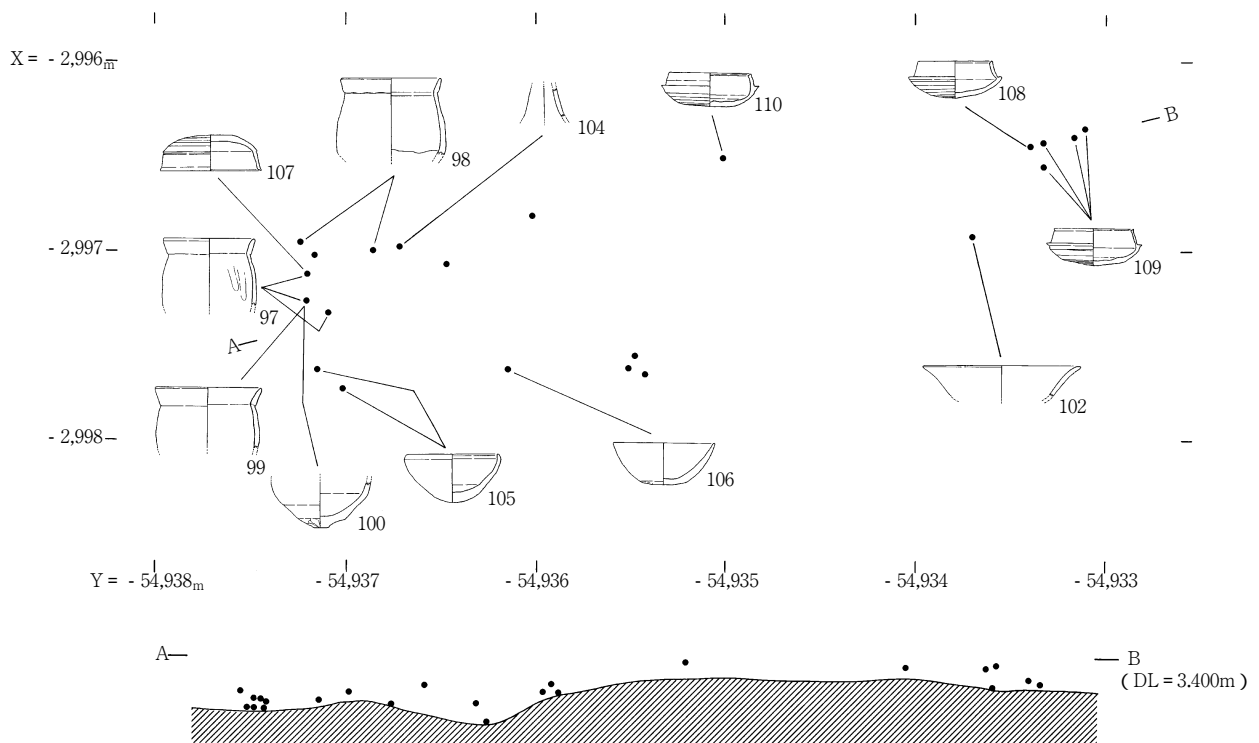
土師器(第33図 97 ~ 106)

97 ~ 100は甕である。97は標高3.140mの地点から出土した口縁部から胴部の破片である。口径は11.6cm, 胴部最大径は12.3cmを測る。口縁部は緩やかに外反し丸く仕上げた端部に至る。胴上半部は緩やかに内湾気味に膨らみながら下がる。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はナデ調整、胴部内面は指ナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には2mm大の粗砂を含む(甕B類)。98は標高3.130mの地点から出土した97と同形態の甕である。口径は13.1cm, 胴部最大径は14.2cmを測る。口縁部は緩やかに外反し丸く仕上げた端部に至る。胴上半部は緩やかに内湾気味に膨らみながら下がる。口縁部はヨコナデ調整で、胴部は内外面ともナデ調整であるが、器面には接合の際の継ぎ目が認められる。色調は、内外面とも橙色、断面が灰色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(甕B類)。99は標高3.140mの地点から出土した97と同形態の甕である。口径は13.6cm, 胴部最大径は13.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し丸く仕上げた端部に至る。胴上半部は緩やかに内湾気味に膨らみながら下がる。口縁部はヨコナデ調整で、胴部は内外面ともナデ調整である。頸部外面

には粘土紐接合の際の継ぎ目が認められる。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には1mm大の粗砂を含む(甕B類)。100は標高3.140mの地点から出土した底部の破片である。底部は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り尖底気味となり、胴部は内湾気味に上がる。調整は内外面ともナデ調整である。色調は、外面が橙色、内面が灰黄色を呈する。胎土には2mm大の粗砂と雲母片を含む(甕類)。

101~104は高杯である。101は口縁部から体部の破片である。口径は17.0cmを測る。体部はやや直線的に外上方に立ち上がり口縁部で外反する。端部は丸く仕上げる。調整は内外面ともヨコナデ調整である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(高杯A類)。102は標高3.350mの地点から出土した口縁部から体部の破片である。口縁部は20.1cmを測る。体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部で外反する。端部は丸く仕上げる。調整は内外面ともヨコナデ調整である。色調は、外面が鈍い黄橙色、内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(高杯A類)。103は杯底部と脚台部で約1/2が残存する。底径は11.7cmを測る。杯底部は水平よりやや外上方に立ち上がる。柱状部は「八」の字形をなし、裾部は屈曲して短く延び、端部は丸く仕上げる。柱状部内面にはヘラ削り調整、他はナデ調整である。脚台基部は粘土充填による。色調は、杯底部内面が鈍い橙色、杯底部外面と脚部内外面が鈍い橙色ないし黄灰色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(高杯 - b類)。104は標高3.220mの地点から出土した脚台部の一部である。柱状部はやや開き気味に下がる。調整は、器面の磨耗が著しく不明である。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む。

105 106は椀である。105は標高3.170mの地点から出土した。口径は11.8cm 器高は6.3cm 体部最大径は12.6cmを測る。底部は丸底である。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり口縁部でさらに内湾し口縁



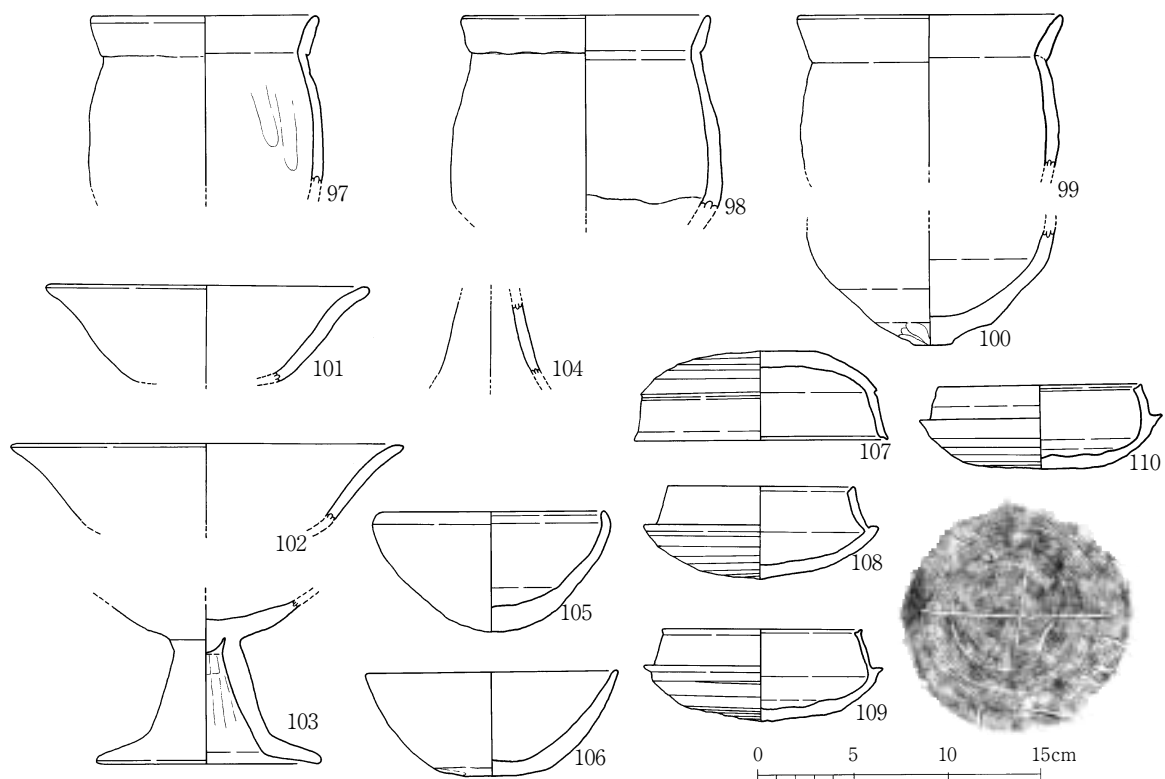
第32図 SF - 6遺物出土状態(土師器,須恵器)

端部に至る。口縁部はヨコナデ調整で 他はナデ調整である。色調は 底部外面が黄灰色を呈す以外橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。106は標高3.260mの地点から出土した。口径は13.1cm 器高は5.5cmを測る。底部は平底風の丸底で 体部はやや内湾して口縁部は外上方に直線的に延びる。口縁部はヨコナデ調整 他はナデ調整である。色調は 外面が黄灰色ないし一部橙色 内面が黄灰色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(椀B - 類)。

須恵器(第33図 107 ~ 110)

107は杯蓋である。標高3.180mの地点から出土した。口径は13.4cm , 器高は4.7cm , 口縁部高は2.7cm , 稜径は12.4cmを測る。天井部はやや丸みを有し, 口縁部との境をなす稜は下方に廻らされた凹線によって造り出す。口縁部は比較的長く, 「八」の字形に開く。端部は内傾する段をなす。天井部外面3/4に回転ヘラ削り調整, 他は回転ナデ調整である。天井部内面には成形時の粘土紐巻き上げ痕が残る。天井部外面に自然釉が付着する。色調は, 外面が灰白色, 内面が灰色を呈する。胎土には白色砂を含む(杯蓋A - - b - 2類)。

108 ~ 110は杯身である。108は標高3.360mの地点から出土した。口径は9.8cm , 器高は4.9cm , 立ち上がり高は2.3cm , 受け部径は12.4cmを測る。底部は丸く, 受け部は短く若干上方を向く。立ち上がりは比較的高く, 内上方に外湾気味に立ち上がる。端部は外傾する浅い凹面をなす。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整, 他は回転ナデ調整である。内底面には成形時の粘土紐巻き上げ痕が残る。色調は, 外面が灰白色, 内面が灰色を呈する。胎土には白色砂粒を含む(杯身A - - b - 2類)。109は標高3.260mの地点から出土した。口径は10.4cm , 器高は4.9cm , 立ち上がり高は2.0cm , 受け部径は12.5cmを測る。底部は丸く, 受け部は短く水平を向く。立ち上がりは比較的高く, 内傾して



第33図 SF - 6出土遺物実測図(土師器 須恵器)

直線的に上がる。端部は外傾する凹面をなす。底部外面の大半に回転ヘラ削り調整,他は回転ナデ調整である。内底面には成形時の粘土紐巻き上げ痕が残る。底部外面には自然釉が付着する。色調は内外面とも灰白色を呈し,胎土は白色砂粒を含む(杯身B - - b - 1類)。110は標高3.220mの地点から出土した。口径は10.7cm,器高は4.4cm,立ち上がり高は1.7cm,受け部径は12.7cmを測る。底部は平らに近い丸底で,受け部は短く水平を向く。立ち上がりは比較的高く,内上方に内湾気味に立ち上がる。端部は外傾する浅い凹面をなす。底部外面の大半に回転ヘラ削り調整,他は回転ナデ調整である。内底面には成形時の粘土紐巻き上げ痕が残る。また,外底面には「x」印のヘラ記号が施される。色調は内外面とも灰白色を呈し,胎土には白色小礫を含む(杯身B - - b - 2類)。

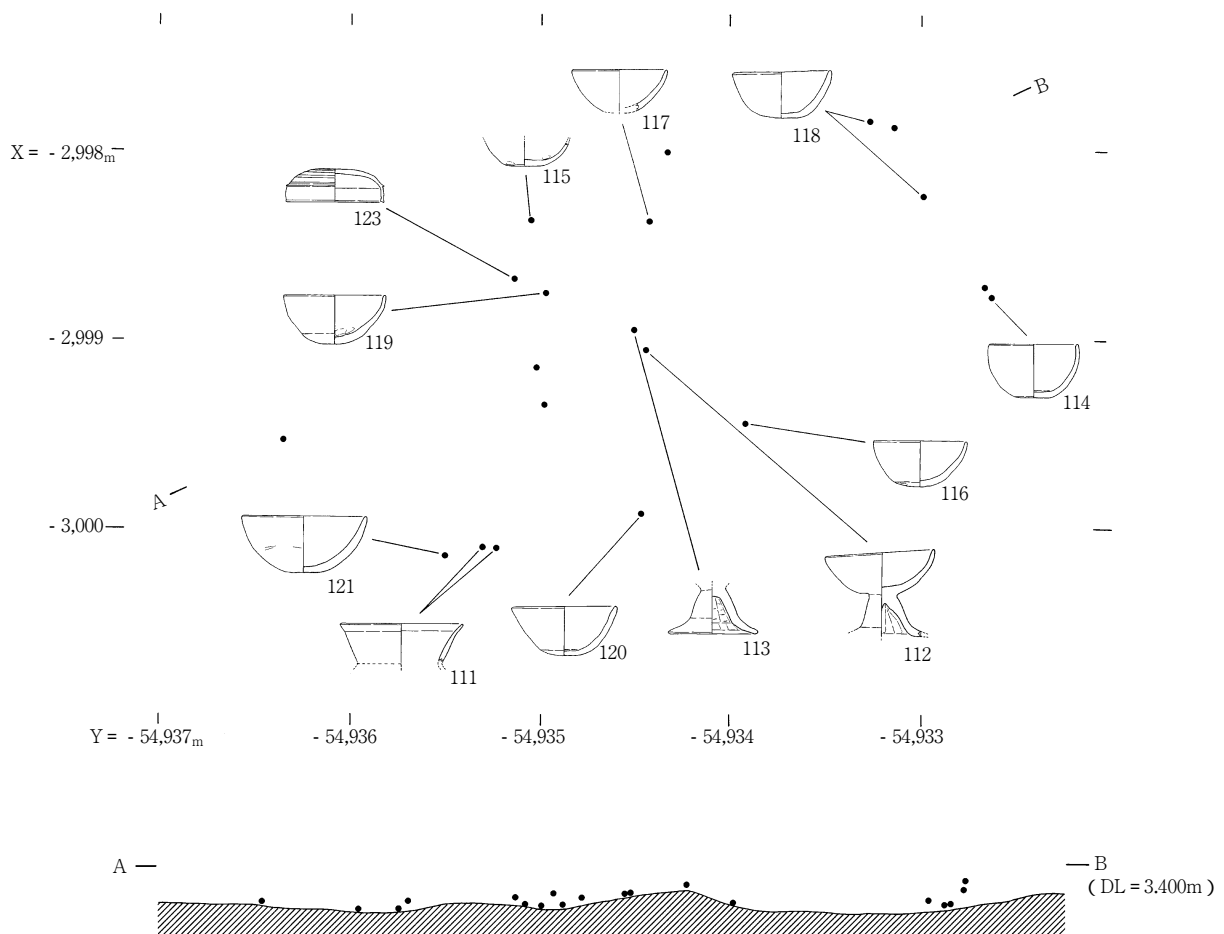
SF - 7(第34図)

調査区の中央部やや東,SF - 6の南に位置し,東西約4m,南北約2mの範囲で,土師器と須恵器が出土する。SF - 1 ~ 5に比べると土器の密度は少ない。遺物は第24層中から出土しており,土器組成は土師器の壺(111),高杯(112,113),碗(114 ~ 122),須恵器の蓋杯(123)によって構成されている。

出土遺物

土師器(第35図 111 ~ 122)

111は壺である。標高3.170mの地点から出土した。口径は15.9cmを測り口縁部のみ残存する。口

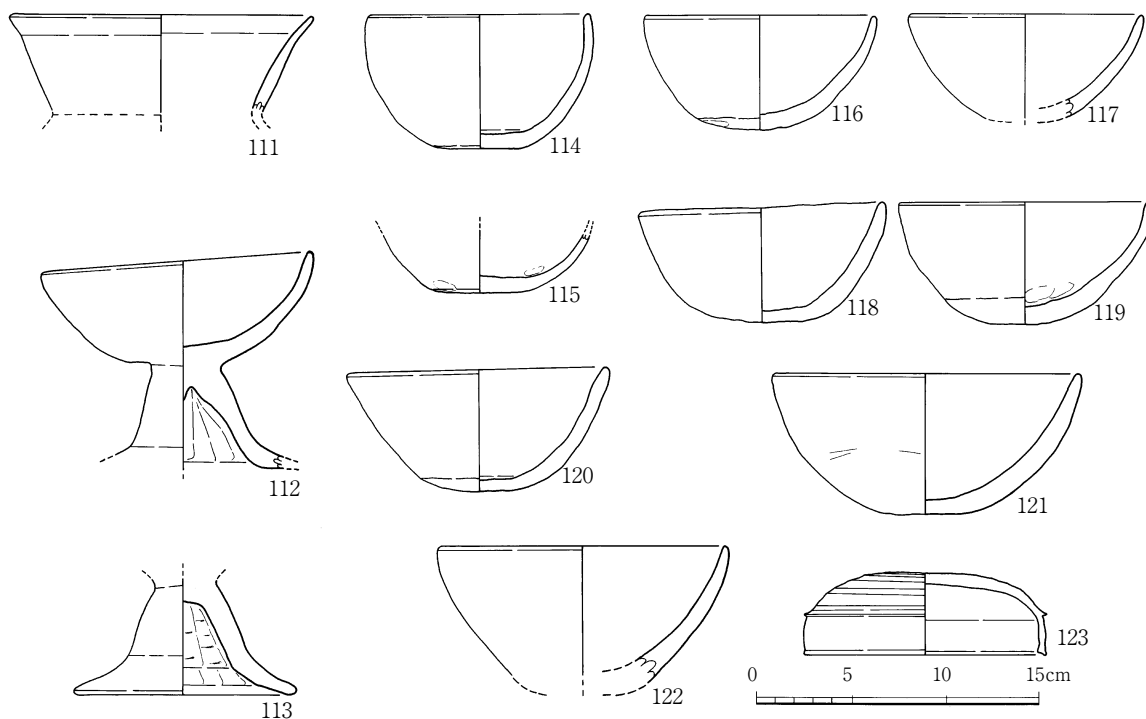


第34図 SF - 7遺物出土状態(土師器,須恵器)

縁部は外傾して延び、端部近くでさらに外傾する。調整は内外面ともヨコナデ調整である。色調は灰黄色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(壺A - 1類)。

112, 113は高杯である。112は標高3.250mの地点から出土した椀状をなす高杯である。裾部の一部を欠損する。口径は14.1cm, 器高は11.5cmを測る。杯部は内湾して外上方に立ち上がり, 口縁端部に至る。端部は丸く仕上げる。柱状部は「八」の字形に開き, 裾部で屈曲する。調整は, 口縁部がヨコナデ調整, 柱状部内面がヘラ削り調整, 他はナデ調整を施す。脚部内面には絞り目が残る。色調は, 杯部が鈍い橙色, 脚部が橙色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(高杯B - 2 - a類)。113は標高3.250mの地点から出土した脚台部である。底径は11.7cmを測る。柱状部は「八」の字形に開き, 裾部は屈曲して外下方に開く。柱状部外面はナデ調整, 裾部内外面はヨコナデ調整, 柱状部内面はヘラ削りが施される。杯部との接合は粘土充填による。色調は内外面とも橙色を呈する。胎土には6mm大の小礫を含む(高杯 - b類)。

114 ~ 122は椀である。114は標高3.320mの地点から出土した平底の椀である。口径は11.4cm, 器高は7.1cm, 底径は5.0cmを測る。体部は平底の底部から外上方に内湾して立ち上がり, 口縁部ではほぼ真上を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は内外面とも橙色ないし黄灰色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(椀A - 類)。115は標高3.240mの地点から出土した平底の椀で, 口縁部を欠く。底径は5.7cmを測る。体部は平底の底部から外上方に内湾気味に立ち上がる。調整はナデ調整である。色調は, 外面が黄灰色ないし明黄褐色, 内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀A - 類)。116は標高3.290mの地点から出土した丸底の椀である。口径は12.0cm, 器高は6.0cmを測る。底部は丸底で, 体部は外上方に内湾しながら立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は, 外面が橙色ないし黄灰色, 内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。117は標高3.250mの地点から出土



第35図 SF - 7出土遺物実測図(土師器, 須恵器)

した116とほぼ同じ形態の椀である。口径は12.2cm, 器高は5.7cmを測る。体部は外上方に内湾しながら立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整で, 他はナデ調整を施す。色調は, 外面が黄灰色, 内面が明赤褐色を呈する。胎土には4mm大の小礫を含む(椀B - 類)。118は標高3.190mの地点から出土した平底気味の椀である。口径は12.8cm, 器高は6.3cmを測る。底部は平底気味の丸底で, 体部は外上方に内湾しながら立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。体部外面には3cm大の黒斑がある。色調は, 外面が鈍い橙色, 内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。119は標高3.190mの地点から出土した丸底の椀である。口径は13.1cm, 器高は6.4cmを測る。底部は丸底で, 体部は外上方に内湾しながら立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。内底面には指頭圧痕が明瞭に残る。色調は, 外面が橙色, 内面が鈍い橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀B - 類)。120は標高3.250mの地点から出土した119と同形態の椀である。口径は13.8cm, 器高は6.6cm, 底径は4.6cmを測る。底部は丸味があり, 体部は外上方へ内湾して立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は, 外面が橙色ないし灰黄色, 内面が橙色を呈する。胎土には5mm大の小礫を含む(椀A - 類)。121は標高3.170mの地点から出土した。119とほぼ同形態の椀である。口径は16.0cm, 器高は7.4cm, 底径は4.0cmを測る。底部は小さな平底となり, 体部は外上方へ内湾して立ち上がり, 口縁部は外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整, 他はナデ調整を施す。色調は内外面とも灰白色ないし黄灰色を呈する。胎土には3mm大の小礫を含む(椀A - 類)。122は底部を欠く。口径は15.0cm, 器高は7.8cmを測る。体部は外上方に内湾しながら立ち上がり, 口縁部でやや外上方を向く。口縁部はヨコナデ調整で, 他はナデ調整が施される。色調は, 内外面とも橙色を呈する。胎土は3mm大の小礫を含む(椀 類)。

須恵器(第35図 123)

123は標高3.190mの地点から出土した完形の杯蓋である。口径は12.6cm, 器高は4.3cm, 口縁部高は2.2cm, 稜径は12.8cmを測る。天井部は丸みを有し, 口縁部との境をなす稜は断面三角形であるがやや短く鋭さに欠ける。口縁部は比較的高く, 内湾しながら垂直に下がる。端部は内傾する浅い凹面をなす。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整, 他は回転ナデ調整を施す。天井部内面には成形時の粘土紐巻き上げ痕が残る。色調は内外面とも灰色を呈し, 胎土には白色小礫を含む(杯蓋A - - a - 1類)。

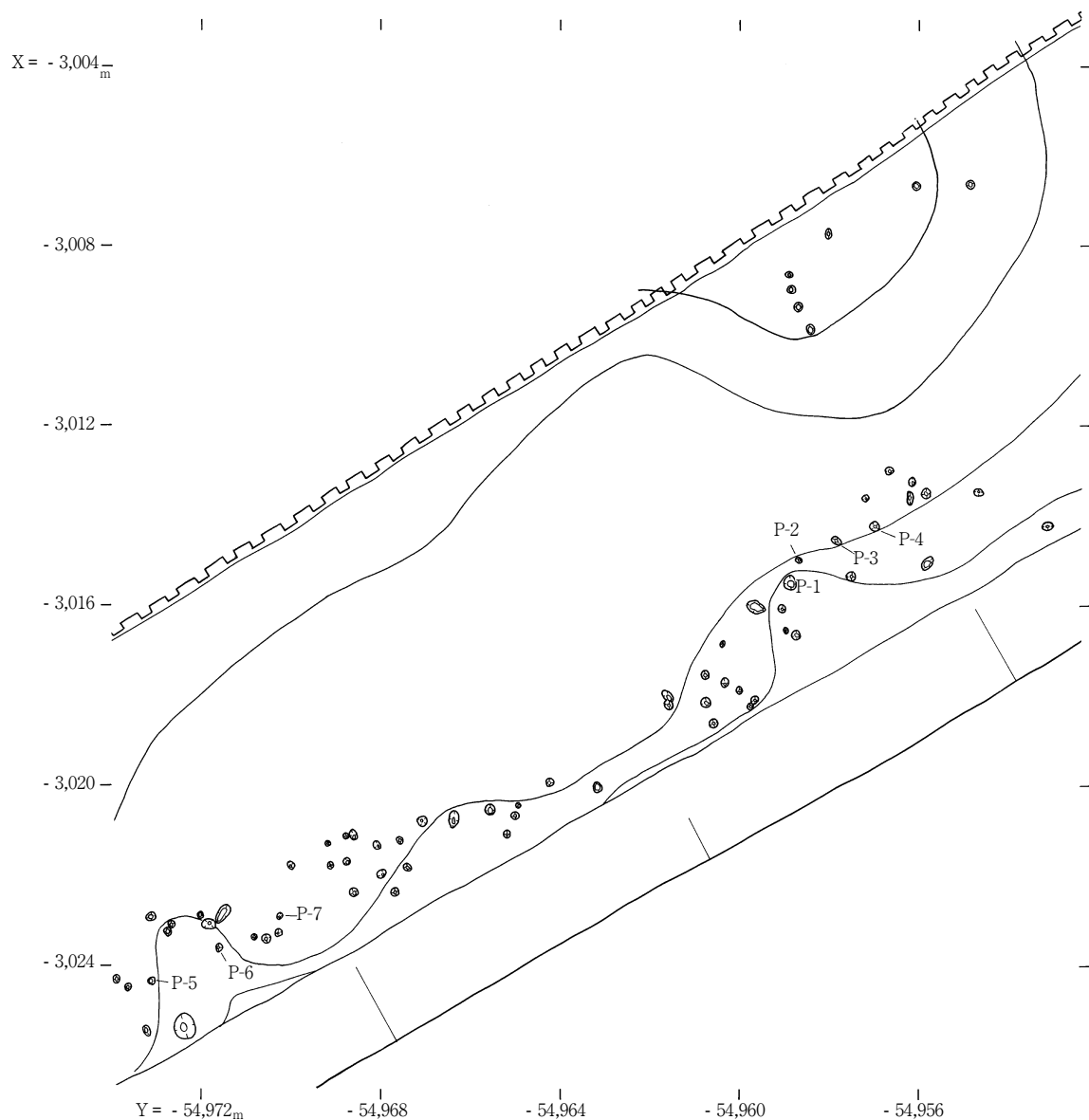
ピット

第25層上面で70個のピットが検出された。遺物はP - 1から出土した土師器細片1点のみであった。埋土は第24層の土壌で, 同じ灰色粘土である。このため, SF - 4 ~ 7と同時期のものであると考えられる。ピット群は調査区南壁側と北壁側とに大別される。南壁側のピットは標高2.600 ~ 2.900mに位置し, 南壁に沿って東西約20m, 南北約3mの範囲に分布しているが, 分布範囲は南の調査区外に広がる可能性もある。北壁側のピットは標高2.400 ~ 2.600mに位置し, 南北約3m, 東西約5mの範囲に分布し, 「く」の字形に近い形に並んでいる。調査区北壁に接して分布しているため, 分布範囲は北の調査区外に広がる可能性がある。

ピットの平面形は径20cm前後の円形のもので大部分であるが, 長径が30 ~ 50cmを測る楕円形

のもの、短径40cm・長径60cmを測るもの(P - 5)もある。深さは10cm前後と浅いものが6割以上を占める。検出レベルが調査区南壁断面で確認できるピットの上端とほぼ同じであることから、実際の深さも同程度であったものと考えられる。

複数のピットがほぼ等間隔に並ぶものでは、約1m間隔で3つ並ぶもの(P - 2 ~ 4)や約1.6m間隔で3つ並ぶもの(P - 4 ~ 7)などがある。また、等間隔ではないが4つ以上並ぶものも認められたが、いずれも柵列や建物を構成すると判断できるものはなかった。しかし、今回の調査区の周辺にこれらのピットと共に柵列や建物柱跡を構成する遺構が存在する可能性も考えられる。



第36図 ピット平面図

第 章 考 察

今回の調査では弥生時代、古墳時代の遺構、遺物が検出された。以下、両時代について順に記すこととする。

1. 弥生時代について

弥生時代の遺物は第25層と第34層から出土した。第34層からは弥生時代中期のものと思われる壺の口縁部が出土したが1片のみであった。第25層からは3カ所の祭祀関連遺構が検出されたが、ここでは出土遺物等について考察することとする。

(1) SF - 1 ~ 3の遺物

高知県西部の弥生時代後期の土器編年は確立されていないが、この時期の県西部の土器は中央部の土器の影響でタタキ目を残すものが多くみられる。このため、それ以外の土器の特徴も中央部の影響を受けている可能性があり、県中央部の土器編年を参考にして、同時期の周辺遺跡と比較しながら土器の時期的な位置付けを試みたい。

高知県中央部の弥生時代後期の土器は 期に区分されており、甕は後期 期の途中からタタキ目を残す技法が一般化し始める。最初は一部がハケ目調整によって消されるが、後期 期になるとタタキ目が顕著に残るものが大部分を占めるようになる。底部は平底のものが次第に底面が狭くなり、尖底状のものに移り変わって行く。後期 期の終わりには丸底のものもみられるようになる。また、県西部の地域色とみられる緩やかに「く」の字形に外反するやや間延びした口縁部を特徴とする甕は今回の発掘調査では該当すると考えられるものはみられなかった。鉢は後期 期の終わり頃から小型のものが顕在化する。同時期の県西部の土器も同様の傾向を持つものがみられる⁽¹⁾。

SF - 1 ~ 3の遺物の器形構成はいずれも甕、鉢が中心である。まず、甕の調整についてみると、祭祀関連遺構の遺物は3カ所ともb・c類が中心でほぼ同割合で出土している。SF - 2・3はそれぞれa類が1点ずつ出土している。県中央部の土器では後期 期の後半から後期 期前半の特徴に相当すると考えられる。底部の形態はすべて 類である。県中央部の土器では後期 期の特徴に相当すると考えられる。鉢の調整はa類がほとんどであるが、SF - 2はb類のものを2点出土している。底部の形態はSF - 1はすべてA類、SF - 2はA ~ C類ともほぼ同数出土している。SF - 3はA・C類は1点ずつ出土している。その他、SF - 1では県中央部では後期 期の後半から現れる二重口縁の壺(24)が出土している。出土したレベルはタタキ目の残る土器とほぼ同じである。SF - 2では外面をナデ調整した灰白色の鉢が2点(48,49)出土している。2点の土器はほぼ同地点、同レベルから出土している。また、タタキ目の残る土器ともほぼ同じレベルから出土している。なお、SF - 1 ~ 3が検出された第25層からは口縁部タタキ出しの甕1点(15)が出土しているが、この特徴の甕は県中央部では後期 期後半以降に一般化する。以下、東は幡多郡大方町から西は愛媛県東宇和郡宇和町までの範囲の遺跡を挙げ、形態などから同時代、または近い時代のものと考えられ

る遺物と比較検討したい。

具同中山遺跡群（昭和61年度発掘調査分）

SX3～5の出土遺物について記す。SX3の甕の調整はa～c類が同割合で、底部の形態については類の中に類が1個体加わる。鉢の調整はa類のみで、底部の形態はA・C類が1個体ずつ出土している。SX4の甕の調整はb類が2個体、c類が1個体で、底部の形態はすべて類である。底部の形態は不明であった。SX5の甕の調整はすべてc類である。底部の形態はすべて類である。鉢の調整はa類のみで、底部の形態はB類が3個体、C類が2個体である⁽²⁾。

具同中山遺跡群（平成元～2年度発掘調査分）

SF18の出土遺物について記す。甕の調整はc類が最も多くb類がそれに次ぐ。a類は1個体で、他にナデ調整によるものとタタキ目の一部をヘラナデ調整で消しているものがそれぞれ1個体である。底部は類が主であるが、類も1個体ある。鉢の調整はa類が中心だが、ハケ目調整のものやタタキ目の一部をハケ目調整で消したものも含まれる。底部の形態はB類が中心であるが、A・C類も含まれる⁽³⁾。

具同中山遺跡群（平成6年度発掘調査分）

第区第～層の出土遺物について記す。以下の土器は調査区周辺で比較的まとまって出土した。甕の調整はa類がほとんどで、ナデ調整のものがこれに次ぐ。c類も1個体含まれる。底部は類が多く、類がこれに次ぐ。鉢は良好な資料がなかった⁽⁴⁾。

船戸遺跡

SX1の出土遺物について記す。甕の調整はc類が最も多く、a類が1個体のみ含まれる。底部の形態は類が主であるが、類も1個体のみ含まれる。鉢は1個体のみで調整はb類、底部の形態はA類である⁽⁵⁾。

早咲遺跡

ST - 4・6・8, SX - 8の出土遺物について記す。ST - 4の甕はナデ調整が主で、c類がこれに次ぎ、a類が続く。底部は類が最も多く、類・類は1個体ずつである。鉢はb類が多く、a類は2個体で、ハケ目調整によるものは1個体である。底部はC類が多く、A類は2個体である。ST - 6の甕の調整はほとんどがc類で、b類は1個体含まれる。底部はすべて欠損している。鉢は出土していない。ST - 8の甕の調整はc類が主でナデ調整がこれに次ぐ。b類が1個体含まれる。底部が残存しているものはすべて類である。鉢の調整はすべてa類で、底部はほとんどがA類で、C類を1個体含む。SX - 8の甕の調整はc類が主で、a・b類は2個体ずつである。底部の形態は類が多く、類・類が1個体ずつである。鉢の調整はb類が多く、a類はこれに次ぐ。ヘラによる調整を施したものが1個体である。底部の調整はC類がほとんどであり、A類は1個体のみである⁽⁶⁾。

西谷遺跡

1区層, 2区層の出土遺物について記す。1区層の甕の調整はc類も多いが、ナデ調整のものが最も多い。その他、a類やヘラのみまたはハケとヘラによる調整のものが若干含まれる。底部が残るものは1個体のみで形態は類である。鉢はハケ調整によるものとヘラによる調整が施

されるものが1個体ずつである。ともに底部は欠損しており形態は不明である。2区 層の甕の調整はc類が最も多く、ナデ調整のみのものがそれに次ぐ。ハケとヘラによる調整のものが1個体含まれる。鉢は1個体のみで調整はb類、底部は欠損しており形態は不明である⁷⁾。

芳奈遺跡，芳奈向山遺跡

芳奈遺跡では芳奈 式，芳奈向山遺跡では芳奈 式の土器が出土している。芳奈遺跡の芳奈 式土器は第12層中心に出土している。甕の調整はa類が多く、ナデ調整によるものがこれに次ぐ。底部の形態は 類である。鉢は調整はすべてハケ調整によるもので底部の形態はA類である。芳奈 式土器は第10層を中心に出土している。甕の調整はa類が多く、ナデ調整によるものがこれに次ぐ。c類も1個体みられる。底部の形態は 類である。 式に比べて底部が小さい。鉢はb類が主で、ハケ調整によるものがこれに次ぎ、a類も1個体みられる。底部の形態はA類である。芳奈向山遺跡の芳奈 式土器はピットから出土している。甕の調整はほとんどがナデ調整で、一部a類がみられる。c類も1個体みられる。底部の形態は 類がほとんどだが、若干 類が加わる。鉢は2個体の出土で調整はナデ調整による。底部は欠損している⁸⁾。

上井遺跡

SD6・7の出土遺物について記す。SD6の甕の調整はa・c類がほぼ同数で、b類は1個体のみである。底部の形態は ~ 類ともほぼ同数である。鉢の調整はa類とヘラ削りによる調整がほぼ同数である。底部の形態はC類がほとんどでA類が1個体みられる。SD6からは須恵器も出土している。SD7の甕の調整はa類のものが多く、c類はこれに次ぐ。底部の形態は 類が多く、一部 類も混じる。鉢はハケによる調整が多く、b類がこれに次ぐ。底部の形態はA類が多く、C類がこれに次ぐ⁹⁾。

岩木赤坂遺跡

この遺跡の遺物は弥生時代前期から古墳時代初期のものが層の上下関係なく一種の攪乱層のように出土している。型式学的に弥生終末から古墳初期のものと考えられる遺物をみると、甕の調整はa類が多く、c類がこれに次ぐ。底部の形態は 類がほとんどである。鉢は良好な資料が少なかった¹⁰⁾。

以上、周辺地域の遺物と今回の発掘調査で出土したSF - 1 ~ 3の甕、鉢と比較検討したい。SF - 1 ~ 3の甕は調整がb・c類が同割合であるが、調整の割合に近いものは具同中山遺跡群（昭和61年度発掘調査分）のSX4出土遺物で、底部の形態も 類で占められているところから近い時期のものである可能性が強いと考えられる。

具同中山遺跡群（昭和61年度発掘調査分）のSX3の甕は底部の形態は同じであるが、a類の調整の割合が多いことから先行する時期である可能性がある。上井遺跡のSD7の甕の調整はa類が多く、底部の形態に 類が混じることからさらに先行する時期である可能性がある。岩木赤坂遺跡の遺物は資料の性格上時代の考察は難しいが、弥生時代終末から古墳時代初期のものとして紹介された土器は、甕の調整でa類が多く、底部の形態でA類が多いことから、上井遺跡SD7の遺物よりも先行する時期であると考えられる。芳奈遺跡の遺物や具同中山遺跡群（平成6年度発掘調査分）

の区～層の遺物は、甕の調整をみるとa類が占める割合が特に大きく、底部の形態も類が多いことから、上井遺跡SD7や岩木赤坂遺跡の遺物よりも先行する時期であると考えられる。

具同中山遺跡群（昭和61年度発掘調査分）のSX5や船戸遺跡のSX1，早咲遺跡のST - 6・8の甕は底部の形態はほぼ同じであるが、c類の調整がほとんどを占めるところからやや後出する時期である可能性が強いと考えられる。西谷遺跡の1区層と2区層の甕の調整はc類やナデによる調整が主でヘラを用いた調整もみられる。底部の形態は類が多いことからさらに後出する時期のものであると考えられる。早咲遺跡のST - 4，SX - 8の甕も調整がc類の割合や、底部の形態に類がみられることから、同様に具同中山遺跡群（昭和61年度発掘調査分）のSX5や船戸遺跡のSX1，早咲遺跡のST - 6・8に後出すると考えられる。

（2）SF - 1～3の性格と立地

SF - 1～3は主に甕，鉢によって構成されており，煤が付着したものが多い。祭祀遺物は含まれていないが，自然堤防の斜面に投げ込まれたような形で出土し，同じような形態のものが地域を異にして広くみられることから祭祀行為の痕跡と考えられる。SF - 2は土器集中の中央部に石が配置されているが，遺構が検出された地層が粘土層であり，石の法量からは自然堆積による混入とは考え難く，何らかの意図をもって置かれたものと考えられる。なお，遺構が検出された場所は緩やかな斜面となっており，自然堤防の河川側の斜面ではなく後背湿地側の斜面であると考えられる。

2. 古墳時代について

古墳時代の遺物は第24層から出土した。調査区では70個のピットと4ヵ所の祭祀関連遺構が検出されたが，ここで出土した遺物等について考察することとする。

（1）SF - 4～7の遺物

4ヵ所の祭祀関連遺構は土師器の壺，甕，高杯，椀や須恵器の蓋杯によって構成されている。SF - 5からは須恵器が出土していないなど土器組成に違いはみられるものの第24層中から検出されているところからほぼ同時期のものと考えられる。ここでは編年が確立されている須恵器『後川・中筋川埋蔵文化財発掘報告書 古津賀遺跡・具同中山遺跡群』の編年（以下後川・中筋川 編年と呼ぶこととする。）について検討したい。⁽¹¹⁾

まず，杯蓋はSF - 4から66，67，SF - 6から107，SF - 7から123が出土している。67・107・123は口縁部高が比較的高く，天井部は平らか丸味を有するものであるところから後川・中筋川編年では～期に該当する。66は口縁部高が低い，丸味を帯びた天井部の形態から～期に該当するものと考えられる。

杯身はSF - 4から68～73，SF - 6は108～110が出土している。72・108は立ち上がり高が他のものに比べ低いが，全体的な形状から後川・中筋川編年では～期に該当すると考えられる。68～70，73，109，110は，立ち上がり高が他のものに比べ低く小型化していることなどから後川・中筋川編年では～期に該当すると考えられる。

以上のように祭祀関連遺構出土の須恵器の蓋杯は，後川・中筋川編年では～期，陶邑編

年では 型式4～5段階, 5世紀末～6世紀初頭にかけてのものと判断される。

(2) SF - 4～7の性格と立地について

SF - 4～7は土師器と須恵器(壺, 甗, 高杯, 蓋杯等), SF - 5は土師器のみによって構成されており, いずれも日常的な什器であり, 祭祀関連遺構の分類では 類¹²⁾に該当するものと考えられる。これら遺構が検出された場所はやはり自然堤防上から後背湿地にかけての斜面部であると考えられる。

3. まとめ

本調査区は自然堤防と後背湿地の境目に当たり, 現在でも両地形の間には石垣による段があり, 字境ともなっている。『長宗我部地検帳』が作成された時も様相はほぼ同じだったとみられ, 自然堤防部分は畠として, 後背湿地の部分は水田として利用されていたものと考えられる。調査区のセクションで遺物包含層をみても, やはり自然堤防から後背湿地に向かって緩やかに傾斜している。今回の発掘調査で検出した祭祀関連遺構は弥生時代後期, 県中央の土器編年では後期 期に該当する時期と古墳時代, 中でも5世紀末～6世紀初頭の時期の2時期のもので, 弥生時代の祭祀関連遺構は標高2.400～2.700m, 古墳時代の祭祀関連遺構は標高2.800～3.300mに位置し, 古墳時代の祭祀関連遺構がやや自然堤防の高い位置に立地する。両時代の祭祀関連遺構とも自然堤防と後背湿地の境の傾斜地に所在し自然堤防の中でも高い場所は逆に遺物の出土も少なく, 明らかに自然堤防の斜面を意識した祭祀関連遺構であると考えられる。今までの具同中山遺跡群調査でもほぼ同様なことが言える。また, 今後調査報告される具同中山遺跡群の他の祭祀関連遺構との比較によってさらに遺構の性格並びに分布が明らかにされるものと期待される。

註

- (1) 出原恵三 「土佐」『古代学協会四国支部第10回大会発表資料 弥生後期の瀬戸内海』 古代学協会四国支部 1996
- (2) 出原恵三・廣田佳久・松田直則・山本哲也 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 古津賀遺跡 具同中山遺跡群』 高知県教育委員会 1988
- (3) 前田光雄・松田直則・廣田佳久・江戸秀輝 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群 第一分冊』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
- (4) 松田直則・伊藤 強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜 『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 具同中山遺跡群』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- (5) 出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・武吉眞裕・竹村三菜 『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 船戸遺跡』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- (6) 廣田佳久 『早崎遺跡』 高知県大方町教育委員会 1991
- (7) 出原恵三・曾我貴行 『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 第一分冊 西ノ谷遺跡』 高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993
- (8) 岡本健児・木村剛朗 『芳奈遺跡・芳奈向山遺跡』 宿毛市教育委員会 1978

- (9) 中野良一・近藤洋司・岡本千佳子 『上井遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 1999
- (10) 下條信行・村上恭通他 『岩木赤坂遺跡』 愛媛大学法文学部考古学研究室 1999
- (11) 廣田佳久「須恵器」 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 古津賀遺跡 具同中山遺跡群』 高知県教育委員会 1988
- (12) 出原恵三 「祭祀発展の諸段階 - 古墳時代における水辺の祭祀 - 」 『考古学研究 第36巻第4号』 1990

第 章 自然科学分析(土壌分析)報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

具同中山遺跡群は、四万十川の支流である中筋川流域に位置する。これまでの発掘調査により、縄文時代晩期以降の遺物・遺構が確認されている。特に低地部では、畦畔状の遺構が認められたことから生産域として利用されていたと推定されている。また、微高地にあたる場所では、5世紀後半～8世紀にかけての河川に関連する祭祀遺跡として注目されている。今回の発掘調査区は、微高地から低地へ落ち込み始める部分に位置する。

今回の自然科学分析調査では、当時の低地の土地利用状況や周辺の高環境に関する情報を得る目的で、低地部の堆積物について珪藻分析・植物珪酸体分析・腐植分析を実施する。

1. 層序と試料

調査区内部の層序は、1層～47層に分層されている。各層の層相は、47層～43層が褐灰色粘土、42層・41層が黒褐色粘土、36層・35層が褐灰色粘土、34層～31層が灰黄褐色～明オリーブ灰色を呈する粘土、30層～16層が灰色粘土、15層がにぶい黄橙色砂混じりシルト質粘土、14層・13層が緑灰色粘土、12層が灰色粘土、11層～3層が灰色～褐灰色を呈するシルト質粘土、1層が灰黄褐色シルト質粘土である。なお、25層で弥生時代末期の遺物が、24層が古墳時代中期の遺物が検出されており、また1層が現表土である。

試料は、C地点24層から1点(試料番号1)、A地点25層から1点(試料番号2)、D地点31層・33層・35層・41層・43層・44層・45層・47層から各層1点(試料番号3～10)、合計10点が採取された(図1)。これら10点の土壌試料を分割して、珪藻分析・植物珪酸体分析・腐植分析を実施する。

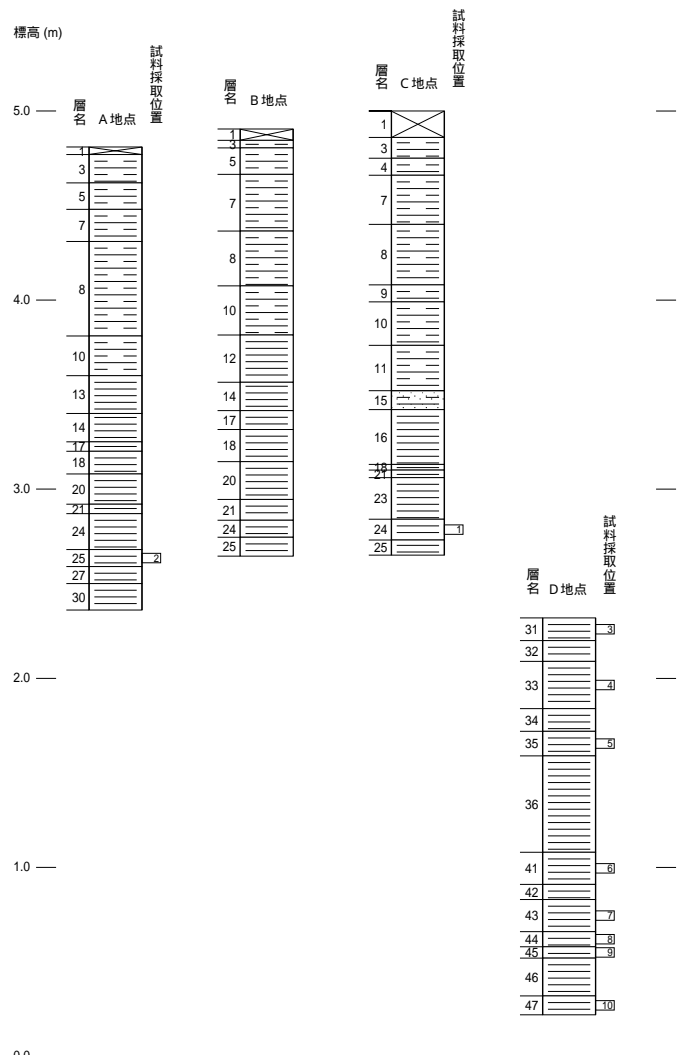


図1 各地点の模式柱状図および分析層位
凡例 砂 シルト 粘土

2. 分析方法

(1)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査して、珪藻殻が半分以上残存するものを200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer(1992)、K.Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮する。堆積環境の解析にあたり海水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性についてはAsai,K. & Watanabe,T.(1995)、生活型などについてはVOS,P.C. & DE WOLF,H.(1993)の環境指標種を参考とする。

(2)植物珪酸体分析

試料を湿重約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250KHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(3)腐植分析

全炭素(腐植含量)はチューリン法(土壤標準分析・測定法委員会,1986)、腐植組成は熊田法(熊田,1981;立川,1966)でそれぞれ実施した。以下に分析行程を記す。

<全炭素量(腐植含量)>

微粉碎試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル

酸液を指示薬に0.2 N 硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量(T-C 乾土%)を求める。この全炭素量に1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

<腐植組成>

炭素100mg以下を含む微粉碎試料を50 ml容三角フラスコに秤り取り,0.1 N水酸化ナトリウム+0.1 Mピロリン酸ナトリウム(1:1v/v)抽出液を30 ml加え,沸騰水浴中で30分間加熱抽出する。加熱終了後,飽和硫酸ナトリウム溶液を2 ml加え,遠心分離し,透明な腐植抽出液を得る。残渣土壌は3%硫酸ナトリウムを含む抽出液20 mlを用いて,遠心分離によって2回洗浄する。抽出液と洗液をあわせて蒸留水を加えて100 mlとする。この腐植抽出液の一定量を遠沈管に分取し,抽出液100 mlに対し,濃硫酸1 mlを加える。上澄液(フルボ酸)を遠心分離し,容器に保存する。沈殿(腐植酸)は0.01 N水酸化ナトリウムに溶解して定容とし,溶解後,2時間以内に分光光度計を用いて波長220~700nmの吸光度を測定する。腐植酸とフルボ酸については立川(1966)の硫酸希釈熱法により炭素を測定し,腐植酸量,フルボ酸量を算出する。この測定結果から,腐植抽出割合(%),沈殿部割合(%),log K,RFを以下の方法で求める。

$$\text{腐植抽出割合} = \text{抽出腐植量} / \text{全腐植量} \times 100$$

$$\text{沈殿部割合} = \text{腐植酸量} / (\text{腐植酸量} + \text{フルボ酸量}) \times 100$$

$$\log K = \log K_{400} - \log K_{600}$$

$$RF = K_{600} / \text{吸光度の測定に用いた腐植酸溶液} 30 \text{ ml 当たりの} 0.1 \text{ N 過マンガン酸カリウム消費量} (ml) \times 1000$$

3. 結果

(1)珪藻分析

結果を表1,図1に示す。珪藻化石は,試料番号6~1が検出個体数が数十個体と少ないが,試料番号7~10から産する。産出種は淡水生種を主体とするが,海水~汽水生種も僅かに産出する。試料番号7~10の完形殻の出現率は30%前後と低い。

淡水生種の生態性の特徴は試料番号7~10とも近似しており,貧塩不定性種(少量の塩分であれば耐えられる種),真+好アルカリ性種(pH7以上のアルカリ性水域に生育する種),真+好流水性種(流水域に生育する種)と流水不定性種(流水にも止水にも生育する種)が多産ないし優占する。主な産出種は4試料とも近似しており,好流水性のGomphonema cleveiが20%前後と多産し,この他に真流水性で上流性河川指標種群(安藤,1990)の一種であるGomphonema sumatrense,好流水性のCocconeis placentula var. euglypta,流水不定性のCocconeis placentulaなどを伴う。

(2)植物珪酸体分析

結果を表2,図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの,保存状態が悪く,表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。また,検出個数の少ない試料も見られる。

各層からは,タケ亜科,ヨシ属,ウシクサ族,イチゴツナギ亜科などが検出される。また,産状は

表1 珪藻分析結果(2)

種 類	生 態 系		環 境 指 標										
	塩分	pH	流水	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	流水	-	-	-	-	-	-	1	3	1	10
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	8	4	-	7	13	8	6
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	1	1	1	1	3	4	4	13
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	2	3	1	2
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	9	3	-	1	3	-	7
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	2	-	3
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia terrestris (Pct.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Orthoseira roesana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	1	1	1	-	1	-	-	2	-	-
Pinnularia acrosphaera W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Pinnularia brandelii Cleve	Ogh-hob	ac-il	unk	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia schoenfelderii Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	8	10	11	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	r-ph	-	1	-	-	-	5	6	3	3	3
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	3	2	1	1
Sellaophora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
海水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
淡水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	5	3	0
珪藻化石総数				12	16	11	47	44	32	101	161	107	126
				12	16	11	47	45	32	106	173	110	126

凡例
 H.R. : 塩分濃度に対する適応性
 Euh-Meh : 海水生種・汽水生種
 Meh : 汽水生種
 Ogh-Meh : 汽水・汽水生種
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種
 Ogh-hob : 貧塩好塩性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種
 環境指標種群
 C1 : 海水藻場指標種(小形, 1988)
 J : 上流性河川指標種
 S : 好汚濁性種
 R : 陸生珪藻(RA-A群, RB-B群, RI群, 伊藤・堀内, 1991)
 pH : 水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi : 真アルカリ性種
 al-il : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-il : 好酸性種
 unk : pH不明種
 C.R. : 流水に対する適応性
 l-bi : 真正水性種
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 r-ph : 好流水性種
 r-bi : 真流水性種
 unk : 流水不明種
 K : 中～下流性河川指標種
 J : 上流性河川指標種
 U : 広域適応性種
 M : 湖沼浮遊性種
 T : 好清水性種(以上はAsai, K. & Watanabe, T., 1986)
 O : 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1980)

試料番号10～6と試料番号5～1で大きく異なる。

試料番号10～6では不明の産出が目立ち、タケ亜科やヨシ属、ススキ属などが伴う。また、試料番号6では、チゴザサ属の割合も高い。これに対して、試料番号5～1になると、ススキ属・イチゴツナギ亜科・ヨシ属の出現率が減少して、タケ亜科の産出が顕著となる。

(3)腐植分析

<腐植含量>

土壌は、一般に無機成分と有機成分に大別され、後者の給源は動植物の遺体、根、微生物などである。したがって、地表面が安定で、植生が長く維持されると表層には多くの有機物が集積することになる。有機物は、一般に堆積物あるいは土壌の表層(地表面)へ供給されるだけであるから、埋没現象のない単元土壌では有機物量は下層になるほど漸減する。このことから、下層に有機物量が多い層が認められる場合は、過去に表層であったことが指摘される。5Y3/1とオリーブ黒色を呈す試料番号10～8が2.28～3.24%、試料番号7・6が4.37～5.30%とやや高い。これに対して、5Y4/1と灰色を呈す試料番号5～1では2.00%未満の極めて低い。

<腐植組成>

・腐植抽出割合

土壌有機物の中で可溶性腐植の抽出割合を表すもので、一般に腐植含量の高い表層土で60～80%、

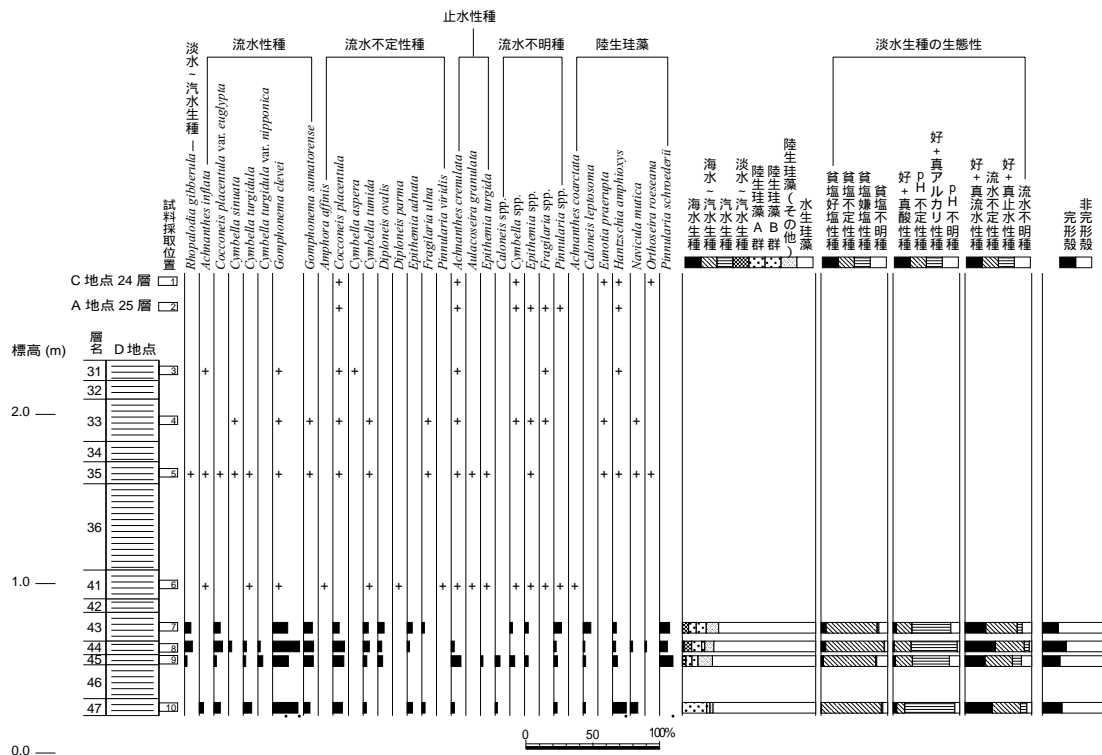


図2 主要珪藻化石群集の層位分布

海水・汽水・淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表2 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体	キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	24	-	-	-	-
	タケ亜科	311	183	229	123	136	16	20	41	18	42
	ヨシ属	-	-	-	3	1	21	44	35	26	7
	ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
	ウシクサ族ススキ属	-	2	4	9	4	13	23	46	10	23
	イチゴツナギ亜科	-	3	1	11	9	-	3	7	12	16
	不明	65	23	62	98	70	148	180	230	143	125
イネ科葉身機動細胞珪酸体	タケ亜科	89	149	84	50	89	25	15	17	14	15
	ヨシ属	-	-	-	-	-	2	5	6	6	1
	ウシクサ族	-	-	-	-	-	16	-	-	5	-
	不明	17	13	22	9	15	20	8	8	12	2
合計											
	イネ科葉部短細胞珪酸体	376	211	296	247	220	222	270	359	209	213
	イネ科葉身機動細胞珪酸体	106	162	106	59	104	63	28	31	37	18
総計		482	373	402	306	324	285	298	390	246	231

下層土や腐植含量が少ない表層土などで30～50%にとどまることが多い(大羽,1964)。今回の分析では試料が低地粘土であり,腐植含量が低いことから,腐植抽出割合は47～58%とやや低い。これら試料では可溶性腐植の割合が若干少ない傾向にあると指摘されるが,試料間での有意差は見られない。

・沈殿部割合

抽出腐植中の腐植酸部の占める割合を表すもので,水酸化ナトリウムを溶媒とした場合泥炭質あるいは黒泥質の有機質土壌

ではこの値が70～80%と極めて高く,次いで無機質土壌の表層土あるいは腐植の多い火山灰土壌(いわゆる黒ボク土)で60～70%を示す。その他は概ね50%前後の値を示す。しかし,腐植の著しく少ない土壌では30%ぐらいまで低下する。また,下層土においては一般に表層土に比べて低い値を示す(大羽,1964)。今回の分析では試料全体の特徴として腐植含量の低いにも関わらず,全体的に沈殿部割合が高い傾向にあることが挙げられる。これより,水の移動に伴ったフルボ酸の

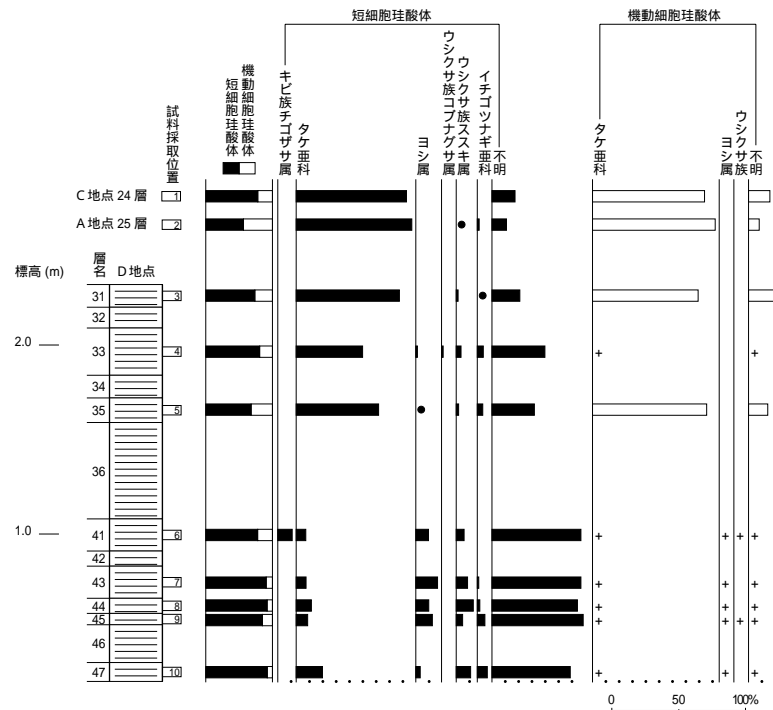


図3 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は,イネ科葉部短細胞珪酸体,イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお,は1%未満の種類,+はイネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

流出現象が引き起こされていた可能性が考えられる。また、沈殿部割合は、試料番号10～6が86～90%、試料番号5～1が70～79%で有意差が認められ、腐植酸とフルボ酸の組成比が異なることが指摘される。

・ log K

腐植酸の吸光曲線の波長軸に対する傾きを近似的に示すもので、RF同様に腐植化度を示す指標である。この値が小さいほど(吸光曲線の傾斜が緩やかなほど)腐植化度は高いものとなる。分析試料の中では、最も腐植含量の高い試料番号7において他の試料と比較して log K が大きく、腐植化度が低い。

・ RF

腐植酸の単位あたりの色の濃さを示す値で、腐植化度の程度をあらわす指標の一つである。一般にこの値が高いほど腐植化度は高く、黒ボク土の表層土あるいは埋没土で著しく高い値を示す傾向がある。また、概して下層土は表層土よりも値が低い傾向にある(大羽, 1964)。今回の分析では腐植含量の低い試料において高く、腐植含量の高い試料番号6・7において低い。

・ 腐植酸の型

熊田(1981)は、腐植酸の吸光曲線の形状や、吸光度と腐植酸の炭素量との関係から腐植酸を四つの型に区分し、土壌型との対応関係を明らかにしている。今回の結果ではB型腐植酸に区分される試料番号7を除いた試料の全てが腐植化度の最も高いA型腐植酸に分類される。

4. 考察

今回の珪藻化石と植物珪酸体の産状、さらに腐植分析の結果を総合的にみると、調査区内部では47層～44層、43層・41層、35層～24層と3回の環境変化がみられたと考えられる(図4)。47層～44層は、腐植含量が2.28～3.24%であり、5Y3/1オリーブ黒色の粘土からなる。本層準で検出される

表3 具同中山遺跡群の土壌理化学分析結果

試料番号	土性	土色	全炭素 (%)	腐植含量 (%)	腐植抽出割合 (%)	沈殿部割合 (%)	腐植組成色調係数 log K	相対色度 RF	腐植酸の型
1	重埴土	5Y4/1 灰	0.68	1.18	56	74	0.553	126	A
2	重埴土	5Y4/1 灰	0.88	1.53	52	78	0.559	109	A
3	重埴土	5Y4/1 灰	0.61	1.06	52	70	0.549	124	A
4	重埴土	5Y4/1 灰	0.80	1.38	55	79	0.532	136	A
5	重埴土	5Y4/1 灰	0.94	1.62	47	76	0.529	100	A
6	重埴土	5Y3/1 柳-ブ黒	2.53	4.37	55	88	0.539	81	A
7	重埴土	5Y3/1 柳-ブ黒	3.08	5.30	52	90	0.596	70	B
8	重埴土	5Y3/1 柳-ブ黒	1.88	3.24	53	87	0.539	98	A
9	重埴土	5Y3/1 柳-ブ黒	1.54	2.66	55	86	0.529	105	A
10	重埴土	5Y3/1 柳-ブ黒	1.32	2.28	58	86	0.520	118	A

注1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

注2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。

重埴土・・・HC(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)

注3) 腐植組成(熊田法)

腐植抽出割合(%) = 抽出腐植量 / 全腐植量 × 100

沈殿部割合(%) = 腐植酸量 / (腐植酸量 + フルボ酸量) × 100

log K = log K 400 - log K 600

RF = K 600 / 吸光度の測定に用いた腐植酸溶液30ml当たりの0.1N過マンガン酸カリウム消費量(ml) × 1001

珪藻化石に注目すると、河川などの流水域に生育する好流水性の *Gomphonema clevei* が多産し、生育場所が流水域にほぼ限定される真流水性で河川上流域の環境を指標する上流性河川指標種群(安藤, 1990)の一種の *Gomphonema sumatrense*、好流水性の *Cocconeis placentula* var. *euglypta* が多産する。このような群集組成は、流水域で堆積した河川堆積物などでみられる。一方、植物珪酸体では、種類を特定できない不明珪酸体の産出が目立ち、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属などが検出される。以上のことから、本層準が堆積した頃、付近は河川の本流からは離れていたものの流水の影響を受けており、河川周辺にヨシ属・ススキ属やそれ以外のイネ科が、また河道沿いの自然堤防上など比較的乾いた場所にタケ亜科なども生育していたと想定される。このようなイネ科植物をはじめとする草本類が腐植の供給源となっていたのであろう。

43層・41層は47層～44層と同様に5Y3/1とオリーブ黒色粘土からなるが、腐植含量が4.37～5.30%と増加する。また、本層準は、RFが他の層位と比較して低く、また腐植含量の高い43層でB型腐植酸となる。一方、43層で検出される珪藻化石は下位の層準と同様な組成を示す。植物珪酸体も下位の層準とほぼ同様であるが、41層で湿地に生育することが多いチゴザサ属が特徴的に検出されている。以上のことから、本層準は河川の氾濫によって堆積したと考えられる。ただし、周辺では次第に流水の影響が弱まって湿潤な環境となり、チゴザサ属などが生育するようになったと考えられる。このような環境条件の変化により、腐植化度の低い腐植が富化されたことによって、腐植含量が増加し、かつB型腐植酸に退化したと考えられる。

35層～24層は5Y4/1灰色を呈する粘土からなり、腐植含量は2.00%以下と著しく低くなる。珪藻化石は47層～43層とほぼ同様の種群が検出されるが、その大半が破損している。これらの結果は、35～24層が短期間に堆積したことを示唆している。すなわち堆積速度が速くなったため、珪藻化石がほとんど取り込まれなかった。また、植生に覆われる期間も短く腐植が集積しなかったとみられる。このように35層～24層の時期の調査区は河川の氾濫の影響をしばしば受けていたことが考え

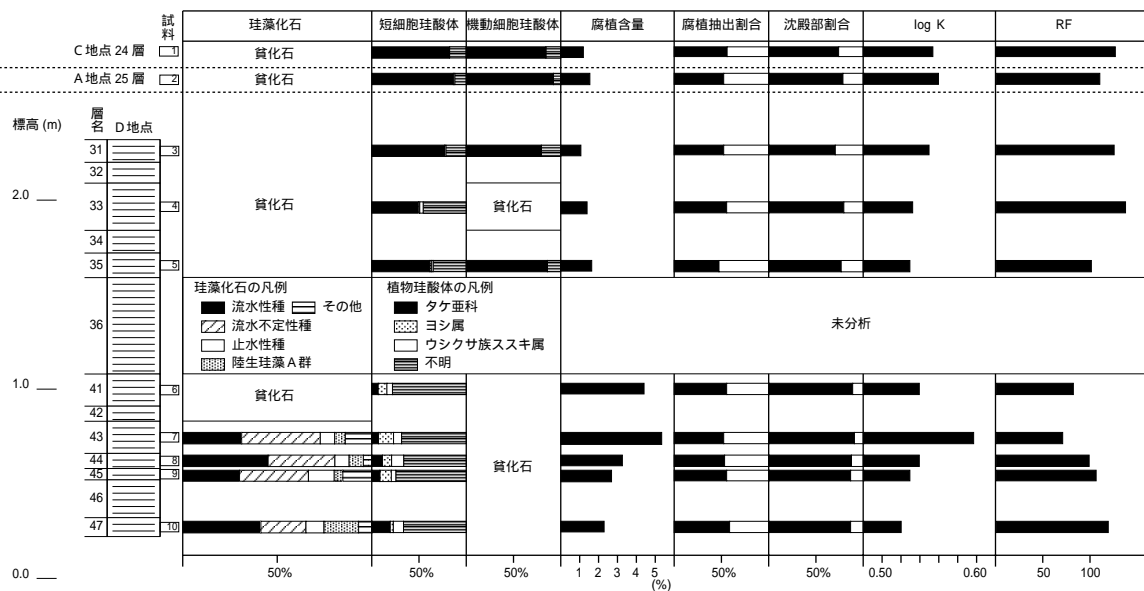


図4 自然科学分析結果の概要

られる。また、これらの層準では植物珪酸体組成でタケ亜科が卓越するようになる。タケ亜科の植物珪酸体は風化に強く、また個体あたりの生産量が多い(近藤・佐瀬,1986:杉山・藤原,1986)ことから、実際の植生量より過大に評価される場合が多い。ここでのタケ亜科植物珪酸体は、氾濫時に堆積物とともに運搬堆積したものとみられる。したがって、群集組成が反映しているイネ科植物相は集水域周辺の比較的広範囲を設定しておく必要がある。

本遺跡では弥生時代後期～古墳時代に稲作が行われていた可能性が考えられている。今回の調査区や先に行った区でも栽培種のイネ属に由来する珪酸体が検出されなかった。これは、今回の調査結果をみる限り河川活動の影響を頻繁に受ける場所であったことや、調査区で土地利用が耕作ではなく、別の目的で利用されていた可能性がある。この点については、今後堆積学的な見地からの検討を行い再評価したいと考える。また、辻(1988)は縄文時代中期以降に2回の浅谷の形成とその埋積が起こり、これが縄文海進後の海水準の変動と気候要因の変化と関連があるとしている。このようなユースタティックな環境変化に伴う地形の変化については現段階では十分な情報が蓄積されておらず、遺跡の立地環境を論じる上で重要であり、今後の検討課題としたい。

引用文献

- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42, p.73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986)土壤標準分析・測定法,354p.,博友社.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,p.23-45.
- 近藤錬三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,p.31-64.
- 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,p.1-20.
- Krammer,K.(1992)PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353, BERLIN·STUTTGART.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1986)Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae.Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1988)Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1991a)Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,230p.,Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1991b)Bacillariophyceae,Teil 4,Achnantheaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,248p., Gustav Fischer Verlag.
- 熊田恭一(1981)土壤有機物の化学第2版,304p.,学会出版センター.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
- 大羽 裕(1964)土壤腐植研究法,弘法・大羽法.ペドロジスト,8,p.108-116.

ペドロジスト懇談会編(1984)土壤調査ハンドブック,156p.,博友社.

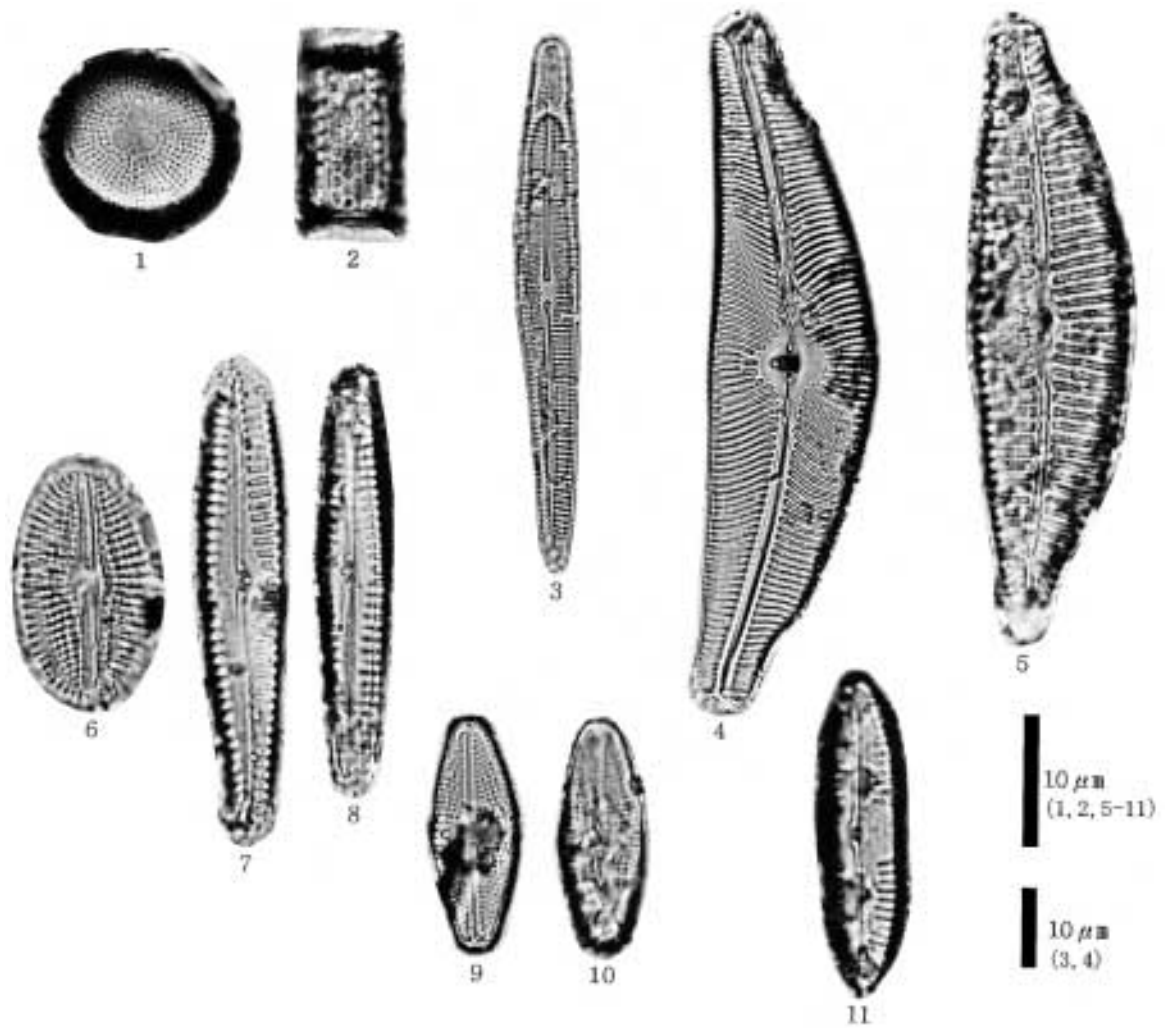
杉山真二・藤原宏志 1986 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として - .
考古学と自然科学,19,p.69-84.

立川 涼(1966)土壤および液体試料中の有機物の迅速定量法ならびに糖類に関する二,三の定量法.日本土壤
肥科学雑誌,37,1,p.28-33.

辻 誠一郎(1988)縄文と弥生 自然環境.「季刊考古学」,23,p.35-38,雄山閣.

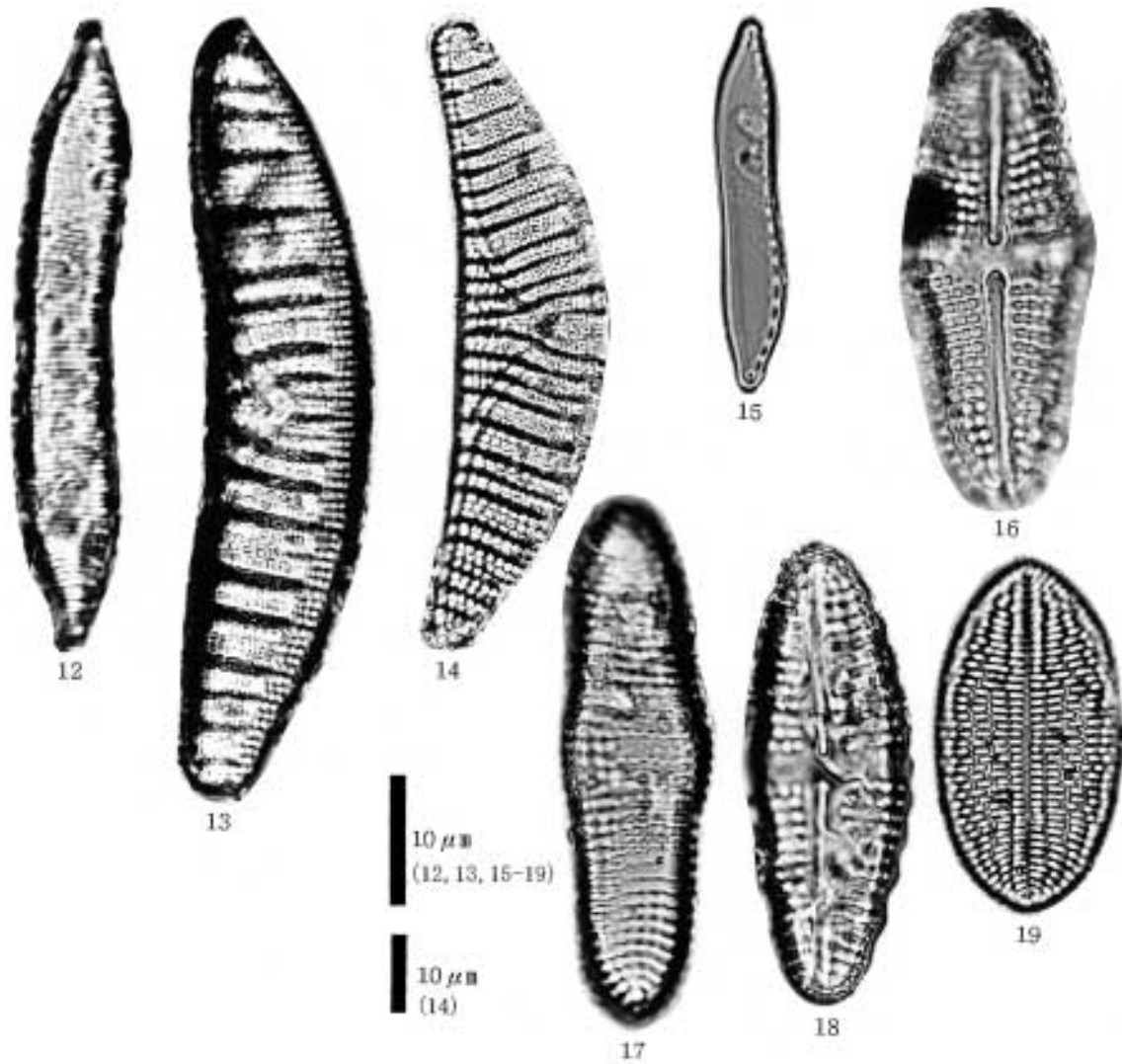
Vos,P.C. and H.de Wolf(1993)Reconstruction of sedimentary environments in Holocene costal deposits of the
southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research.
Twelfth International Diatom Symposium,p.297-296.

図版1 珪藻化石(1)



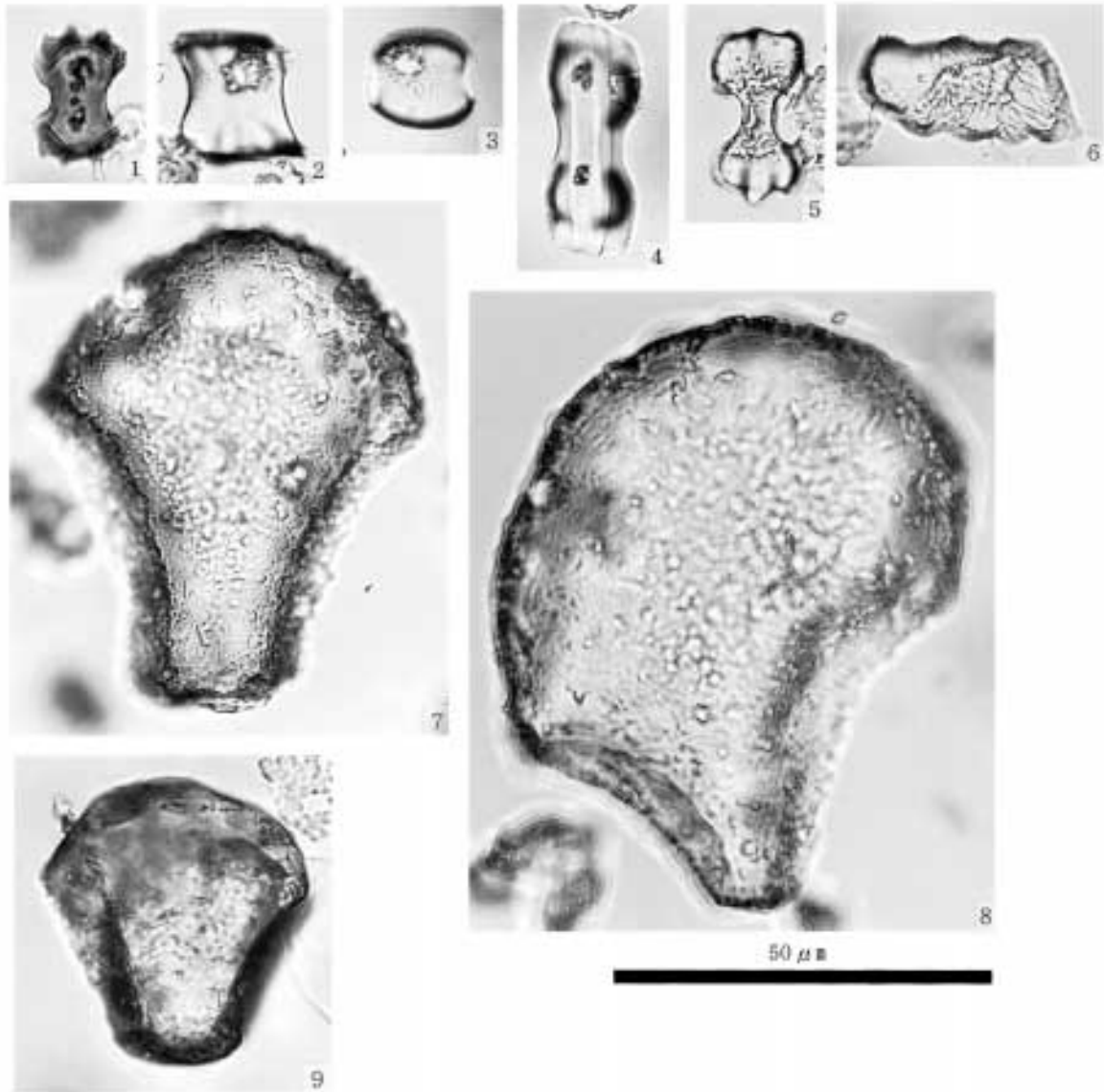
1. *Orthoseira rooseana* (Rabh.) O' Meara (試料番号1)
2. *Aulacoseira granulata* (Ehr.) Simonsen (試料番号5)
3. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.) Lange-B. (試料番号7)
4. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck (試料番号8)
5. *Cymbella turgidula* Grunow (試料番号10)
6. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (試料番号7)
7. *Gomphonema sumatrense* Fricke (試料番号7)
8. *Gomphonema clevei* Fricke (試料番号5)
9. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号10)
10. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号4)
11. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (試料番号8)

図版2 珪藻化石(2)



- 12. *Ilantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (試料番号5)
- 13. *Epithemia adnata* (Kuetz.)Brebisson (試料番号10)
- 14. *Epithemia turgida* (Ehr.)Kuetzing (試料番号7)
- 15. *Nitzschia brevissima* Grunow (試料番号8)
- 16. *Achnanthes inflata* (Kuetz.)Grunow (試料番号5)
- 17. *Achnanthes inflata* (Kuetz.)Grunow (試料番号3)
- 18. *Achnanthes crenulata* Grunow (試料番号1)
- 19. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.)Cleve (試料番号10)

図版3 植物珪酸体



- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1. チゴザサ属短細胞珪酸体 (試料番号6) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号7) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号4) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号8) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号10) |
| 7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号2) | 8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料番号6) |
| 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号6) | |

圖 版



調査前全景(東より)



調査前全景(西より)

PL.2



区完掘状態(西より)



区完掘状態(東より)



区第24層遺物出土状態(西より)



区完掘状態(西より)

PL.4



南壁セクション1(北より)



南壁セクション2(北より)



Aトレンチセクション(東より)



Dトレンチセクション(東より)

PL.6



SF - 1遺物出土状態1(南より)



SF - 1遺物出土状態2(東より)



SF - 2遺物出土状態1(北より)



SF - 2遺物出土状態2(東より)

PL.8



SF - 3遺物出土状態1(西より)



SF - 3遺物出土状態2(西より)



SF - 4遺物出土状態1(西より)



SF - 4遺物出土状態2(西より)

PL.10



SF - 5遺物出土状態1(南より)



SF - 5遺物出土状態2(南より)

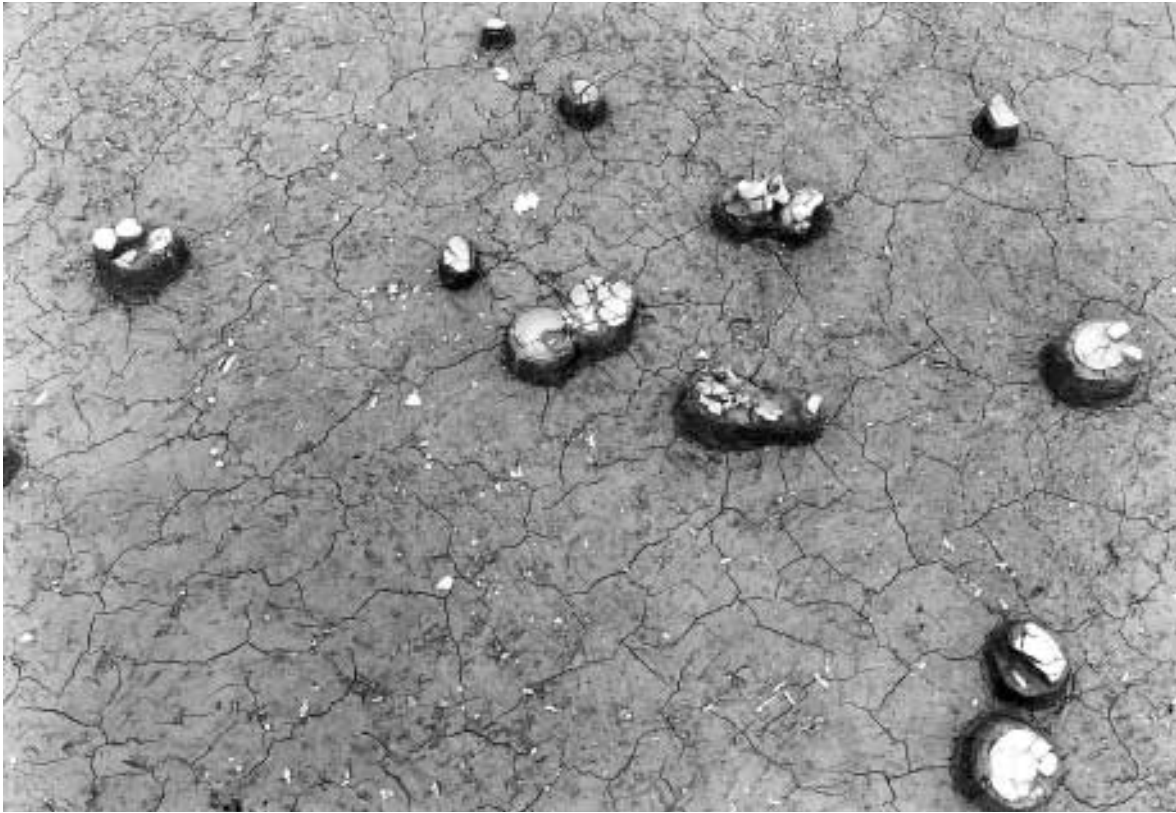


SF - 6遺物出土状態1(西より)



SF - 6遺物出土状態2(西より)

PL.12



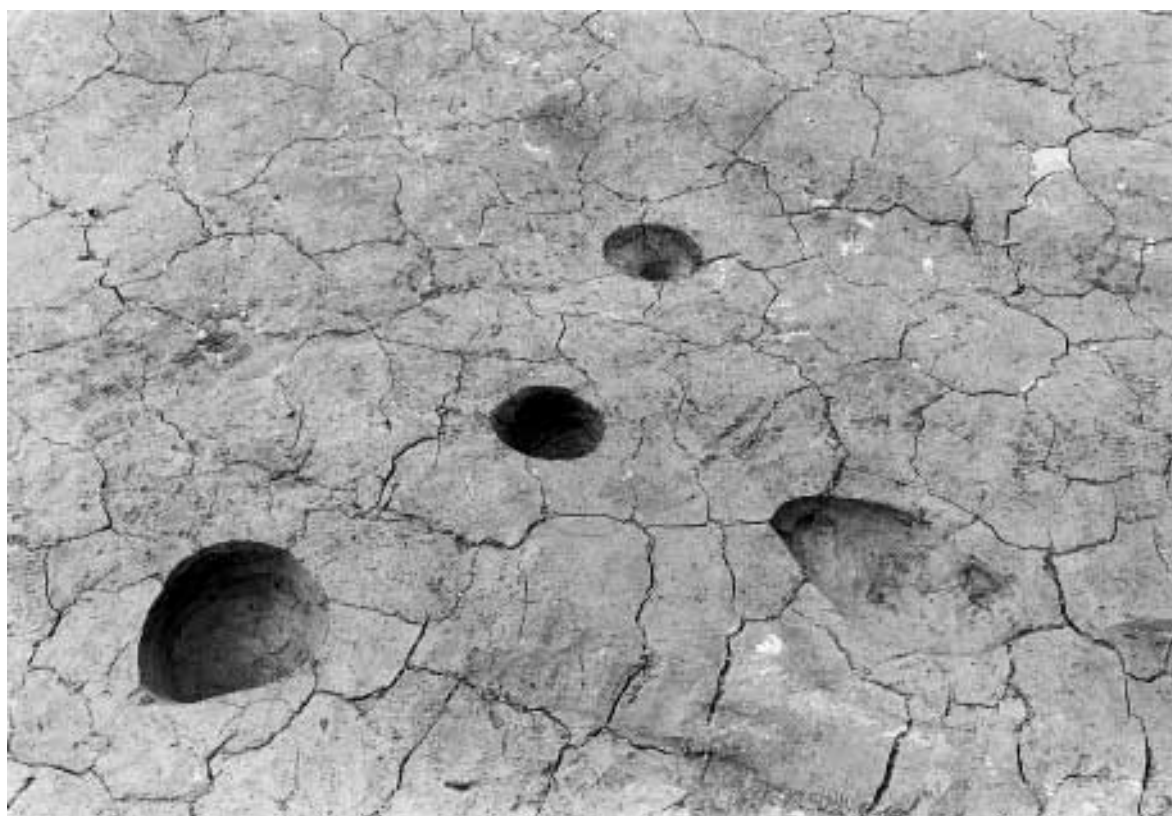
SF - 7遺物出土状態1(西より)



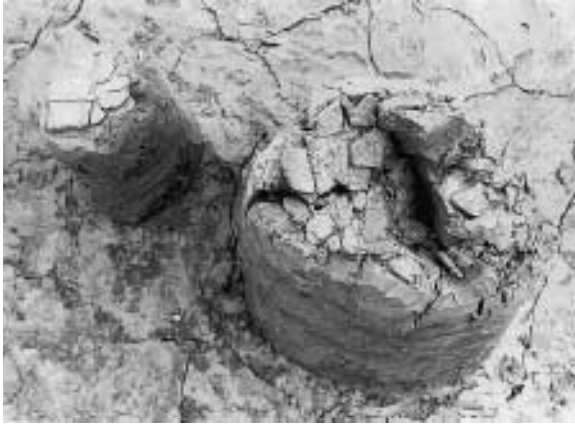
SF - 7遺物出土状態2(東より)



ピット完掘状態1(南より)



ピット完掘状態2(北より)



第24層遺物出土狀態(2)



第24層遺物出土狀態(4,5)



第24層遺物出土狀態(9)



第24層遺物出土狀態(12)



第24層遺物出土狀態(13)



第24層遺物出土狀態(14)



第25層遺物出土狀態(15)



第25層遺物出土狀態(22)



14

須恵器(甕)



3



4



5

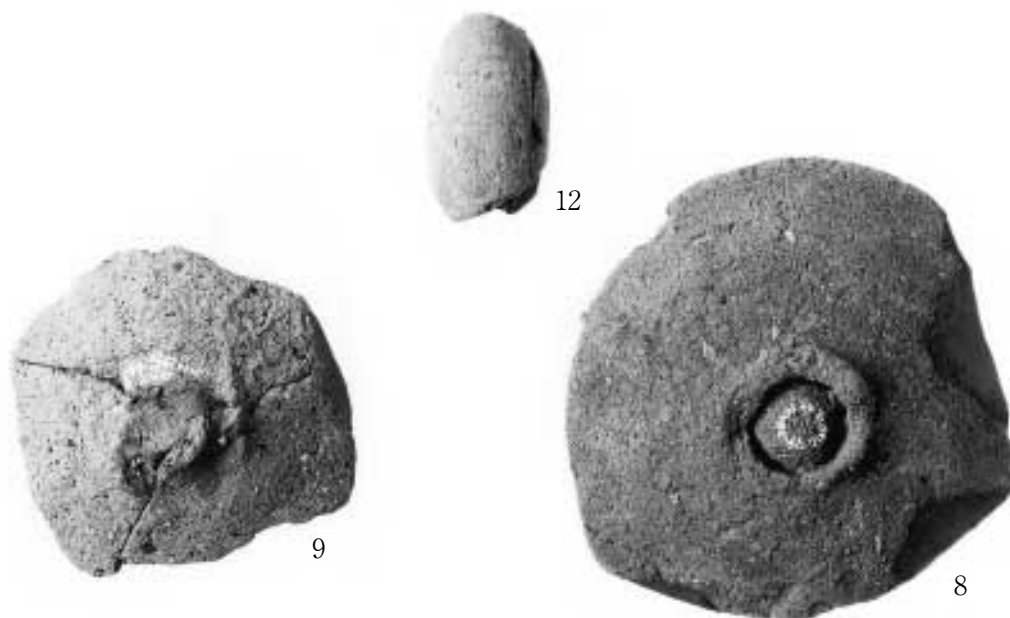


6

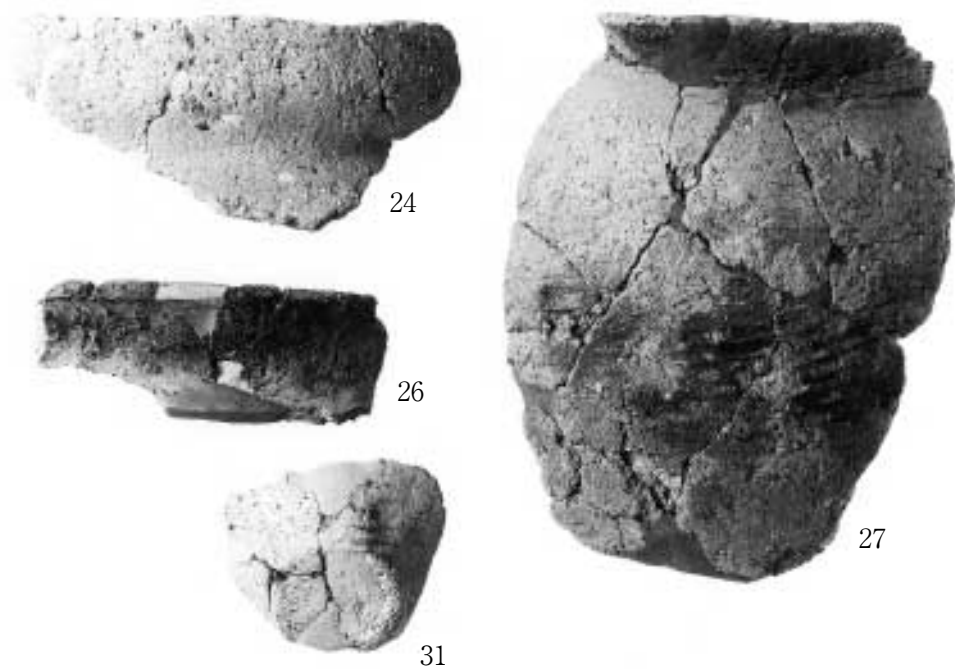


7

土師器(甕,高杯)



土師器(器台),土製品(土錘)



弥生土器(壺,甕,鉢)



33



38



34

弥生土器(甕)



39



41

弥生土器(甕)



42



43

弥生土器(甕)



51



52



55

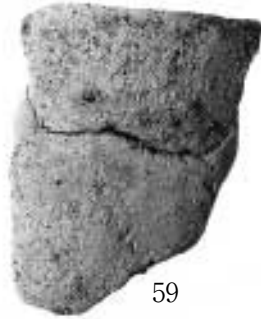


57

弥生土器(甕,鉢)



58



59



60



61



71

土師器(甕,高杯,器台),須恵器(杯身)



82



85



84

土師器(甕)



91



93



95



96

土師器(碗)



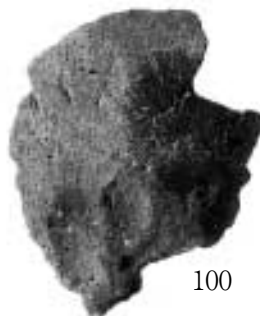
97



99



98



100

土師器(甕)



101



102



104

土師器(高杯)



122



117



115

土師器(碗)



12



15



25



32



36



37



50



53



76



80



81



88

弥生土器(甕),土師器(壺,甕,高杯)



10



11



13



18



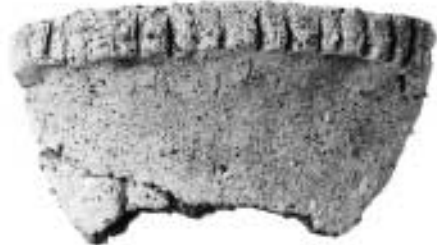
20



21



22



23

土師器(脚付椀, 甗), 須恵器(甗), 弥生土器(鉢, 甗)



35



46



48



54



74



77



78



79

弥生土器(甕,鉢),土師器(壺)



83



86



87



89



90



92



103



106



112



113



114



116



118



119



120



121

土師器(高杯,碗)



1



2



16



19



49



56



66



67



68



69

土師器(壺),弥生土器(甕,鉢),須恵器(杯蓋,杯身)



70



72



73



94



107



108



109



110



111



123

須惠器(杯身,杯蓋),土師器(椀,壺)

報告書抄録

ふりがな	ぐどうなかやまいせきぐんにのに							
書名	具同中山遺跡群 - 2							
副書名	中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	廣田佳久, 畠中宏一							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437 - 1							
発行年月日	2000年7月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° "	東経 ° "	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぐどうなかやま 具同中山 いせきぐん 遺跡群	こうしけん 高知県 なかむらし 中村市 ぐどうなかやま 具同中山	39207	070052	35度 58分 10秒	132度 54分 28秒	19990401 ~ 19990930	2,230	中村宿毛道 路高規格道 路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
具同中山遺跡群	祭祀跡	弥生時代	祭祀関連遺構3	弥生土器	自然堤防から後背湿地へ向かう緩斜面部を中心に祭祀関連遺構(遺物集中箇所)を確認する。			
		古墳時代	祭祀関連遺構3	土師器 土製品 須恵器				

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第53集

具同中山遺跡群 - 2

中村・宿毛道路高規格道路建設に伴う発掘調査報告書

2000年7月28日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉 1437 - 1
Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社